
女鑑

實用女學講義錄

◉新學期開始につき此際至急申込者に限り入會金を免除します◉

▲會長は尾崎行雄講師は教育に經驗の深い專門の大家であります。

▲小學校を卒業してから御自分の御宅に居ながら高等女學校の課程を講習しようとする方は本會にお入りなさい、本會は御存じの中學講義錄で非常な好評を博しましたから、此度は諸孃の御便益を計る爲め、新式の教授法によつて最も親切丁寧な實用女學講義錄を發行します。講義が平易だから誰でも難解の憂はありません。

◎東京市神田區駿河臺 大日本國民中學會女學部◎

▲實用女學講義錄は高等女學校程度の學課は勿論殊に婦人に最も大事な裁縫、料理、造花、編物等を最も精しく最も丁寧に講述します。

▲會員には講義錄の外に姫百合と云ふ女學雜誌を進呈します。

▲女學講義錄は毎月二回發行で會費は一ヶ月五十錢卒業は一ヶ年半

▲會員は自由に質問し又姫百合へ投書が出來會員證票卒業證書等も上ます。

▲新學期を開始して入會の最好機でありますから至急申込なさい。

◉見本のついた詳しい規則書は申込次第無料にて進呈します◉



女鑑第十八年第拾貳號目次



松平越前侯の家庭



侯爵松平康荘君　令夫人節子君

三條公の家庭



令孃 喜美子君　同 艶子君　令息 實憲君

鳩山法學士の新家庭



鳩山一郎君　令夫人薫子君

清水工學士の新家庭



清水熙君

令夫人 常子君


PEARL 毛髪料 CREAM
パール
毛髪の保護發育に注意せらるゝ諸君に告ぐ煉香油パールの有する特効は
黒色の美を全たからしめ特に頭髪の悪臭を去り衛生上唯一の必要品なりと認めらる
Pearl
スミレ香水本舗 東京浜町一 平尾六店


本品の特長は使用法手輕にして最も安全なり
天下一品
千代ぬれ羽
千代ぬれ羽白毛赤毛染は世界有數の同種類中最も其質佳良にして實用に適する樣調製したるものなるが故高價なる舶來品以上の價あり依て世人の賛辭ご需用益々多大なり
本品は全國到る處の小間物化粧品藥店にあり御最寄にて御求めの節は千代ぬれ羽の目印さ市松形函入等に御注意ありたし
定價 大三十錢 小十七錢
本舖 東京日本橋區通鹽町一番地 服部重右衛門

可愛ざかり



坂部大尉夫人 秀子君 令孃 てる子君



森村令嗣夫人 梅子君 令孃 勇子君

跡見玉枝女史と筆蹟



歳暮賣出し

雁の音づれ

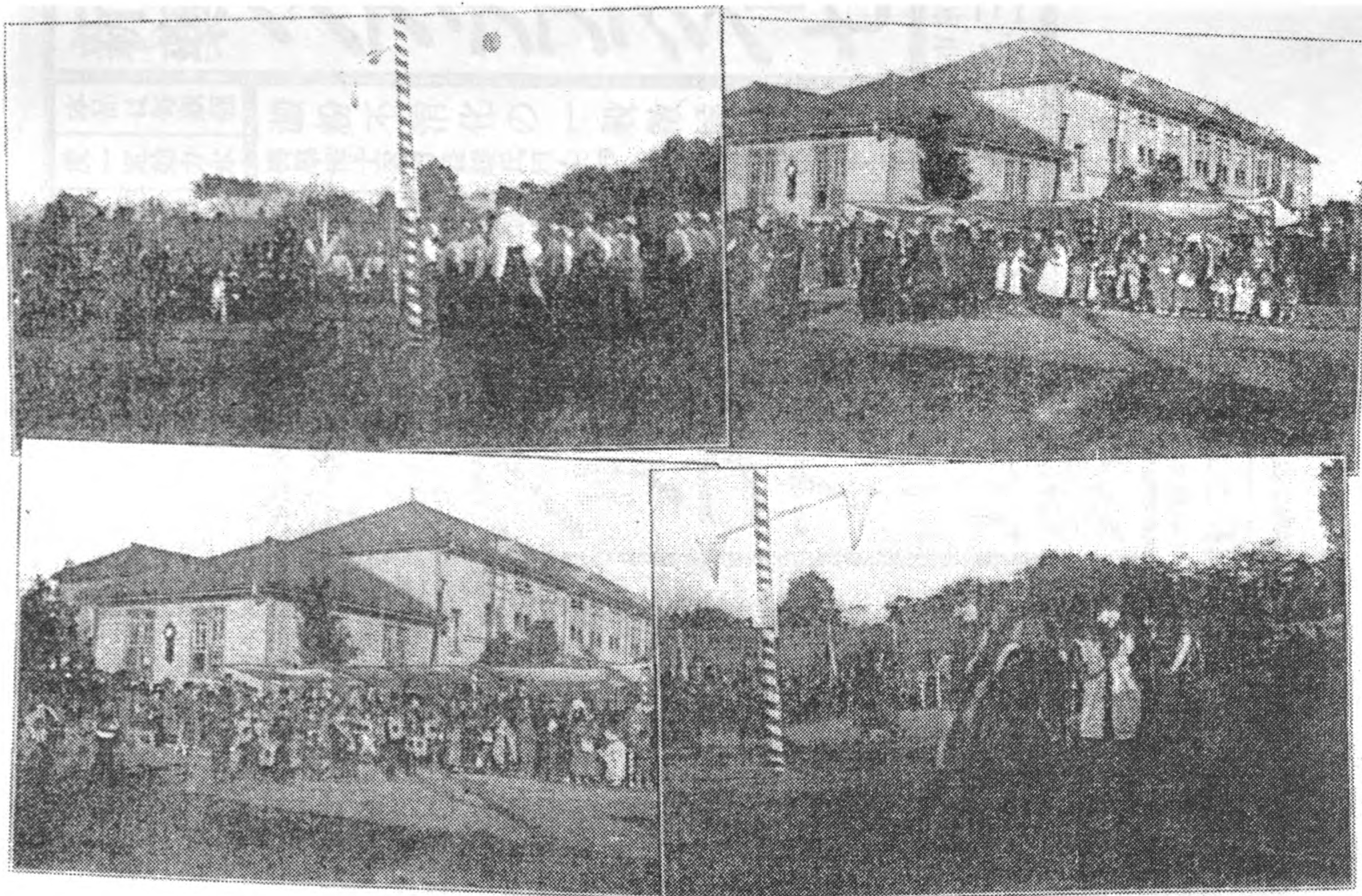


田中正平博士臺灣より



高橋廣湖畫伯伊勢路より

高千穗小學校運動會



男爵德川厚君撮影

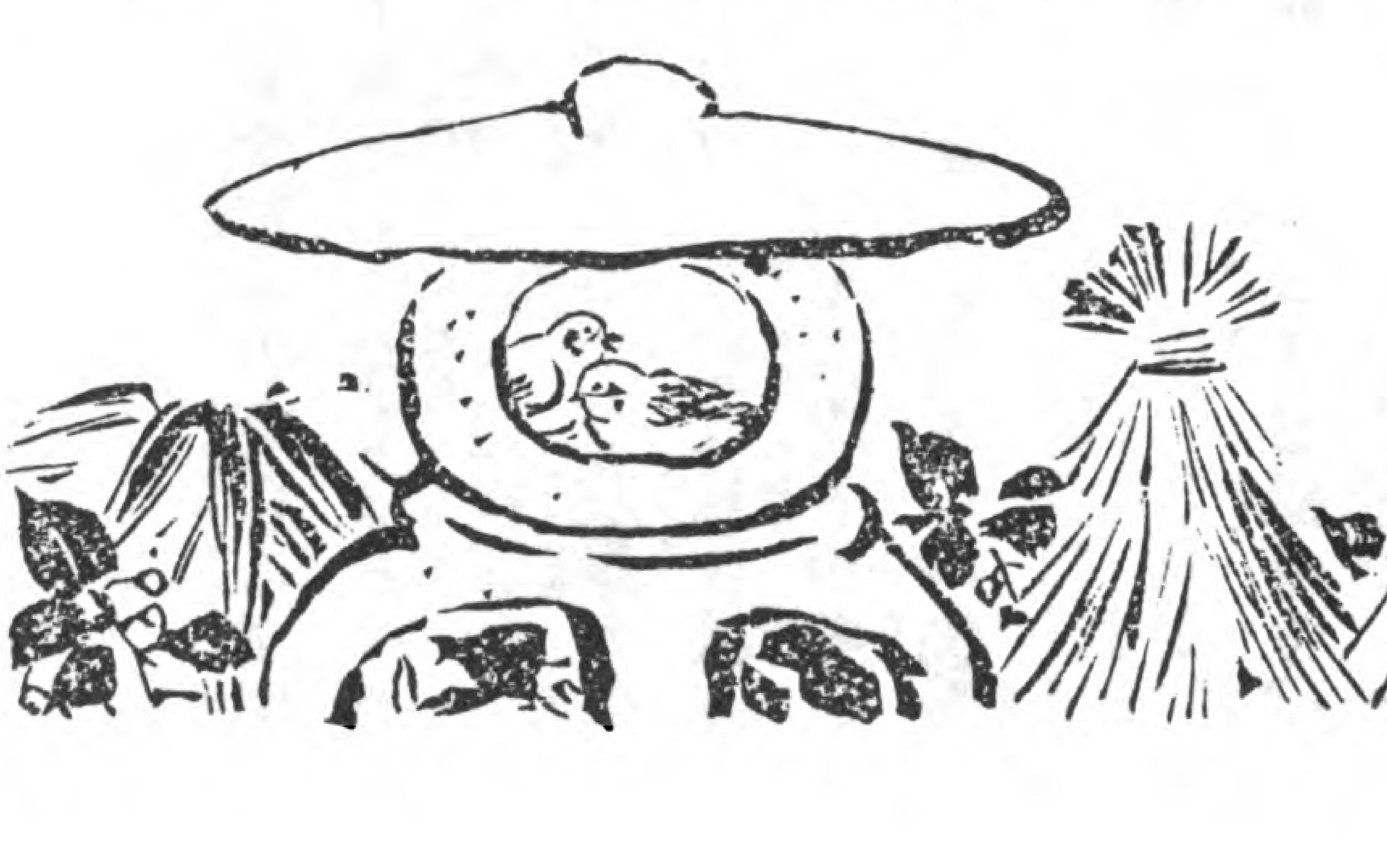


女鑑 第十八年第十二號



年の關

春の朝の勿來の關、秋の夕に逢坂の關、詩歌管絃に幾多の雅囊は絞らせられたるが、年の關を越す事の趣味も亦尋常ならざるべし、この年の關ありてこそ世の中は可笑しくもあり、哀しくもある也、夜明けて働き、日暮れて臥す月日に、殊更句頭を打つ必要もなけれど、所謂折目切目といふものゝ大切なると、人の生活に變化をつくりて、この年の瀬に波瀾をつくりたる譯なり日頃のたしなみよければ、今更年の暮のいとなみもあるまじくなどいふものもあれど、世の中は而く單純にては面白からず、されど一年の勤苦は酬はれて、家族無事に打集ひ、餅つく音長閑に、年の關は越えたきものなり。



詞を正しくせよ

一官省にて國語を自由に破壞されると云ふことは、甚だ迷惑千萬なる話にて、もし五十年前の東京に文部省がありしならんには、その時の敎科書中には、ベランメーなどいふ結構なる言葉も載せられたるなるべし正しき言葉を知れる日本國民が、多年迷惑を蒙りたる字音假名遣は、今の賢明なる小松原文部大臣によつて復活せられ、吾人はその當時大に祝意を表したるが、自墮落なるベランメー的學者は、之に向つて攻擊の矢を向くるれど、斯る輩に取合ふ必要なきと同時に、永劫官省に於て破天荒なる言葉の改造などは見合はされたきものなり、而して頗る當を得たる假名遣復活に攻擊を試むる人に對して、如何に自墮落學者が嘗て謳歌せし棒引時代の小學敎科書は結構なるものなりしか、今も猶用ひ來れる尋常小學二年生の讀本の一節を見るに、

一方には長、駐、巡をトー、ツー、ズンとも訓せぬに、他方には火事をカジと訓ませ、

或行には『かういふ村に』とありて、コーユー村とも書いてなきに、或行には學校をガッコーと記せり、かゝる滑稽なる事を强いられたる、小學敎師の困難云ふばかりなきに、その滑稽に馴れたる今日、俄にまた眞面目なる假名遣ひによれとありては、その迷惑思ひ遣るべきなり、されどその迷惑は善に復るとゝもに少時間の迷惑なり、暫らく二千年來飾ひ上げたる、正しき言葉の爲に忍ばれんことを望む。

婦人の襟卷

寒ければ、襟卷も卷くべし、寒からずとも、昔の領巾の代りに、或は衣服の襟垢を避くる爲に卷くもよし

されど卷くものを撰ぶべし、その風姿をよくせんとならば鳥毛絹の編物など然るべく、また體溫を助けんとならば毛絲物などよかるべし、然るに獸皮を殆んど原形そのまゝなるを卷きたる、優しき女の心には似もやらで、横道にも殘忍にも見えて、その人柄を惡しくすること如何ばかりぞ、こは啻に襟卷のみにあらず、記者は常に婦人の行爲にかゝる矛盾多きを憾む。

犬猫を畜ふ人

一概には云へねど、犬猫を畜ひて、喜ぶ人は、小兒かよく〳〵閑な人也、諺に犬猫にも劣つた待遇をといふことあれど、その犬猫ほどに待遇せられぬ人の多きことかな、正直にして世を働かねばならぬとすれば、犬猫を飼ふ程の閑はなきものにて、閑な人の猶犬猫に依賴するもののあるに至てはお話にならず、掃除の行屆きたる、臺所の取片付きたる家には鼠荒ず、もし一見獰惡の相を呈せる猫に與ふ食あらば、そを直ちに可憐なる姿せる鼠に與ふべし、その鼠決してドブをくゞりて人間にペストを呈する憂ひなし、常に一家に油斷なければ、門に犬の要なく、盜に吠ゆる犬却つて盜に手なづけられ、大切なる客に向つて吠へ、禮を缺く場合少なからず、資産餘りあり、殆んど無聊の人は犬も畜ふべし、猫も畜ふべし、愛畜獸に及ぶこと亦人間の美徳なり、然るに如何にせむ、この犬猫を愛する人の多くは、その犬猫に與ふる三食に拂ふ注意、なか〳〵人にまさりて、婢僕膳頭の歎多き家にありても、猫はゴロ〳〵と喉を鳴らし、犬は彌がうへにも逞ましく肥ゆ世には犬猫に比して恩を知らぬ人多し、寧ろ人を畜はんよりは、犬猫を畜んかな抔と思ふ時なきにあらざるも、これ決して仁者の考にあらず、犬猫よりは先づ人を養へ。

犬猫を畜ふ人に薄情なるが多しとは、犬猫に親しむ暇はありても、廣く世間に立交らぬが故なるべし。

日々の心得

農學博士 法學博士 新渡戸稲造

世の中は毎時も花の三月と思つて居ると、事が違ふ、乃ち斯世の中は始終辛いものであると思つて居らねばならぬ、と云つたからとて、また無闇に何がなしに辛い〱とばかり思込んで居ては、人間が萎縮て仕舞ふから、その間に自から悠揚として迫らずと云ふやうな態度が必要なのである。

當時は男女の學校で、孰れも道徳とか倫理とか云ふ學科を課せられる、即ち男子の側で云つて見れば、君に對しては忠を竭し、國に對しては誠を酬いねばならぬ、約めて云へば忠君愛國といふ事を頻りに訓へ、女子の方面になると、人の妻としては能く良人に事へると同時に家政を整理し、母となつては克く子女を教養して、將來國家有用のものと爲るやうにしなければならぬ、即ち賢妻良母主義といふものを盛んに吹込まれるのである、この忠君愛國といひ、或は賢妻良母といふ事は實に結構である、予といへども決して之を惡いとは云はぬ、また惡からう筈が無いのだが、予の言ふ此だがに頗る意味があるのである、如何に報國盡忠の又は忠君愛國のと教へても、昔から國亂れざれば忠臣顯はれずと云ふ如く、兎角忠臣だとか義臣だとか云ふやうな人は、何うも平生は滅多に顯はれない、顯はれない譯では無いが、亂世の時ほど、力量を彰はす機會がない、そこで顯はれないと云ふやうな事になる、併し忠君愛國の士は欲しいが、國家の亂れると云ふやうな不祥な事は望ましく無い、然らば報國盡忠といふやうな事は、平素然まで誨へて置く必要が無いかと云ふに、それは決して其樣でない、之もだがである。

右は重に男子に就ての話であるが、女子の方面を見ても、まだうら若いといふよりは、寧ろ無邪氣な少女に對つて、頻りに賢妻良母々々々々と、滅多無性に賢妻良母主義を振廻さるゝが、之は大に考ふべき事である、ツイ先頃の事であつたが、ある一少女に、

貴女は學校で如何云ふ修身を敎はりましたかと訊ねると、先生が色々仰有いますけれども、私には何だか薩張解りませんと答へたが、之が前に言つただがに適中するのである、學校の先生が一生懸命になつて訓へて下さる修身が何故解らないのであらうか、何故その誨へられた事を覺えて居ないのであらうか、言ふまでも無く、現今の學校で敎へる所の男女の修身や倫理といふものが、孰れも今より五年十年乃至は十五年も先になつてから入用の事を敎へるのであるから、如何しても忘れ勝になるのである、如何しても身に泌みないのである、それ故に私の惡口かも知らないが、私はこれを見越道德と稱ふるのである、三越と間違ではならぬ、何故私が夫等を指して見越道德と云ふかと、或は不審を懷かれて、是まで其樣な名前の道德といふ事を聞いたことが無いと云はるゝであらうが、そ



れは無い筈である、私が早分りのするやうに附けた名稱であるもの、それは何故かと云ふに、現在の少年少女には左まで必要の無い、五年乃至十年の後に必要な事を見越して敎へるのであるから、そこで私が之を稱して見越道德と名くる次第である、是が即ち前に言つたが◎◎と云つた理由である。

それ故に其樣な遠い五年や十年の先を見越した事よりも、モット手近い事を敎ゆるのが必要ではあるまいかと考へる、即ち朝から晩まで、晩から朝まで、日々手の舞ひ足の蹈むところより、箸の上げ下しから、雨につけ風につけ、夥多の心得べき事があるのである、それに就て予は大略左の四項目に分けて咄す事とする。

第一　有難主義

この有難主義も逐一述べると限りが無いから、その大綱に止めて置くが、まづ朝眼が覺めたならば、床の上に靜かに坐つて、ヤレ有難い事である、昨夜も盜難火難水難は云ふに及ばず、何等の災難も無くして、安々と枕を高うして眠ることが出來た、ヤレヤレ有難いことであると感謝する、若し遠方から出て居る學生達であれば、萬一昨夜の中に國許から、親が大病であると云ふやうな電報が來れば、大切なる親のことであるから還らねばならず、皈れば學事を廢さねばならぬ事に立至るか、左なくとも何日か休まねばならぬのであるが、先づ〱其が無くて今日も安穩に學校へ行くとが出來る、ヤレ〱有難いと感謝し、若し雨が降つたならば、動もすれば、十日か十五日振に降つても、また雨かと云ふのが普通のやうであるが、それではならぬ、サゾ雨が降つて米が熟するであらう、樹茅草木その他の植物類まで喜ぶであらう、嗚呼結搆な雨である、甘露であると云ふ風に有難がり、もしまた旱が續いたれら、サゾかし稼ぎ人は申すに及ばず、總ての人から萬物に至るまで喜ぶであらうと感謝し、その他風が吹かうが雷が鳴らうが、何につけ彼につけ、一切萬端この有難主義を以て見るときは、天地間の物一つとして巳に逆うも

のは無いのであるが、如何も普通世間の人は、雨につけ風につけ、はた箸の上げ下しに付けても不足を云つたり、愚痴を溢したりする、殊に神經質の者などは一層それが激しいで、詰らない事にも下女を叱り飛したり、又は劒突を喰れたりすることが多い、凡て其樣いふ人々は、朝起きて洗面する前に、ジツト床の上で此有難主義を繰返すが宜しい、其樣さへすれば無闇に下女を叱り飛して、下女の機嫌を損ずるやうな事のあるものでは無い、何事に附けても

　自分の心の持ちやう一つで

如何ともなるのである、同じ世の中に暮すなら樂しく暮した方が得で、其樣するには此有難主義に限るので、之さへ服膺して居れば、物事に麁相も無ければ、麁末にする氣遣もなく、物に不滿不足といふものを感ずるといふ事は決して無い。

第二　有難主義實行の一

　雨につけ風につけ、はた善につけ惡につけて、嗚呼有難いと思はうとするには、如何したものかと云ふに、すべて人世を憂ては不可ない、貧乏人から見ると富豪は氣樂さうで羨ましいに相違ないが、或雜誌に、一富豪が貧乏人の境界を羨んで、サゾ貧乏人は氣樂で宜からう、金錢を盗まれるといふ心配も無ければ、又持つた金錢を失なはぬやうにしたい抔と云ふ氣掛りが無くて、斯んな氣樂なことはあるまい、嗚呼貧乏人の境界は羨ましい、一日でも好いから彼アいふ境界になつて見たいと云つたと言ふことが出て居たが、もし之を、朝は食べたが晝食は如何しやうと云ふやうな貧乏人の身になつて見ると、嗚呼富豪になりたい、金錢さへあれば、食物は食べ放題、綺羅は着け次第、物見遊山は思ふ存分出來て、何處へ往くにも馬車や人力車で、少しも足の疲れると云ふことは無く、如何なに樂しからう、如何なに嬉しからう、といふやうに富豪の境界を夢みて居るのである、して見ると斯世の中に、金錢の有ると無いと孰れも極端と極端になると、斯くまで相違があるのである、去れば何方が好いかと云ふに、予は何方も

悦ばない、予が悦ぶものは中流である、何故といふに、上流のやうに其樣附合が張るとか、又は外見を飾らねばならぬといふやうな事も無ければ、其樣かと云つて極下層のやうに、その日暮しに追はれると云ふやうな事も無いのであるから、此位安心な事は無い、併し其が一歩何方へか蹈出して、上流の眞似をすると、直ちに產を破るやうな事に立至り、また努めて下層の狀態を學べば、遂に世の中に容れられないやうになるのである、然らば如何にして能く其地位を保つて行く事が出來るかと云へは、何事も控目にすると同時に、僅かな事でも樂しく思うて日を送るやうにさへすれば、決して間違のあるものでは無い。

第三　有難主義實行の二

前項は實行といふ中でも、重に心の中に屬するものゝ事を畧說したのであるが、玆には少しく其が外部に現はれたる點から見たもので、右の樣にするには如何したら宜いかと云ふに、之を通俗に早分りのするやうに云へば

人のアラを見ぬこと

である、この人のアラを見ぬといふ事は何でも無い樣であるが、之は婦女子の最も長所であると同時に、最短所であるが、これは最も婦人に取つて不幸のごとく云はねばならぬ、例へば、他人の衣服を見て似合うとか似合はぬとか、また縞が粗いとか細かいとか、色が燻んで居るとか派手だとか云ふやうな事を言合つて、互に突ツついたり笑つたりする、何も他人の衣服が似合はうが似合うまいが、又は縞が太からうが細からうが、言はゞ要らざるお世話と云はなければならぬ、一體斯いふアラを見附けて兎や角云ふのは、その實煩悶の結果である、女子が煩悶すると云事の九分九厘九毛までは皆人のアラのやうである、昔から人の過を見て鑑ると云ふ事は言傳へられてあるが、今日の女子百人中で實際この格言を遵奉して行くものが何人あらうか、第一隣りの人は斯く〳〵であるが、妾は左樣でない、誰某さんはアゝ言

つたが、妾は左様は言はない、と云ふやうに成るべく自分のアラを隠さうとする、之は甚だ宜しく無い、ゆゑに例へば、跛の人を見たとても、貴女の左りの脚は短かいが、右の脚ほ長いといふよりも單に右の脚は長いと云つて、短かい左の脚の事は云はぬ方が宜いのである、餘りアラを言ふと、其人は遂に怖けて仕舞ふ、けれども其アラを許してかゝれば其人はます〳〵其長所を揮うと同時に、必ず其アラをも改めて行くものである。



第四　有難主義實行の三

は外でも無い、これとて矢張心を離れたものでは無い、則ち

人の短所を許せ

といふ事である、何か麁相等があつても、よく其筋道を尋ねると、大抵は最の理由のあるものである、普通世間で何故さうしたか、何故かうなつたかと云ふて責たり詰つたりするものがあるが、若しその何故の理由が判つたら、大に面目を失するやうな事がある、是は實話であるが、暫く其お名前はお預りとして、予の知人の家に召使はるゝ一人の下婢が、ある朝奥様のお給仕をしながら、ツイ手が顫ひてお汁を溢すと、奥様は何故其様なことを爲たかと訊ねらるゝと、口答を申上るのでは御座いませんが



何をお隱し申しませう、私の良人は去三十七八年の役に戰塲の露と消えましたので、少からず頂物をいたしましたが、その亡夫の遺紀念なる一人の男の子を育てゝ、如何か跡目相續をさせたい、その恩賜は其子の教育費として里に預け、私の身は此方へ御厄介となり、月々頂くお給金の幾分を其補足にと送つて居りました所が、本年は高等科一年へ入つたと云ふので實は悅んで居りますと、昨夜突然電報で其子が急病で歿なつたとの知らせ、そこで昨夜は徹霄行末杖とも賴む子供には先たゝれ、柱となるべき良人には逝かれ、それやこれやを考へると共に、自分の身は此先如何成行くことかと思ひますにつけ、寢ても眠られず、一人床の中で胸を痛めて居りましたので、マンヂリとも致さぬ爲に、チヨツト身體の調子が異い、その爲手が顫ひて斯くは麁相に及びましたが、決して惡い心では御座いませんから何卒か御許しをと詫入つたので、之を聞いた奥樣は、何故と云つたばかりで、今その何故の理由を聞かされて、

坐ろに貰ひ泣をせられたと云ふ咄がある、であるから、餘り何故などゝ云つて人の短所を責ぬが宜い、

物は思ひ樣、心は持ちやう

といふ事は前にも云つたが、澁皮の婆アさんが嫌だ、彼れの顏の創が癪に觸る、蟲が好かないと云つて見るものゝ、その澁皮の婆アさんの顏の皺は、是まで既往數十年の間、世智辛い世渡りと鬪つて來た紀念の浪であると思へば、坐ろに同情に堪へぬのである、又ある男子の顏面の創傷は、何處其處の戰爭に蒙つた創傷だと聞いたならば、如何か私にもと云ふまいが、轉た畏敬の感に驅られないものは無いと等しく、すべて世の中の事柄は見樣に依つて如何とも解釋の出來るものである。

それに附けても吾等が忘れてはならぬ事は、古へから人を見たら泥坊と思へといふ事がありますが、予は其樣云ひたく無い、

人を見たら凡て善人と思へ

決して惡人といふものは一人もない、と斯う云ひた

い、否、思つて貰ひたいのである、もし惡い事をした者があつたら、彼れは具體的に吾に斯ういふ事を示す好標本であると、斯う思ひさへすれば濟むのである、故に予は飽くまで、縱んば欺かれても、人は善いものであると信ずることを勸むるのである、然すれば決して人の短所が許せぬと云ふやうな狹量に陷るの弊は無い。(文責在記者)

冬虫夏草の話

理學士 佐藤清

昔の傳説には、種々不思議な生物のお話があります、先づ皆樣の御存知の鵺といふものなどは、頭が猿で体が鳥、おまけに尻尾が蛇といふ、獸ともつかず又鳥ともつかず、誠に奇妙な生物であります、此外人魚といつて、頭が人間で体が魚のものや、または人面草など申して、植木に人の顏の附いたものなど、數へ出すと却々澤山あります、サテ斯樣な物が實際居りましたか如何か、夫は昔の話ですから斷言は出來ませんが、開明の今日進歩して居る博物學の上から考へて見ますと、何うも居なかつたと思ふ方が穩當の樣であります、所で、私が今お話しやうとする冬虫夏草といふものは、半分が菌で、半分が虫で、菌のやうでもあるし、又虫のやうでもあるといふ誠に奇体なものですけれども、之は決して傳説でも何でも無い、探し方によつては諸君も得られぬ事はありません。

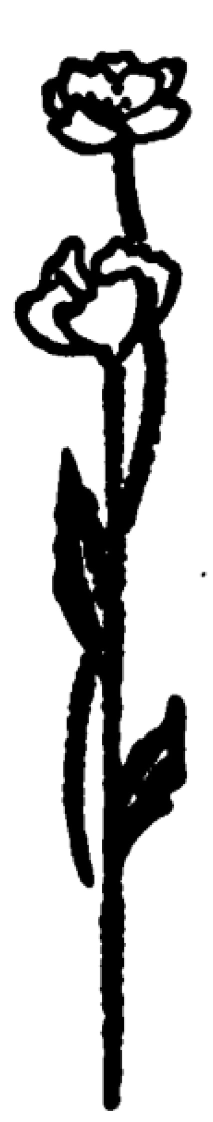
日本で一番普通なのは蟬花といふのであります、之は蟬がまだ翅が生へずに、地の中に居る時分、菌の種が附着するのであります、所で、其時霖雨でも降つて、外へ出やうとして、出られなくなると、蟬の体は次第々々に衰へて參ります、さうすると菌の發生が倍々盛んになりまして、蟬の体一面に蔓延し、遂には蟬が死んでしまひます、さて蟬がいよ〳〵死んでしまうと、其頭から此菌がごし〳〵芽を出します、昔の本を見ますと、近江や、大和、その外京都

などが名高い產地だと書いてあります、數年前の事ですが、私の友人が丁度蟬の出る頃大和へ參りました、私は蟬花の話をして探すやうにと勸めまするど、その友人は彼地へ參つて探したさうです、すると茶の木の下に似たものがあるので、それを堀出して見ると、果して蟬花であつたさうです、之は決して大和には限りません、日本全國大抵な處にはあります又決して蟬にも限りません、甲虫であらうが、蜘蛛であらうが、その外蠅、虻、椿象の類にも澤山あります、之からは段々昆虫も出る時節になりましたから、一つ大いに奮勵して探したら何うです。

海を隔つるニユージーランドには大層此の大きなのがあるさうで、その頭にある菌は、地上に二三寸も顔を出して居る、而して其菌の頭には點々が附いて居るが、之を胞子といふもので、此粉が風か何かで飛ばされて他の虫の体に附くと、直ぐに其所から芽を出すので、中々小さいけれども油斷はならない。

この冬虫夏草に就ては、古來種々なる臆說が行はれたのであるが、その中には、植物が一寸動物の眞似をしたのだといふ說もあるさうです、もつと面白い說になると、昔し神樣が種々の物をお造りになつた時、虫を造らうと思つて、出來損なつた半分が菌になつたのであると申して居ります、しかし是等は皆虛僞の說であつて、眞實は前に述べた通り、胞子といふチヨツト目には見えぬ程の小さなものが取付いて、之がとう〳〵虫を殺して立派な菌に成るのであります。

斯樣に小さな菌類の爲に殺されるのは、決して虫ばかりではありません、最高等の我々人間でも、菌類の爲に病氣になつて死ぬ事が幾らあるか知れません、誠に恐るべき次第であります、であるからして、同じ菌類を食するにしても、無暗に名も知れぬものは手を出さぬが宜しい。



昔の婦人

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子

明治以前は當今のやうに女學校といふものは無いのであるから、女子が敎育を受けると云つても、謂ゆる寺子屋といふものへ行つて受けるのであるが、その受ける所の敎育と云つても、ホンのいろは敎育といふ位のものであるから、迚も今日の女學校の敎育と比べものになるものでは無い、それで其寺子屋でいろは敎育を受ける者も、是また今日のやうに權兵衞の娘も太郎兵衞の娘も受けるのかといふに、決して左樣でない、その敎育の恩澤に浴するものは、之を今日の言葉で云へば謂ゆる中流に位する所の婦人に限らるゝのであるから、その他の者は、言はゞ其德澤に預かる事は出來ないのである。

それ故に前にも云ふ如く、その寺子屋敎育なるものが極めて卑近ないろはと云ふやうなもので、外國歷史の物理化學の、はた數學の地理のと云ふやうな物を敎はるのでは無いから、智育の點から見ると、昔の婦人と今日の婦人とは全で雲泥の差があるのである、現今の婦人は實に仕合せで、學校に於て種々なる學科を授けらるゝから、智識の點に於ては昔の婦人に比ぶれば數等優つて居る、けれども昔の婦人は此點に於て劣つて居るのであるが、併し昔の婦人だからとて何れも是も無智識だと云ふ事は出來ない即ち學者もあれば悟道した者もある、例へば、光明皇后の如き、加賀の千代能の如きは其一班である。

當今は蝦茶袴さへ着ければ、貴賤貧富の別なく女學生となり得らるゝので、そして通學するから孰れも一ト通りの智識を有つて居る、といふものは敎育普及のお蔭であると云はねばならぬ、斯く敎育の普及と同時に女子の智識が發達するといふ事は誠に慶ぶべき事である、私は之を慶ぶと同時に、大に痛心に堪へない事がある、尤もそれは一般では無いが、如何も今日のやうに何れも是も學校へ通ふと云ふ所から、粗製濫造の謗を免れない、この一事である、

徳川時代には天才又は篤志の婦人が、何か皆立派な目的を有つて、同じ學問をするにしても遣つたものであるが、今日のやうに隣りの誰某さんも學校へ行くから、そこで私も行く、といふやうに不眞面目に無意味に袴を着けるものは無いのである、言を換へて云へば、昔と今の女子とでは全く別物のやうに考へらるゝのである、蓋し

女子の位置を高め人格を高くする

と云ふに就ては、固より歐米諸國と比較して、彼の長を執つて我短を補ふといふやうに爲なければならぬのである。

一体昔の婦人は概して意志が强固である、尤も昔平安や奈良朝時代の婦人は意志が軟弱であつたが、降つて鎌倉時代になつては、一つは四圍の狀況即ち干戈を交へつゝあるので、殆んど油斷も隙もならぬと云ふ時代であるから、男子は固よりであるが、從つて女子も一層の覺悟を有つて來て、何時とはなしに意志が鞏固になつたのである、其頃から引續いて

明治の初年までは、謂ゆる武士氣質といふものが傳はつて來たのである、即ち昔の婦人の貞操の堅固であつた事は、時としては自己の生命を犧牲に供してまでも守るといふ風であつたのであるから、從つて男女間の關係の如きも實に見上げたもので、成らうことなら

今日の婦人の藥にしたい

位のものである。

聞く所に依れば、近頃は大部世間に自然主義とかいふ事を唱へられて、薄志弱行の婦人は大に之を歡迎せらるゝ樣子のやうに聞き及ぶが、何うか左樣いふ婦人は勿論のこと、その他一般の婦人にも武士道を心得て精神の修養をして貰ひたい、昔の婦人は凡て大義名分といふ事を深く心に銘じて居つたものであるが、今日の婦人の執らるゝ方針は總て利己主義を本として居らるゝ、即ち何々の事情とか又は交際を爲るに附けても、凡てこの利己主義から割出して往くのであるが、昔の婦人は其大義名分の爲に進退

を決したものである、即ち楠正行の母の如きは好き標本である、また私が教を受けた梁川星巖翁のお連合の紅蘭女史の如きも、星巖翁が國事の爲に盡瘁せらるゝに就て、何呉となく良人を助けて志を成さしめた事は、實際私が目撃して居る事で、毫も僞りの無い咄である、それらを見聞するに附けても如如に昔の婦人は意志が強固で、そして大義名分といふ事を重んずると同時に、貞操が磐石の如くであつたかと云ふ事が窺はるゝのである、之に引換へ當今の女子には遺憾ながら此献身的の考が薄い、之は大に戒愼すべきことゝ思ふ。

次に昔の婦人は、女德といふものを以て生命として居た、德川時代の教育は儒教主義であつたから、多少女子を抑へ過ぎたといふ傾があつたので、智識を高める事をしなかつたと云ふ缺點はあるものゝ、却つて其智識を薄からしめたといふ事が、寧ろ女子の幸福であつたかと考へる、昔の女子の教訓といへば、まづ女大學などであるが、この女大學といふ書籍は現今兎角の評があるが、全然これを斥くる事は出來まいと思ふ、固より今日の社會に適合しない箇處は取去るが宜しい、併しその今日の社會に適切で無い處があるからと云つて、その長所までも合せて捨去るには及ぶまい、乃ち宜しく其長所は採用うべきものではあるまいか、その中に示されたる女子の貞淑とか溫和とか、はた柔順とかいふやうな事は、凡て女大學の通りにして毫も差支なからう、否、左樣しなければ不可ないと考へる、今一々その中の語句を摘出することは煩に堪へないから省くとして、概して云へば、其中に説く所の言は、何れも女子に適切な緊要の事のみが説き示されてあるのである、

道は邇きに在り

といふやうに、その學びたる所のものが、現在我等の生活に對して適切なもので無かつたとしたならば寧ろ學ばざるに如かずであらう、それよりも戸締りとか、鼠の用心とか、又は流しの掃除、板の間の拭き掃除と云ふやうな手近な事を學ぶに如くは無い、

又敎ゆるが可いのである、昔の婦人は凡て左樣いふ風に養成せられて來たのであつて、それで敢て不都合は無かつたのである、それ故に現今の婦人も、宜しく昔の婦人に學ぶべき所は學び、女大學に採るべき所は採り、さうして女子の淑德を全からしめられたい事を望むのである。（文責在記者）

女事務員日記

羽栗くに子

筆者は東京市内の某生命保險株式會社の事務員です、全社は目下女員二十餘名を收容し、通常午前九時出勤、午後四時退社の規約に從ひ居る者、常務の餘閑巨細となく日記に誌し置きしが特に請うて最近の分を揭ぐ。

▲十一月四日　曇　今朝割引電車何れも滿員にて、三臺も遣り過ごし、例になく八時廿五分社に着く、花井さん、松村さん、吉川さん缺勤、花井さんは風邪の御樣子にて亦吉川さんは姉樣お出產遊ばされしも產後お肥立惡く看護のためとか庶務岸田老人の話なり、午前十一時頃京都代理店のカードを調べたるところ、被保險者越村善兵衛の分不足す、證劵發行番號は壹〇七八參なり、晝食、午後長谷川主任樣より代理店勘定の速算を命せられ、一桁を讀み違へて笑はれたり、四時三十五分歸宅。

▲十一月五日　晴　午前八時出社、花井さん、吉川さん引續き缺勤遊ばさる、主任樣例になく御不興にて、山部さんカード五枚餘り保險金解約記入に違算ありたりとて叱責さる、此方は元來無口の方にていらせられ、僅の事に顏を赤く遊ばさるゝの癖あり、お齡は十八と仰せらるれど今少しお若い樣に見ゆ、入社遊ばされて十日位なれば未だ事務にはお馴れ遊ばされず、それでは叱り遊ばす方が無理だなどゝ思ひ浮べぬ、主任樣のお宅は麻布にてお兒一人ある由に承り居れどよくは知らず、晝食の休み一時間にて時事新報の季節料理の記事をノートに拔書し、女鑑、婦人世界を通讀せり、午後三時天氣模樣惡しくなりし爲、松村さん傘を忘れ遊ばされたりとて悔む

四時十分歸宅。

▲十一月六日　雨　前夜靖國神社の大祭に赴きしため疲勞多く午前八時三十分出勤、吉川されお出でになりて姉樣の御模樣稍快方に向ひゐれど尙心許なしとて庶務課に届出でゝ歸宅さる、主任樣如何に覺しけん、妾に向ひて此頃の事には限らざれど、會社銀行に出る女事務員の多くは、辨當箱ばかりの携帶にては心恥かしとの意か、博文館の當用日記、婦人雜誌、其外厚さのある洋式の本二三冊を重ねて來る





もあり、中には古新聞などを束ねて恰も學校通ひの生徒風を眞似たがるとの仰せなり、負けず嫌ひの松村さんは直ちに引取りて『そんな事はありませんわ』と答辯遊ばさる主任樣も隨分なお方だと思ひぬ、午後四時歸宅。

▲十一月七日　晴　今朝電車内にて知人なる元振替貯金管理所の雇員でありし難波つぎ子樣に會ふ、此方一旦お嫁に行かれた由なれど、妾と同じ海老茶の袴著け居る御樣子より承れば、再び

他所へお勤めに出られしにはあらざるかと思ひたれど聞かず、つぎ子様も餘りお打明け遊ばすのを好み給はざる樣子なりし、八時十分出社、花井さん風邪全快せりとて出勤遊ばさるお顏の色未だ惡し、今朝主任樣より金澤代理店勘定整理の事務に從ひくれと新らたに命せらる、カードは永田さんの書きたるもの、此方はペン字は大層お上手にいらせらるれど、お筆の文字はお健者の方に非らず、最も時々女學世界のお歌の募りに應せらるゝを見れば多少文筆のある人なるべく思ひぬ、午後速算五回、四時歸宅。

▲十一月八日　晴　日曜午前自宅にありて、洗濯、午後吉川さんのお宅に遊び夕刻歸宅。

▲十一月九日　曇　電車内にて萬朝報を讀む、午前八時十分出社、主任樣よりカードの書換十枚を命せらる、速算五回午前中に終る、午後吉川さんの書かれしカードのペン文字餘りに巧者を極めしとて注意さる、晝食の際少し腹痛の氣味ありて工合惡るかりしも松村さんより仁丹六粒を頂戴して全快す、此日事故少し、四時歸宅。

寧ろ平凡主義を執れ

小崎弘道

從來からでも爾うですが、兎角我邦の女子にしろ亦男子にしても、非凡な人を以て自已の理想とすることがある、決して惡い事ではないが、是一面から見れば慥かに教育の弊であると考へます。

女子が理想の人

を西洋で云ふと、慈善家エリサベスフライ(英人)とか、教育家のメリーライオン(米人)とか、若くはフロレンス、ナイチンゲール(米人)など、日本では、紫式部、清少納言と云つたやうに、多くは普通以上に超絶した人物を理想の主格として仰いでゐる、勿論如上の人々は現世間に幾多不朽の教訓を貽した偉大な功績に富んでゐるのは云ふ迄もないが、餘りに是等非凡な人を過信し崇拜した結果は、寧ろ學問の目

的を過ることが多くはないが、自然實世間に遠ざかつて行くやうな傾向になりはせまいか。

平凡主義とは何ぞ

そこで男子にしろ、女子にしろ、現世に觸るゝことの遠い偉人を理想として、絲毫も是等人々の行ひに習ふと云ふ事より、却つて社會の平凡に處しては平凡な仕事を生眞面目に遣り通すと云ふのを主格とした方が人生必須の目的に適つてはゐまいか、人間が此世に生れて偉いことを企望するのも骨は折れるが、平凡な生活をして、平凡な人物の間に立交つて行く事も尚一層むづかしいと思ふ、今の女學生諸子は果して此平凡な任務を負ふことが出來るか否や。

大不平、大不滿

諸子は近世の學問を知り、少くとも道に賢なる者である、然るに好むに非らずして自ら平凡な生涯に投じ、平凡な人物を自分が終生の良人視すと云ふ事は出來得るか什うか、若し出來得た處で所詮は大不平、大不滿に終らねばなるまい、併し大人物と謂ひ、大學者と謂ひ、苟くも人の師表となる可き者は自らならんと欲してなるのでなく、天から授つた大才である、先天的に與へられたもので、普通人のたやすく企て及ぶ可き者ではないのです、其故平凡な生活の間に安心を求めて、一生を清く、正しく且樂しく送るのを以て通常滿足せねばならないと思ふのです。

自己の天分を知れ

殊に婦人は他の家に嫁ぐ責任あるものとして、良人を撰ぶのも矢張平凡の間に求め、そして滿足して行かねば到底幸福は得られまい、徒らに理想が高くて其旨に副ふことが出來ず、懊惱し、煩悶し、大不平、大不滿を以て日も是足らぬ樣では困るではありませんか、要は自己の天分を知ると云ふのが肝腎です、だから女子の敎育に最も力を用ゐねはならぬのは

德育である

足るを知ると云ふことは第一に注意せねばなりま

せん、自己の立脚地を自覺し、天から授つた職分の程を悟り、進んで平凡な生活の中に無盡藏の趣味を見出して、高潔な理想を果すと云ふことは頗る大切でなければなりません、嘗て或高等女學校長が生徒に向つて、婦人の最も謹まねばならぬ不德だと云つて

嫉妬、僞り、他言

の三ッを擧げた、女子の大いに戒めねばならぬのは勿論ですが、これは封建時代の女訓に基いたものです、他言なり、嫉妬なり戒む可きは戒む可きですが、猶心得なければならぬのは、申す迄もなく。

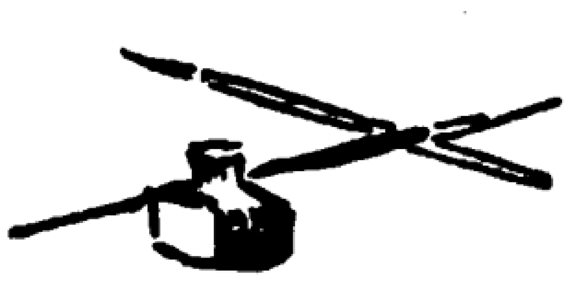
眞實、貞節

であらうと思ひます、近來盛んに奢侈の風が流行して、女子の虚榮心を挑發し、次第に眞摯な、民俗を害ひ、ために女子の根本である、貞節にまで影響して來たのは決して看過す可き問題ではないと思ふ奢侈の惡風遂に滔々として盡くる時なくんば、社會は何れの世か闇黒に葬られて救ふの機會を失ふに到

るやも計られません、戒愼す可きことではありませんか。

女子の墮落せる原因

を見るに其十中の七八は先づ、女子自身の虚榮から誘致した失敗である、私は女子が理想の人を徒らに高きに求めて、通常平凡生活に何等の顧みる處がないからだと思つてゐる、今後の女子の心得方としては須らく平凡主義の人となり、平凡の間に立命慰安の道を講ぜんことを望むのであります、然かせんか自然圓滿なる心性の發達に伴ふて、漸次善美なる理想境に到達し、無爲而化する底の生涯に入るだらうと考へます。





婚期を失ひたる實例

河添壽々子

什うも女學校なぞを卒業なすつた方は、氣位ばかり高くて、ヤレ學士を良人にせねば恥かしいの、下女を傭はねば家政の整理が出來ぬの、姑は嫌ひだからなるべく獨身の者で財産がある家でなくば落附かのぬと、色々注文をお出しになる、最も多少高等の敎育でも受けたものが、全く無學の人に嫁ぐと云ふ事はよくないことであるかも知れません。

第一意見が合はぬ

やうなことがないとも云へませんね、よくある例ですが娘の親が相手方の財産に絲目を懸けて本人の心の中も調べて見ず、唯鄕里での門閥家であると云ふのに惚れて娘を無理遣りと嫁がせる、娘は幾分敎育は當世風に受けてこそ居れ、相手の良人はホンの小學校を出たばかり位とすれば、何かにつけて自分が社交の表に立つ機會が多い、固々敎育の智識に於て物足らぬとすれば勢ひ良人をないがしらにする樣になる、良人は一圖に家長權を笠に着て、頭から遮二無二に押へつける、それが昔風の貞女主義に養はれた女大學流なら、別に問題にもなりませんが、何を云ふにも相手は生學問があるのでせう、そこで。

良人を馬鹿にする

ことになる、是が嵩んで一家の平和を破るので、終には別れ話が持上ると云ふ順序になるのですから双方ともよく〱調べやつて、趣味や嗜好の點にまで衝突のないやうにして置かねばなりません、自分が惡いから云ふのではありませんが、殿方にしても顏の好惡や、又財産なぞに重きを置いてゐるなぞはいけません、なーに顏が美しいとか何とか云ふことは、所帶始めのことですよ、一家を組織して可愛ゆい嬰兒さんの一人二人出來るやうになりましたら、それどころの話ではないのです。

虛榮心を除くこと

女子の特性と云へばそんな樣なものですが、凡そ

この虚榮心ほど恐しいものはないと思ひます、虚榮と嫉妬は女子の最も禁物とせなければならないもので、この虚榮心のためあたら花盛りの婚期を失つた實例は世間に澤山あります、私の妹の友達で山沼つぎ子（名は態と變名を用ゆ）と云つて關西代議士の娘さんで當年二十七歳におなりですが未だに嫁入口がないのでございます、イエなかつたのではありませんが、お父さんの代議士さんが早く奥さんにお別れになつて後妻をお貰ひにならず、萬事家の方はつぎ子さんが切廻してゐましたし、代議士の娘と云ふところで本人の

　氣位が非常に高い

且又、常に交際場裡に出る機會も澤山で、學校の同窓會とか、婦人會にはいつもイの一番にお見えになるのです、そればかりでなく、お父さんの選擧の時は必ず自分が運動員となつて、町の有權者の家を叩いて、投票方を頼んで廻るのです、大變勝氣な御婦人で、鳩山春子さんの二代目だなんて町では評判

が大したものでしたよ、かう云ふ氣風の人ですから何事もハキ〳〵してゐます、土地の聯隊の去る大尉から是非にと貰ひに來たこともあつたのですが、お父さんの手離し兼ねたところへ持つて來て本人は

　いゝゝ
　やりくり大尉は厭

だと申すのです、そんなら什麼處へ嫁に行くかと尋ねると、一流の政事家である學士に片附きたいと云ふのです、隨分鐘と太鼓で探したら無いとも云へないでせうが、如何にせん、田舍のことですゆゑ、遂に今日まで何處へも嫁げないのです、それで本人も今更、同窓生の手前、世間の聞えもあり、滅多なところへ嫁ぐのは恥かしいと申して、モウ一生嫁に行かず、お父さんの側にゐると云つてゐるのです、殊に本人はお心からとも云へませうが、可愛想なのは妹で、矢張女學校の補習料まで卒業して當年二十三歳です。

　姉が嫁がぬ故嫁がれぬ

と申してゐるので、親族の方々が色々心配なすつ

てですが、什とも仕方がないので、お父さんはモウ諦めて妹の許附け先は誰でも構はぬと申してゐるのです、併しこればかりはソウ勝手にも參りませんし虚榮心もよく〳〵心得ねばなりませんと思ひます。

先づ相應なところ

と云つてむづかしいですが、あれやこれやと餘りに御注文が澤山ですと、前お話申した代議士さんの娘のやうな事になります、自分の家格にくらべて大層な優劣があつたり、敎育の程度、趣味の傾向にも心を止めず、婚期だから嫁入らすと申すのも輕率ですけれど、女子の全盛の時は三日見ぬ間の花同前、決して油斷をしてはなりませんと信じて居ります、這麽事は解り切つた話ではございますが、常に世間にある例ですから、一言申上げた次第です。



月下虎

小川直子

人も通はぬ深山の奥に、冬のなかばばかり深山木どもは、皆木枯にふきはらはれて、いと淋しげなるにある夜、久方の空にはちりばかりの雲もなくて、入かたの月清う澄みわたれるもこゞしき岨道のかたへなる篁の蔭のみ、さすがに小ぐらきもいみじう物すごし、そが中にひとつの虎のたゞずめるが、猛き姿にはあらで、こま犬のやうに手をつきて、居たるは、月のあはれを知るにやあらん、人ならば實に琴をもかきならしつべき夜の氣色ながら、さるわざこそはせざれ、靜にうそぶきつゝ樂しめるさまに見ゆるもいとをかし、かゝれども此虎よひと度物に感ずる事ありて、猛き心を振り起す時は、忽ちに山鳴り谷答ふるばかりの大なる風を起し、草木をうごかし萬の物を大空まで卷あげなどもすと聞くぞいともかしこきや、つく〴〵思へばけだ物すら猶かゝるくす

しきわざはあるものを、世に萬物の長とも呼ばるゝ人と生れたらむ物の常は、風流の業にのみ心をとゞめ、月をめで、花をながめて、興じ樂しむとも、ひと度事のいで來む折は、此風を呼ぶ虎よりも猛く、彼の雲を起す龍よりもくすしく、大和心をふり起して、外國人は目をも驚かすばかりのいさをしたてずでやはあるべきと、ひとりごつ折しも、さと吹おろす深山おろしに、竹むらならぬ我心先づうごきて、そゝろ寒くこそおぼえしか。



日本善

文學士　三輪田元道

日本善といふ熟字は是まで無いのであるが、これは世界善といふ語に對して日本善と云つた迄で、別に深い意味があるといふのでは無い、强て之を解釋したならば、日本善といふのは世界善に對する窮極の善を名くるので、日本國民の道德の政策、この政策といふ語は經濟學上の術語であるが、種々の塲合に使用せらるゝのである、即ち英吉利善は何であるかと云ふに、第一は殖民政策、英吉利の領分には太陽が沒するといふ事は無いとまで此政策を執つて居る、第二は何かと云へば商業である、この英國も昔時は農業本位であつたのであるが、如何も追々人口が增加すると共に、その產する所の農產物では僅か六ケ月か乃至七ケ月位しか保つだけの物しか無い、そこで殖民政策、商業政策といふものを執るやうになつたのであるから、凡て契約の仕方でも、又は商

法上に於ける爲替と手形とか云ふものに至るまで、すべて輕便で英國式に行つて居る。

米國は如何かと云ふと、知らるゝ如く自由を尊ぶ國柄であるから、殖産でも工業でも凡て米國式の自由である、啻に殖産や工業ばかりでは無い、彼の大統領の選擧の如きも、その競爭の激烈なることは實に豫想外であるが、併しその競爭は正々堂々たるもので、謂ゆる君子の爭を云つたやうで、毫も陰險な卑屈な權謀術數などを用うると云ふ事は無い、それ故に人格の程も慕はれるのである、元來人格とは完全なる自由を有つて居るものを稱するので、米人の如きは實に此高潔な人格を備へて居る、これが米國の善である。

次に獨逸は軍隊や學問を以て獨逸善として居るので、その學問と云つても、成るべく之を實際に應用する事を努めて、商業にも工業にも凡て斯方針を執つて居る、之が即ち獨逸善である。

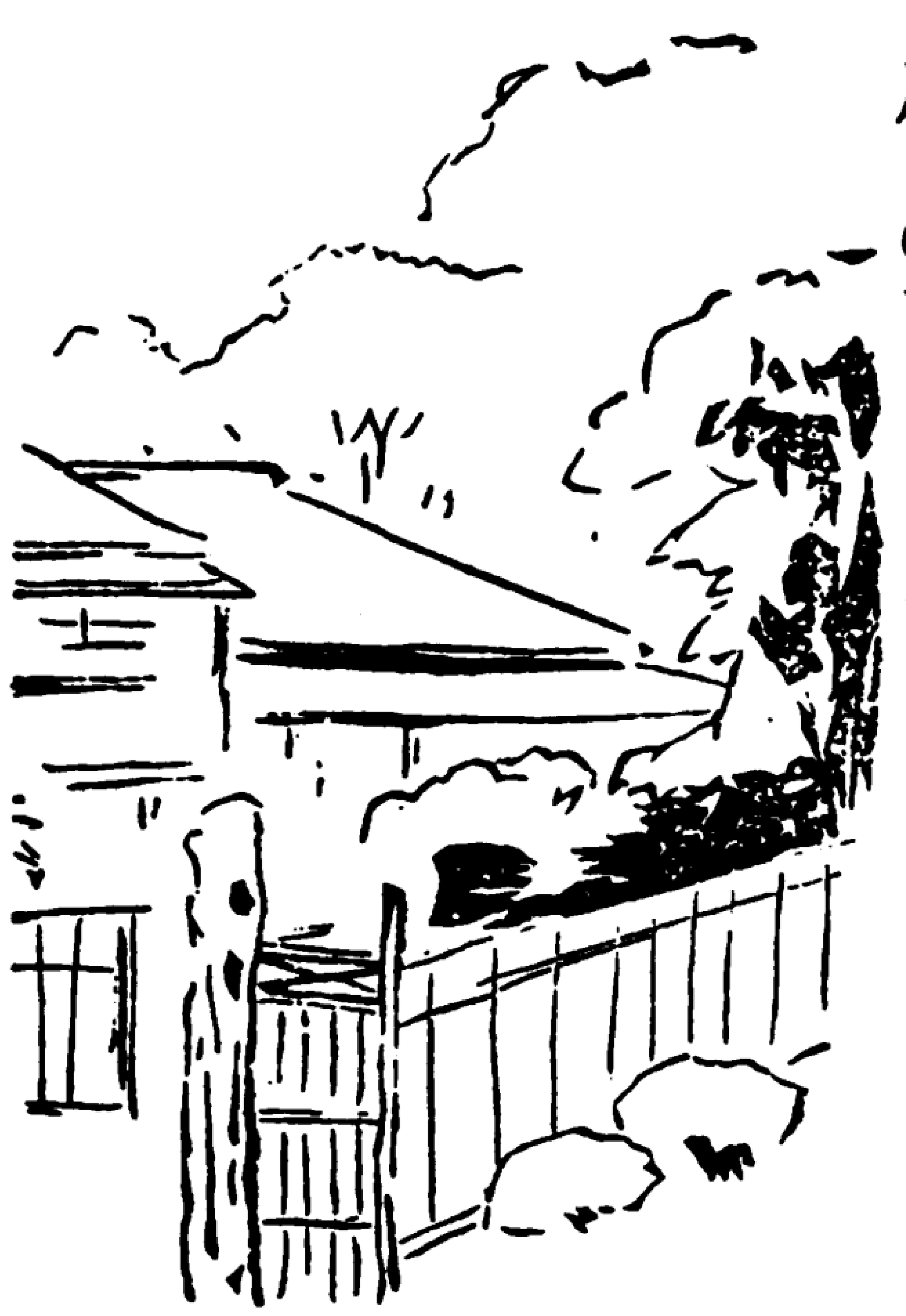
直ぐ吾隣りの朝鮮は、今や吾邦の保護國となつて居るが、如何も朝鮮人はヌラクラで仕方が無い人種だと口説が、あれは朝鮮國そのものが朝鮮人をして左樣令むるので、如何しても露に依らなければ支那に凭り、支那に倚らなければ露に便るといふやうに、何うしても一人立ちの出來ない國柄である、故にヌラクラ一名憑れ主義は朝鮮の善である。

直ぐその隣りの支那の如きも、粗朝鮮と同じやうな歷史と運命とを有して居る、その他何れの國といへども、各、それ〴〵に該國の善を有して居るのである、然らばわが日本善は何を以て證することが出來るかと云ふに、物質上の觀念も無いではないが、重に道德上の觀念である、即ち教育勅語に、

克く忠に克く孝に

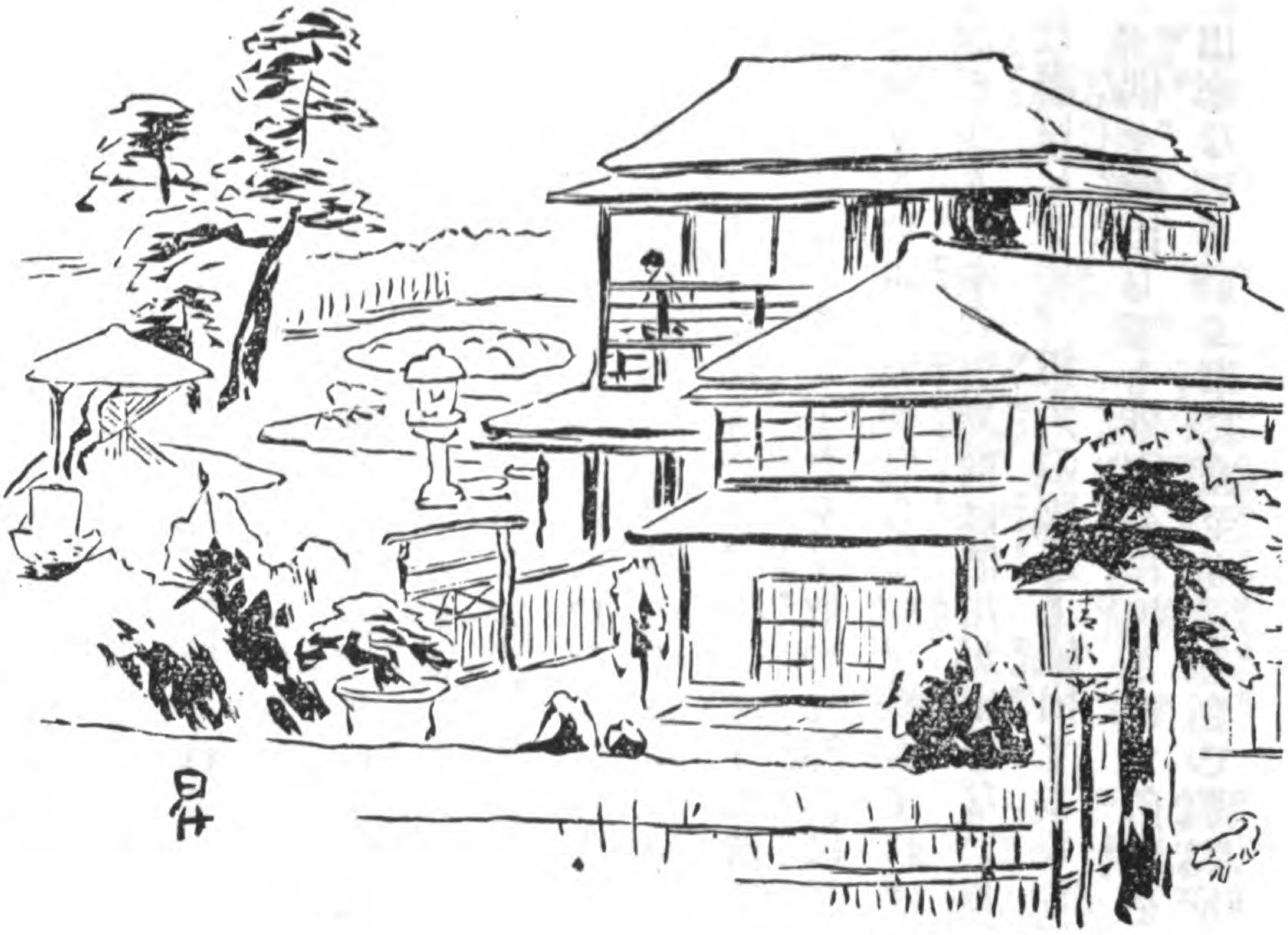
といふお言葉がある、この忠といふ意義を明らかに示す言葉は西洋の語にない、やゝ似寄りのローヤリチーと云ふ語を忠の字に擬するけれども、如何も充分とは云へぬ、わが日本國が獨立する所以は全く斯忠にあるので、家庭が圓滿に行くのは斯孝に基くの

である。
　近頃の書を見ると、頻りにホーム〳〵と云ふことを唱へて、眞のホームは英國でなければ見る事は出來ない、ホームは英國の專賣であると云ふやうに言囃すばかりで無く、如何か吾國のホームも英國の其のやうに仕たい杯と唸るものがあるが、夫等は英國と吾邦との家庭の差異を知らないからである、即ち彼の家庭は夫婦を中心として居るのである、之に反して吾邦の家庭は、親子、夫婦、兄弟といふ者が皆一所に居るので、



即ち家族本位である、故に若しも或者の云ふやうに、吾家庭を英國のホームの如く作り換へるとしたならば、必ず社會は病的になるに相違ない、英國の或一少年に向つて日本人が、何故貴方は父母と一緒に公園へ散歩に行かないのです、行きたく無いのですかと問ねると、その少年の曰ふやう、散歩には行きたいけれども、お父さんや母さんと一緒に行くと、父さんと母さん許でお話をしながら歩いて、坊には何にもお話をしないから詰らないので、それで一緒に行くのは嫌なのだと答へたと云ふ事であるが、これは實に能く英國に於けるホームの眞相を曝露して居る話である。
　之に引換へ吾邦では親子兄弟が皆一緒に居つて、西洋のやうに年寄と若夫婦は別居するといふやうな事は無いから、どうしても親子の恩愛といふものが深い、從つて長は幼を憐み、若者は年寄を慰め劬はるといふ風に一家が親睦して行くから、西洋のやうに左まで養老院などゝいふものゝ必要を認めない、

と云ふものは皆家々で老者を扶養して行くからであ



る、即ち孝を盡して事へるからである。

それに吾邦には祖先を崇拜するといふ美風が行はれて居る、どうか斯美風は持續けて行きたいものである、この美風があるから、その子孫たるものは善につけ惡につけ、祖先からの責任は負ふべきものと心得て居る、それに外國とは差つて、吾邦は君民同祖



であると云ふ觀念が深く腦裏に泌込で居る、その證據には、三十七八年の役に出た者の咄に、一たび戰場へ向ふと、最早自分といふ事は少しも考へずして、どうか大君の爲に萬一なりとも竭したいといふの外は、兎の毛の尖ほども餘念の出るものでは無いと云はれたが、これが抑も大國に打勝つた原因である。

昔し封建時代には、孰れも其土地々々に領主といふものがあつて、生殺與奪の權は其藩主の手に在つたのであるが、今は左様でない、

草も木もみな大君のものなれば
いづれか鬼の住家なるらん

と云ふやうに、みな大君の惠の下に棲んで居るので、その大君の惠は單にわれ／＼日本人の上のみでは無い、日露の間とても一旦平和が恢復されてからは、彼の國の人々の上まで潤されつゝあるのである。

サテ斯の日本善を、從來或人の如きは單に文字の上にのみ取扱つて居られた、それ故に實は折角の日本善が活きて働かないのである、或外國貿易の言に、どうも吾日本人は目先が利かないで、たゞ眼の前の利益にばかり心を注ぐから、例へば茶の一品でも、前に見本として出したものと、後で送つた荷とは大層に違つて居る、そこで之を受取つた外商は、總て見本と違うといふので受取らない、輙もすれば送り返し、どうも日本の貿易商は信用が出來ないと云ふやうな事になつて、折角の國産も輸出することが出來ず、偶々輸出しても外國品に押されて値賣をする事が出來ないといふ事に立至り、そこで靑息吐息で

頭痛に病んだからとて、もと／＼身から出た銹で今更致し方が無いといふやうな、事が澤山あると言はれたが、どうか斯日本善を精神的の方面にも充分擴張して聲價を揚げて貰ひたい。（文責在記者）

清國の婦人

大川茂雄

支那婦人といへば直に纏足を聯想する、女兒四五歳に至れば足の親指の外の指を下へ曲げ、布の切でキリ／＼と固く卷くのである、だから始は其痛みに堪兼ねて、毎日泣いて居る、而して二三箇月は一寸も外出が出來ない、如何に足の小さきが宜しいと云うても、これは亦極端の遣り方である、だが衛生を重んずる西洋人ですらコルセットを癈することが出來ないから、强ちこの纏足を咎むる譯にも行くまい。

或時支那の一紳士と談偶ま立憲政治の事に及んだ、自分が言ふには、我國では先づ名物のチョンマゲを

惜氣もなく切り棄てゝ然後に立憲政治の基礎を立てた、故に貴國でも先づ名物の辮髪を切り、而して又名物の纒足をも廢しなければならぬ、これが即ち立憲準備である、此の英斷が無くては迚ても立憲政治を移し植うるの資格が無い」と說き出したら、對手は苦笑して「これは當分出來ません」と答へた。

纒足は漢人だけで、滿洲人は普通の足である、だから宮中即ち滿洲皇室には纒足が無い、二三歲の女兒は未だ纒足をしないが皆耳環をはめて居る。而して四五歲までは髮の態も男子と同樣である、唯耳環の有無を以て男女を區別し得るのみだ、それから中流以下の女兒には一般に名前が無い、第一娘、第二娘と番號を用ゐる、又一家の中には兄弟相住むものが多い、此塲合には兄弟の子供を區別せずに皆併て其年長順に第一娘、第二娘と呼ことになつて居る。

婦女は生涯湯に入らない、唯手拭で身體を拭ふのみである、而して化粧は非常にコッテリ的で朝と寢る前との二回である、夫に素顏を見せるのを恥として居る、一體支那婦人は每日何事をもせず、唯ブラ〳〵と遊びて日を暮らし、勞働は全く男子の役目で、女子は丁度我國の裏店のカ、アの樣である、煙草を呑み賭博をするのが專門で、ロク〳〵裁縫もしない、煮燃きも大抵男子が之れに當る、夫は怒ることがあつても其妻を撲つことはしない、此の點は西洋の女尊男卑も三舍を避ける。

勿論女學堂には女敎員のみである、唯上海のみは一二の男敎員が居る、昨年天津で一人の英國男敎員を招聘せんとするに當つて、先づ生徒に其可否を投票せしめた、所が漸く過半數の可決で傭ひ入れたと云ふ滑稽談もあつた、男女七歲にして席を同うせずとは表面上、孔子以來の敎である、思ふに其當時、風俗が甚しく破れて居つたのだから孔子が之を矯めんとして極端說を唱道したに過ぎないだらう、然るに後の世では形式的に之を奉ずるのみで、裏面は却つて數倍の敗德を釀して居る、是等が所謂支那流だ。

親戚の外は親友といへども、其妻を紹介しない、病氣

の時は醫者が來ても幕を隔てゝ唯脈を執るのみである、而して今でも決して女は再婚しない、斯の如く嚴重であるけれども、矢張裏面は皆黒點のみだ、蓄妾は上流社會の習慣で寧ろ其數の多きを誇つて居る、時々外國人に向ひて「あなたに妻が何人ありますか」の奇問を發するに至つては誰しも呆然たらざるを得ない。

品格と人性

江原素六

品格と人性といふ語は現今廣く用ゐられて居る所の言葉であるが、サテその使用せらるゝ樣子を見ると、或はこの品格と品性とを混同しては居るまいかと思ふ傾があるやうに考へる、實は使ふ人の心持では左樣ではあるまいが、往々私が見聞するのである。

　元來この品格又は品位といふものと人性又は人性といふものとは、自ら其間に差別のあるものであらうと思ふ、即ち人性といふものは、吾人が誰でも生れたまゝ有つて居る所の無疵のものを云ひ、品格とは、その生れたまゝ有つて居る無疵なものが、種々の誘惑や又は人慾等のために罅隙の入つたものを、道德や宗教で磨き上げるとか、縱ひ罅隙が入らないまでも、矢張道德や宗教等で研き上げたものが品格といふものである。

　そこで此人格の力といふものは偉大なもので、到底智力などの及ぶ所のものでは無い、維新の當初沼津に或學校があつて、その學校の數學の教師に園氏といふ人が居つた、この園氏は故外山正一氏などゝは、兄たり難く弟たり難しといふが如く、孰れ劣らぬ篤學の君子であつたが、就中この園氏は無邪氣でその性質は全で青竹を二ツに劃つたといふやうな氣象な先生で、また至つて無慾であるから、その頃は太政官札とか又は藩札とか云つて、現今の紙幣に比べると、五枚と一枚と云つたやうな格で、頓とボール紙のやうな厚いものであつた、その紙幣を月給に

貰ふと、みな其を枝折の代りに彼方此方と書簡の間へ挟んで置いて、そして片端から之を使うのであるから、月給の受取際には非常に本が膨らんで居るが月の十五日頃よりは餘程減つて來るのである、斯ういふ無邪氣な、何處となく品格の高い潔い先生であるから、當時の學生は勿論、先生仲間にも非常に尊敬されて居つたのである、然るに此先生が、或時教場の入口へ其紙幣を遺して行かるゝと、まだ其頃の武士氣質として、自分が物を遺失したとあつては、自然自分の粗忽と油斷とを表白するものであるとの意氣地から、假令物を遺しても、遺したと云ふ事を云はなかつたものである、一方に斯ういふ意氣地を有つて居るのであるからして、他の一方でも亦容易に其事を本人に知らせると云ふ事を氣遣つたものである、今日から考へれば馬鹿氣た咄、不親切のやうに聞こえるけれども、その頃は、若しも其事を遺失主に告げれば、その本人の粗相や油斷を摘發するやうに當ると云ふので、それで成るべく告げる事を仕ないと云ふ風習があつたので、後で學生等は其紙幣を見附けたが、告げたものであらうか或は廢さうかと評議は區々に分れたが、結局告げやうと云ふ事になつて、一人の學生が其を拾上げ、オツ〳〵しながら先生の許に往き、之は先生のでは御座いませんか只今教場の入口に遺失て居りましたが、と申し上ると、園先生は別に有難うといふ一言の禮も無く、唐突それは己んだ、と云はれた切りで其を受取るが否や、再び之を本の間へ挟み込んで仕舞はれたのであるが、使者に立つた生徒は莞爾々々しながら出て來て其事を一同へ咄すと、その教室の生徒のみならず在校の生徒一同が、全で何か自分の物でも得たかの樣に雀躍して悅んで、始終喫茶室での一佳話となつて居たが、人格の力は此まで偉大のものである。

また昔上州前橋といふ所は度々領主の變つた所で酒井備後守忠利といふ方が藩主となられて、或時その領分を巡廻して備後村といふ所へ往かれると、その村の地頭に藩主と同名の酒井忠利といふ者がある

ので、藩主酒井忠利侯は、予と同姓名では面白くないから其方の姓名を更めよと云はるゝと、地頭は怪訝な顔面をして、私は是まで私は勿論、親先祖の代より、一回でも年貢の納め不足をした事も無ければまた遲くなつた事も無いのみか、外の平百姓から見れば澤山に納めて居る、そたに貴君は私より後で此領分の藩主と爲られたのであるから、姓名を變へよとならば、貴君が變へるこそ至當であらう、私は決して變へませぬと、率直に斷然と答へを申し上げると、君侯も其少しも飾氣の無い所を賞美せられて、それでは私は前橋の城主酒井備後守忠利、其方は備後村の酒井忠利で別に差閊も無からうから、敢て改名するにも及ぶまいと云つて、其儘に過されたと云ふ物語がある、人格の侵すべからざる事は此くの如きである。

維新の際には百事破壞せられて、銃や劍の外は全で價値の無いものであつたが、一たび王政が復古せられて百事が緒に就いてからと云ふものは、何呉となく舊來の物が歡迎せらるゝやうになつて來て、謠や能なども復興せらるゝやうに爲つたが、この謠や能の復興は山内容堂公の力と云はねばならぬのである、明治何年であつたか、チヨツト年は忘れたが、一日容堂公が家臣の者に對つて、能や謠は誰が善からうとお訊ねになると、その家臣の中でも各々贔負々々があるものから、寶生が善いといふ者もあれば片方では喜多流が善いと云ふやうで、却々議論が涸ない、乃で容堂公の發議で、寶生流の山梨瀧藏、金春流の中村平藏、喜多流の白井庄藏との三人を召ぶ事となり、定日になつて三人が來ると、銘々一人づゝ別室に請じ置き、最初に山梨瀧藏を呼出して謠はせらるゝと、之を別席にて聞きたる金春流の中村平藏は、ハテ不思議や、今日は吾一人と思ひの外、今謠ふて居るは正しく寶生流の山梨に相違ない、よし去れば吾にも其心得ありと云ふので、やがて寶生流が終ると金春流へ順が廻つて來たから、中村平藏は種々に心を碎き、熱心に謠ふて居ると、今度は別室

に於ける喜多流の白井庄藏が耳を欹てゝ、彼れは疑もなく金春流の中村に相違なし、ハテ今日は能樂師を招ぎて試驗せらるゝものと覺えたり、イデヤ吾こそはと云ふので、力瘤を入れて居ると、待つ間程なく順が廻つて來たので、君前に出でゝ兎や角と節を廻し、聲を張揚げて謠つたのである。

その日は其で過ぎて、やがて多くの家臣は君前に集り、誰にせん彼にせんと種々評議の結果、遂に寶生流の山梨瀧藏が召抱えられる事に極つたのであるが、何故左樣なつたかと云ふに、金春流や喜多流の二人は[illegible]裏で、少しなりとも求むる所の心があつたならば左



如何か彼れより美く謠つて見せやうといふ野心があつたので、如何も其謠振りに不自然な處があつたのであるけれども、之に引換へ寶生流の山梨瀧藏は、若も外の者の謠うのを聞いたら如何であつたか知れないが、幸に他のものを聞かなかつたのが仕合せであつたかも知れない、何は兎もあれ山梨瀧藏の謠振りは誠に素直な癖が無くつて善いと云ふので、遂に山梨が召抱えになつたのであるが若しもその時山梨の心の

樣は行かなかつたのであらう。

如何も此品格といふものは養つて得らるゝものとは云へながら、自ら其中に生れながらにして有つて居る、嬰兒の如き性質の高潔なものが無くては左樣行くものでは無い、併し此嬰兒の如き高潔な性質は誰でも生れながらにして有つて居るのであるけれども、之が消滅するのが人生の弱點である、それを消滅させないやうにするには

品性の修養を要する

のである、成程學問すれば理性は高くなる、理性は進取的のものであつて、最も吾人に必要なるものであるが、この理性のみで人を服すると云ふ事は容易に出來るものでは無い、云ふまでも無く感情は保守的ではあるが、併し其力は決して侮るべからざるものがある、この感情の爲に多くの人が動かされるといふ事は萬口一致である、その例は前に掲げたる如くである、品性は即ち感情に屬するもので、この品性の改造といふ事は決して不可能では無いが、併し劫々困難である、それ故に之を調和して行くには宗敎や敎育の方便を籍らねばならぬのである。

敎育勅語に博愛衆に及ぼし、といふお語があるが之は誰でも口に稱ふることは造作も無く、また之を種々に解釋を試みた所で、單に口頭だけでは一文半錢の價値のあるものでは無い、乞食を見ては憐れと思つて金品を施し、鰥寡孤獨を見ては氣の毒に感じて養育院を起すとか、又は夫等の爲に慈善を行ふとか云ふやう、之が外に發動して始めて興味もあれば利益もあると云ふものである、言ひ換へれば、同情に動かされて、そして其を實際に行ふ、之が博愛衆に及ぼすといふ勅語の御趣意に適ふのであるから、理性に導かれ反省して惡い事をしない、もしも理性のアドヴアイスが無ければ、如何なる不善をも敢て行ふといふやうで無く、孔子が心の欲する所に從つて則を踰ずと云つたやうに、自然に爲ること作すことが人格に戻らぬやう、充分品性の修養を積まなければならぬ。（文責在記者）

輕便日用料理

中島鎭子

毎時も相變らず目新らしい調料方と云ふでは御座いませんが、只幾分か時節の物を取揃へまして、平易な所をお咄いたします、何を申しますにも日常の食用で御座いますので、別段會席に因むと申す程でも無く、さうかと云つて單に番茶よりは少し氣の利たる位のもので御座いまして、それに少し目先が異つて居りますと、何か手數のやうで御座いますが、手を掛ければ限りの無いもので御座います、あの割烹家の臺所を御覧になると、料理人はチヤント七輪の前に脚榻に腰をかけて、時折片手に猪口を持ちまして鹽梅を試て居りますから、傍から見ました所では、如何にも閑暇さうに見受けられますが、その閑暇さうに見えるのが實は油斷のならないので、その實油斷はして居らぬ、否、油斷は出來ないのである始終その煮え加減を見護つて居るのであります、之が日常の料理であつたならば、却々左樣は參らぬので御座います、とは云ふもの丶、只僅かの場合でも其心懸けにて割烹をいたしますれば、急度平凡のゴツタ煮とは雲泥の相違のあるもので御座います。

◎𛀁はす料理

△鴫立澤　これは椀物で御座いますが、鴫を料理いたしまして、程よく切り、尤も骨は柔らかなものではありますが、庖丁の脊にて打きまして、味醂と醬油、水にて、餘りからくならぬやうに鹽梅をよく煮上げまして、その鳥の肉は一旦鍋より皿へなりとも取り上げ、その汁にて椎茸および柚子の皮を庖丁にて、圓く笠の如く切りまして、少しにても皮に附きたる實を取除きまして、共に煮立て、その中へ芹の湯がきたるものを一寸五分斗りに切り、煮立ちたる最後に、鳥の肉と共に入れてザツト煮揚げて椀に取るの順序で御座います。

その趣を申せば、柚子は西行の笠にて、黒き椎茸は墨染の衣にて、芹は澤の草に見立てたるもの

で御座います、併し鴫立澤に秋の夕暮にて、チョット時節には適しません嫌がありますけれども、當今のやうな冬の期で御座いませんと、鴫といふものが手に入りませんからの事で御座います、去ながら此椀物は、霜月にても差支はありません、實は少し繰延になつた位で御座います。

△鱈羊羹　これは全く時季のもので、しわすの月は鹽鱈の盛りで御座います、その調理方は、肉をすき取り、よく鹽氣の無きまで鹽出しをなしたるものを薄汁で煮揚げて能く其汁氣を去り、甘味噌を中位の半擂となし、その中へ鱈の肉を細かく解し、悉く煉り込み、尙ほ砂糖を少し加へ、柚子の皮を擂込み、成るたけ固くかためたる程好く角の形に拵へ、更に薄鍋に古綿切れを以て充分油を引き、その上にて味噌を裏表ともに燒き上げ、羊羹の如く斷つて出すので、之が都合よく出來上りますれば、餘程目先が異つて至極面白いもので御座います、それに風味もなかく〳〵侮れないものであります。

△蕪菁の馴鮨　これは私の新發明も大業ですが、兎に角新たに案出したもので御座いまして、サンドウイッチ鮨とでも命名いたしませうか、之は天王寺蕪を生のまゝにて、カブの方より二分程の厚みに、二枚つなぎに切り、これに鰤に薄鹽したるものを、宛もサンドウイッチの肉程に薄く斷り、酢にザット浸したるものを挾み、鮨桶なれば最上等なれども、もし間に合せとすれば、淺き桶にても、その中へ順よく並べ、鹽をバラリとまきて、又その上へ〳〵と並べゆき、その都度鹽を少しづゝふりまき、蓋は桶の中へ這入るべきものをなし、その上に重き石を置くこと一週間にして取出し、再度またその桶へ御飯の炊きたるものへ、麹を當分位に交せ、蕪のサンドウイッチやうのものと相代りになすこと、普通の馴鮨を造るが如くなし、最前通り重き石を置き、來春一月になりてより之を取出し、適宜に切りて食ますれば、初春の肴として至極結構なもので御座います、それに漬けます際に、色取りとして蕃椒と柚子の皮

を細く刻みて少しづゝ挾みますれば、殊に見榮のするものであります、尙ほ申し上げやうと思へますが他の記事の御邪魔をしてもと、之にて御免を蒙つて次回に讓ることゝ致します。

道德と黃金

男爵　澁澤榮一

私は商賣人であるから、固より深く學問もした事も無ければ、從つて道德といふものが必ず斯くあらねばならぬものであると云ふやうな事は一切知らないのであるが、何うも是まで世間多くの說を聞く所に依れば、道德と黃金とは兩立すべからざるものゝ如く解釋して居られはすまいかと考へる、殊に維新前に於ける學風殊に朱子學派などになると、

　富めば仁ならず

とまで斷言して居るが、何も富んだから仁が出來ない、仁を成すには貧乏に限るといふ道理も無からうかと考へるが、兎に角左樣言つてある。

一体實業と學問の離れ易いといふ事は、獨り漢學を學んだ者はかりで無い、泰西でも此傾は免れないのであるが、それでは學問といふものも、甚だ窮窟と云はうよりは寧ろ無用の長物と云はねばならぬ次第ではあるまいか、予は決して左樣いふものではあるまいと思ふ、誰彼の學說が如何の、道德說が斯うのと云ふやうな面倒な事は且らく措き、社會の實際に照して

　利益の伴ふ道德

　道德の伴う利益

で無ければ眞の道德で無いと同時に、で無ければ眞の利益といふものでは無い、と予は斷言するに憚らぬのである。

若しも道德の伴はざる利益に依つて富んだものならば、予は其を眞の富とは言はない、また利益の伴はざる道德であつたならば、予は其を呼んで死せる道德と名くるのである、例へば、農夫でも商估でも

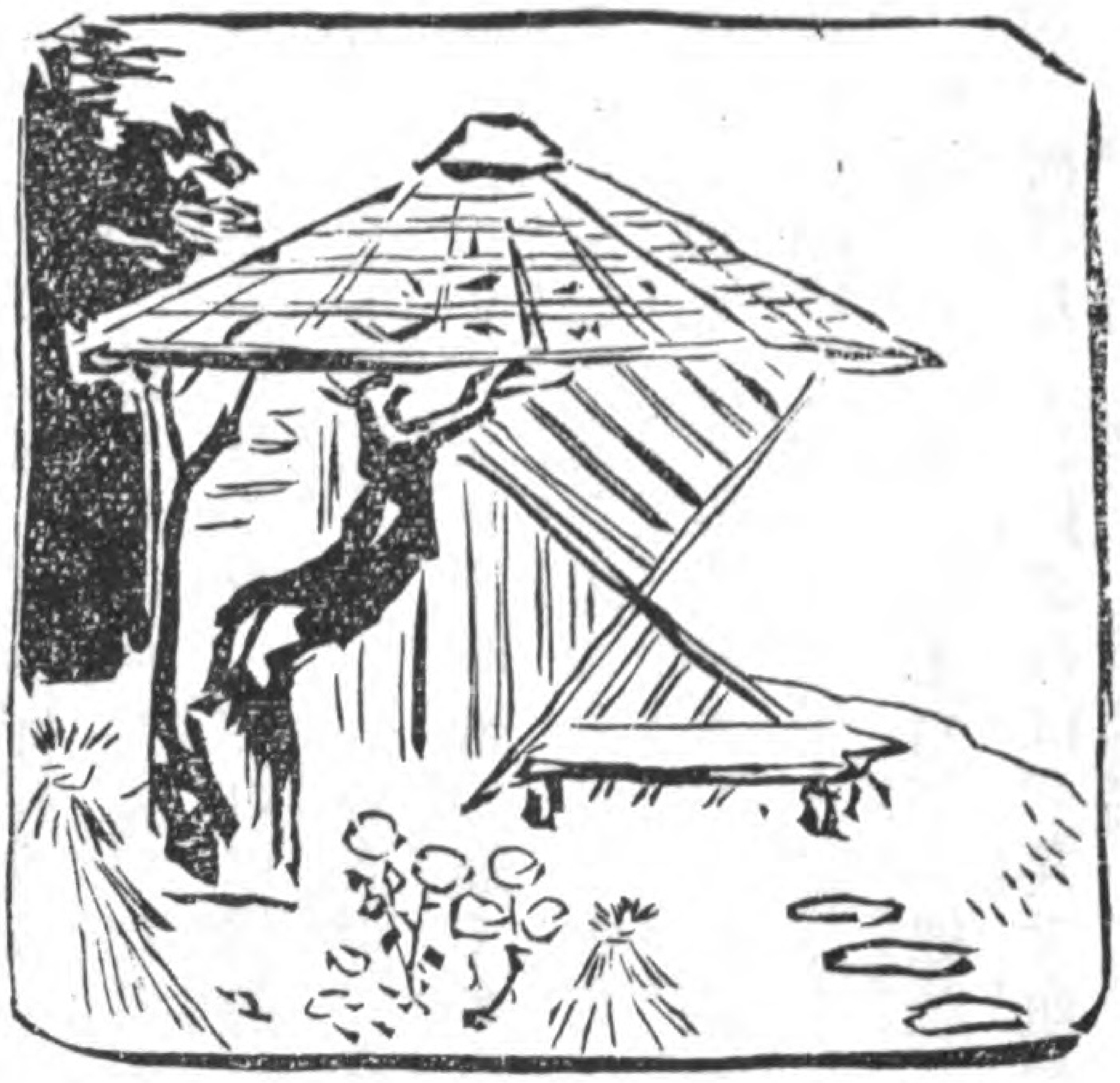
百姓が米穀を作るにしても、謂ゆる水呑百姓は別として、其他は皆己れの食料を除くの外は、總て之を市に出して賣る、之と同時に自分も利益を得るが、農業以外の人にも利益を與へる、商店とても諸方から雜貨その他の物を吾店に取寄せ、そして多くの人々をして、坐ながらにして所要を充させると同時に己れも亦利する所があるのである、もし之に反して農夫や商估が他の人々の事を圖らないとすれば、それは道徳に於て缺ける所があると云はねばならぬのである、而かも世の人々は、己れを利すると同時に他を利する、この他を利するといふのが即ち道徳の本旨と云ふべきではあるまいか。

貧しければ弱く、富めば強といふものが副ふて來るのは必要の道理であるにも拘はらず、世間には口で頻りに富國强兵々々々々などゝ唱へるが、サテ實際は如何かと云ふと、あれば利益の事のみを云ふから、士人の共に齢すべき者でない、苟くも君士人たる者は利益といふ事を口にだもすべきもので無いと斯う云つて居る、けれども之は慥かに間違つて居る早い話が、吾人の身体を强壯にしやうとするには、如何しても滋養に富んだものを取らなければならぬと同一なる理由で、國を强くしやうと思ふならば、如何しても社會を富して掛からなければならぬ、社會を富さうと云ふには、個人々々を富さなければならぬ事は解りきつた咄である、維新前のやうに、武士は喰ずと高楊枝と云ふ時代では無い、今日人々自ら勵み勉めて富を作らねばならぬ、併し其に附けても前に云ふが如く、道徳の伴はざる利益即ち富なれば、それは決して賞すべきもので無い。

私が斯う利益の富のと云ふと、或は誤解を來すの恐れが無いとも云へない、それは何故かと云ふに、近頃は妙な言葉が流行つて、何につけ彼につけて成功々々と云ふ言葉が流行る、サテそれは如何なる意味に於て用ゐられて居るかといふに、多くは黃金を澤山に蓄ふる事が出來たとか、顯要なる地位に進む事を得たとか云ふやうな事の意味に於て用ゐられて

居るが、私は決して其が成功で無いとは云はないが古人も曰はれた如く、不義にして且つ富むは、われ居らずで、不義の利や浮雲のやうな權勢などは成功の中に數へることの出來るものでは無いと考へる。

もしも夫等が成功であるとすれば、例へば、元弘建武の間に於ける楠正成と足利尊氏とを比較し來つたならば尊氏の如きは彼のやうに勢力を得たのであるから、今日の謂ゆる成効なるものに當篏るのである、之に反して楠正成の方は全くの失敗者と云はねばならぬのみならず、その當時に於ては知らるゝ如く難戰苦



闘をして、殆んど百戰百敗の極、遂に湊川の露と消えたのであるから、多言を要せずして不成功の群に入るべきものであるが、併し爾來今日に至るまで正成を呼んで不成功の人と云ふかといふに、左樣で無い、尊氏を名けて成功の標本とするかと云ふに、是また左樣で無い、尊氏を呼んで不臣の極となすと同



時に正成を稱して忠臣と模範となして居る、即ち言はずして不臣は不成功なるもの忠臣は成功したるものたる事は、智者を竢つて始めて知るべきで無いといふ事が判るではないか。

右に就て思ひ起すことがある、是は最早今より二十年程以前の事であるが、豫て私の使つて居た者が米國へ行つて、其所で懇意になつた、生れは獨逸だが、矢張米國で或事業をして居らるゝ一外人が、その日本人の紹介狀を持つて、久々で皈國の途すがら日本へ來られ、そして私に面會を求められたから、一夕之を招いで晩餐を供して旅情を慰めつゝ四方八方の話の序で、頼朝が覇府を開かれてから、北條、足利、織田、豊臣、徳川といふ風に約七百年も連續して來た武臣政治が、西洋などに比ぶれば、丸で血を流さないと云つても宜い程な僅かな小攻合で、而かも短日月の間に王政復故となつたのであるが、之は如何も我々外人には合點の行かない事だが、何か之には深い原因でも在ることかと尋ねらるゝので、それは貴下が不審に思はるゝのは御尤な次第であるが吾邦には開闢以來萬世一系の皇室を戴いて居る、そして此皇室と我々人民とは、恰も親子の如き關係を有して居るのであるから、縱ひ武臣が政治を執らうとも、未だ曾て寸時も腦裏に皇室のあるといふ事を忘れては居らぬ、それ故に明治維新の際とても、徳川十五代の將軍は、大政奉還と云つて、是までお預り申して居つた天下の政治をお還し申すと云つて大政を御返上申し上げたのである、決して大政の爭奪を仕合つたのでは無い、喩へば、從前人から預つて居た金子を返したと同じ道理なのである、それ故に敢て血を流すこともなく、且は短日月の間に世の中を一變する事が出來たのである、それと云ふも全く日本人民の頭には、太古より今日に至るまで、寸時もこの皇室のあると云ふ事を遺るゝと云ふ事は無く君の爲には此代へ難き生命を拋つても苦しくない、否、一朝事あるの日には君國の爲に生命を捧ぐべきものであると云ふ事が腦に染附て居るからで、之は

迚も世界萬國廣しといへども、決して國々に見る事が出來ない、特り吾國に於て存する所の美風であると說明した所が、その外人は手を拍つて成程と感心して居つた。

私が今繰返すまでも無く、讀者は常に大君の心を以て心として居らるゝのであるから、敢て杞憂を懷くには及ばないのであるが、動もすれば、折角學問をして道とか德とか云ふ事を講せらるゝやうになると、如何も道德と利益とは併行すべからざるものゝ樣に考へもし、又解釋もせらるゝのであるが、前述の如く、利益の伴はざる道德は死道德で、道德の伴はざる利益は不義の富で、孰れも褒むべきものでは無いが、特り道德の伴ふ利益、反言すれば利益の伴ふ道德こそ實に賞すべきである。（文責在記者）

稼人を無くしたら如何する

東京女子商業學校監督 文學士 原龍豐

女子の重要問題

従來我邦では女子の自由と云ふものが認められて居らぬ、深閨の中に人と成らしめ、これを婚家に移して生涯を引込主義に終らしむる事が一般の約束のやうになつてゐる、成程一家の中に王樣が二人あつては安寧を保つことは出來まいが、女子は全体男子に屈從して如何なる場合と雖も泣寢入にならねばならぬと云ふのは餘程の重要問題である、女子の有する活動の力は單に臺所のみに應用されて直接社會に交渉を許さないのは當を得たとは云はれぬ。

男子の收入と不幸

世の中に中流以下の家庭では、稼人たる男子の收入がよく自己の口を糊し、更に他の家族を安々と養つて行くものは多くない、大概の內證は火の車で到底箸にも棒にもかゝらぬのさへある、這麼苦しい思

ひを積んでまで女子の多くを家庭の『動かす可からざるの人』と定めたのは什う云ふ譯か、男子の活動力が女子に比して旺盛である事は体力、智力の上から見て間違つてはいないが、一家の經濟的基礎、則一家を支へて行く男子の收入が常に不足勝であつた處へ持つて來て、一朝稼人を失ふ如き不幸に會したとなれば什うなる、家族は急ち飢死せねばならぬ筈だ、女子は其程の屈辱に堪へてまで男子の壓迫に甘んずるのは女子の爲に執らぬ。

引込思案は女子の缺點

平素の心懸は『萬一の事』と云ふのを自覺して貯金、保險の如き消極的手段のみによらず、一家の事情が許す範圍内に於て大いに進んで自家の財政を裕かにある方針に出なければならぬ、引込思案は我邦女子の一大缺點である事は云ふ迄もない、近頃女子が頻りに實業的智識の吸收に焦り出したのは幾分この弊害を自覺したものと見て甚だ慶す可き傾向と考へる、併し稍もすれば獨身生活を云々するのを見るは非常に間違つた話で、某々女史などの獨立説を固守して寧ろ男子に反抗の勢ひを見せてゐるのは、決して譽め可き態度ではない、最もこれは多年の壓迫に對する反動と見てやがては惡いところを除き去るかも知れぬ、イヤ爾う來なければならない。

一年に二億圓の收入

故に私の學校では實業的智識技能を授くるも獨身生活を奬勵するのではない、女子は一面に於て賢母良妻でなければいけぬ、よつて此學校の方針は兩主義の併立を計つて後日の悔を貽さぬ様に努めてゐる

女子が實世間と直接交渉して働くと云ふのは女子自身にとつても甚だ愉快な事で、わけて未婚時代は最も活動の好時機と云ふも過言でない、啻に本人一家の經濟を裕かにするばかりでなく、尚一層擴く云へば一國の富を増すのである、假に我邦二千萬の女子が一個年に各自百圓の收得あるものとすれば、總計に於て二億と云ふ利金を得るではないか。

米國富豪の娘は勞働す

我邦女子の退嬰主義であることは前説いた如くであるが、米國では中以下の家族の女子に獨身生活をやるものが多い、自分があらゆる勞役に服して其賃銀を得、そして其母にまで部屋代、食料などを提供し、其餘命は銀行に預けて自分が嫁入の資金に積み立てる者がある、無論日本とは種々經濟事情も異つてはゐるが堂々たる富豪の娘が、學校の夏休みを利用して馬車に乘りつゝ且農園に赴き、直ちに勞働服を着替へて、他の稼人同樣一日幾干の報酬を得るものさへある、我邦の子女が茶の湯、生花に心を潜めあるは衣服に贅を云ふが如きものと斷じて一所にすることは出來ない。

我邦の女子には出來ぬ仕事

米國では妻が勞役に服する爲、朝の八時から、自分が足手纏ひの嬰兒を抱いて、幼稚園に預けに行く幼稚園の組織は日本のやうに貴族の子を遊ばすと云ふのではなく『子供預り所』と云つた樣なもので、夕刻再び受取つて歸宅する、彼國では一家の經濟と云ふ觀念が一般の人の頭に深く刻み込んである上に女子の自由が認められてゐるからである、女子の勞役と云つて農家の有する園内で、林檎、苺を箱につめたり、其他農業上の收獲の手傳ひをするのである、到底我邦の女子が好んで從事しやうとする仕事ではない。

『奥樣』の文字が惡い

よく見る例ではあるが巡査の妻なぞが他人から『奥樣』の敬稱文字を貰つたゝめ、一寸豆腐買ひに味噌漉下げるのも恥かしい、戸口を掃くのも『奥樣』の威嚴(?)を失墜するかのやうに振舞つているのは最も滑稽ではないか、虚榮心もこの位露骨に行けば寧ろ御愛敬である、支那の婦人が纏足をするのを名譽のやうに心得、男子が兩手の爪の長いのは貴人だと云つて好んで爪を伸ばしたがる、愚も亦極まつてゐるではないか、それに話は異なるが、日本橋、京橋の商店にはよく店と奥とを區別し、主人公や妻なぞは一向店に關係せず、萬事番頭まかせで、時々提出

する賣掛帳ぐらゐと見て平氣のがある、それが爲番頭の遣い込みや、小僧の不埒が現はれて大騒ぎをやる向がある、苟くも商家の主婦ともある可きものが帳簿の形式、一般の商取引にも通じてゐないなぞは甚だ面白くないのである。

賢母良妻主義

當時學校での重要學科は簿記、珠算、習字で、其外商事要項、法制經濟、商品一般、商業の諸式なぞで、其内にも習字は大切であり、亦珠算なぞは全く女子の天才とも云ふ可きもので頗る上達してゐるものが多い、此點は男子は及ばない樣に思はれる、修業の目的は銀行會社の事務員養成が主でなく、他日人の妻となり、一家の主婦として獨立出來得る丈の素地を作つて置くに過ぎぬ、飽くまで賢母良妻主義に基いて、突飛な行動を戒めてゐるのである。

女子の沒常識

女子の多くは驚く程沒常識である、學校では常識の發達に資するため新聞雜誌科と云ふのを今回新たに設けて、去十月二十九日より實行してゐるが、成績は良好である、引續き去月五日第二回を行つたが第一日の教案は林田翰長の歸朝した事、仝氏が歸朝後新聞記者に語つた獨逸人の國民性が勤勉で、且行動計畫倶に合理的で大いに模範となる者が多いとの話であつた、先づ冒頭現今の衆議院の書記官長は誰ですかと尋ねたが、一人も答へるものが居ない、這麼有樣だから米國艦隊の歡迎も如何なる意味であるのか、議會はどうなつてゐるのか、議長は誰だか薩張譯が解らぬ樣に考へられるので、爾後大いに此方面に餘力を盡したいと思ふ。

常識發達と小説

第二回の教案は米國大統領にタフト氏の當選した事、仝氏は我邦人の同情を寄せゐる共和黨の出身者だから兩國將來の關係上幸福であると云ふ事で、何れも新大統領の寫眞、ブライアン氏の二ツを示し種々全國の感ず可き民俗なぞを話したのである、女子の常識を發達せしむると云ふ事は頗る重大な要件で

教案はホンの一部分であるが、常識發達上の筋道を開いて行く方法で前途見込のあるものである、この方針から近頃の小說類とて購讀を禁止することはせぬ、寧ろ新聞なぞは或程度迄閱讀を奬勵する位である。

新時代の要求

自然主義を標榜する小說類の中には隨分如何はしいものがある、併し學校で絕對に閱讀を禁止したからとて、家庭上の束縛は出來ない、女子の既に耽讀の弊に陷つてゐるものは如何に痛切に嚴禁しても本人自身で購讀の機會はいくらも作る、押へつければ押へらるゝほど尙擴がるのは自然の徑路である、よつて學校では絕對に讀むなと云ふより、讀む上に見識を持つやうにと敎へてゐる、要するに女子の自由と云ふのを或程度まで擴充して新時代の要求に應ず可く心懸けてゐるのである。（文責在記者）

抱車夫一夕話

白雨野人

某家の抱へ車夫の談話を叙したるものにして其云はんと欲するところを善く云ひ得て、些の餘蘊なし、雇人使用の參考ともならばやと思ひて掲げぬ、讀む者其心してよ。

奉公先の邸

手前の家の殿樣は華族の中でも、相當なお上の役柄を持つてゐられるので、毎日勤め先への送り迎へをやつて居ります、御家族は奥樣と、學習院の小學部へお通ひの孃ちやんと、中學部三年と一年のお二方がお出でになります、其外雇人と申しますと、中働二人、飯炊一人、書生二人、お長屋に手前夫婦子供の三人が住んで居ます、餘り御裕福にはお見受け申されませんがさりとて爾うお困り遊ばす樣には思へません。

俥曳以外の仕事

主人を役所へお送り申す前の手前の仕事は却々澤

山あるのです、朝起きるすぐお門の戸を開けて、邸の内外を掃くのです、夏なら水を撒くとか、冬なら木の葉を掻捨てるとか、お庭が廣いですから可成骨が折れます、それがすむとランプ掃除です、十二三個ございます、以前湯殿へ水を汲込むのが一仕事でしたが、今では水道が引けましたから大きに樂になりました、掃除が濟で朝飯を頂戴するのです、八時少し過ぎに孃ちやんを學校へ送り込んで、歸つて來るすぐ殿樣を宮内省へお送り申すのです、午後二時過ぎに御前がお歸りになる、お孃さんを迎へに行くと云ふ順です、これが手前の日々の役目。

　月々の給料はどの位か

給料は十五圓頂戴してゐます、無論三度のものは頂きますし、女房はお邸のお手傳ひに上つて居ります上に、お長屋の家賃は出ませんし、先づ夫れでやつて參る次第です、最も手前の知てゐるのが、さる獨逸人の處へ通つて二十五圓貰つてゐます、二十五圓の月給取と云と一寸よい樣ですが、食料は此方持法被から足袋まで買てかゝるのですしお負に人力車は借ものですから輪代は月々三圓以上かゝります、家賃も出ますので、結局手前の方が割がよい樣です。

　一條家の殿樣は感心

先づ夫れは別として、雇れる身は何事にまれ爾ですが、主人樣が眞劍に情をかけて下さると、是ほど嬉しい事はないものです、それを雇人だからと云て矢鱈に使ひ廻された揚句に『御苦勞だつた』とも仰有らず、使れてゐる身は當り前だと云ぬばかりでは、ツイ惡いとは知つゝ、僻み根性を出して、『どうせ雇人だからと』身勝手な考へも出ます譯です、一條の殿樣はあゝ云ふ氣輕な人ですし、思遣もございますので、雨の降たとき、道が惡くて車夫が難澁をして居のを見ると『よし獨りで行く歸れ』と仰有るソウです、そして御自分は電車にお乘になるのがいつもの例でお邸の車夫は有難い御主人だと喜んでゐます。

　古市樣の車夫は幸福

亦古市(公威氏)さんの車夫を思つて下さる事は別

段で、恐らく這麼例は外にはないでございませう、嘗て車夫が重い病氣にかゝつたとき病院にまで入て、三百圓もかけたそうです、車夫は死んでも御恩は忘れないと申してね夫婦共々一生懸命で主人思に働いてゐる相です、それに旦那の云はるゝにはお前が先へ死だら香典として二百圓やらう、俺が萬一先へ死だらお前へ紀念代りとして二百圓やらうとの約束だと聞いてゐます車夫はごつちへ轉んでも二百圓は貰ふ勘定ですね、夫ればかりでなく車夫の子供が產れたら二十圓と極めてあるのでその金圓はすぐ銀行へ預けさせて、小供が成人の後



學校へ行く資本金にさせるのだ相です、こんな主人が他にありますか、隨分幸福な車夫ではありませんか。

奥様の情けはうれしいもの

主人の中には奥様が萬事心得下すつて、たとへば是は殿様のだがお前着て見ろとか、私のだが女房にやるとか子供の下着にしろとか仰有つて、それが股引一つでも情けの血を分た下されもので、決して仇や愚かには思ひません、盆暮に高々三圓位の家もございます、手前共

の方も左樣ですが、京橋の銀行へお通ひになる牛込矢來の或殿樣なぞは十圓札二枚も下さる相です、其外年々暮に俥を新調して使ひ古しを下さる家もございますが、一輛四十五圓から六七十圓までの俥では十四五圓には必ず賣れますからな、其故奥樣の細かひお家では傳手を求めて、古いのを御自身の手許でお賣りになるのです、是では車夫も閉口です。

俥の古いのを車夫にやる

高が十四五圓ですけれど、俥を貰つた車夫の元氣は格別です、同じ華族會館の車夫部屋に集つた時でも「俺の處の殿樣はエライもんぢや」と刎ね廻るほど悦ぶのです、多年自分が曳き馴れた俥ですから他人のものとは思ませんや、亦必ず年の暮に頂戴出來るとなると、人間と云ものは妙なもんで、やがて自分が貰ふ俥だと思つて手入も一倍に遣ますし、一寸曳のでも加減して遣ますですから、主人方にとつてはこの方が德だと申すので實行されてゐる家がございます。

車夫を玄關先に待たす家

思遣と云へば主人を他の邸へ送り込で、一時間餘になるがお歸にならず、自分は北風のピユー〱吹きさらす玄關先に震へてゐるが、奥では一向搆つてくれず、書生は玄關脇に火鉢で見てゐながら、平氣でゐるなんかは到底人間の血が通つてゐるものとは思へませんや、寒いのは誰でも同じ事ですからな、それを氣のつく家では臺所とか、車夫部屋へ案内してくれたり、酒の一本も燗をしてくれるなぞとくると實にたまらない程嬉しいものです、雇人なぞと云ふものは隨分意地の汚ないものですから。

阪道の心得

それから序に申上げますが普通の俥はお乘りになつても、殊に太つてゐられるお方にはガタン〱してお身体に障ります、一層護謨輪になすつた方が曳く身にも乘る身體にも宜しうございます、前申上げたやうに普通の俥でもよいのになると六七十圓はかゝります、護謨輪でも百圓そこ〱で手に入ります

亦阪道なぞを俥でお上りになる時、少し加減して戴くのは有難いですけれど、餘り前へお身體を寄せて、お腰を浮かしなさるのは却つて重いものです、その時は矢張殊更に後ろにお外りならなくもですが、普通にしてゐられた方が宜しいです、御主人によつては「俺は歩く」と仰有つて、空俥を曳かせなさるのはどの位車夫が助かりますでせう、此時ばかりは手を合せて拜みますよ、實に勝手な話ですが。

　困難なるのは一町二町の立寄り

亦車夫の一番閉口しますのはお寒い日に一町二町でお立寄りなさる事です、一層駈け出す分には雪でも雨でも袢纏一枚でさへ汗ばむ位ですから非常に暖かいですが、お立寄りばかりは却つて難澁です、お正月も近くなりましたが、年始廻りは大概綱曳で、手前の邸では元日中に片附けて了ひます、少し冷酒でも頂戴して飛び出しますからそれ程苦になりません、此日の御祝義は特別に五圓十圓下さるお邸もあるソウですが、手前方では二圓に極つてゐます。

主婦の時間とは甚麼ものか

東京女子高等師範學校教諭　後閑菊野

　主婦が遊んでては駄目

畏くも大御心を寄せられた今回の勅語の御主意は申す迄もなく國民一般に「勤勉にして産を治めよ」と云ふ事に外ならぬのです、「勤勉」と申すことは何人にも出來易いやうでむづかしいもの、殊更生活が困難で世渡りに却々骨が折れて來た今日、一家の主人が懸命に働いてゐるにも拘らず、其主婦ともあるべき者が遊んでゐるやうでは到底駄目です、主婦には主婦たる任務がある責任がある其任務を盡さず責任を怠たつてゐる抔は以ての外の事です、亦自ら努めて光陰を空うせないやうに勵み出來る限り働いて家事を處理して行くそして一方教育上、交際の上にまで及ぼして常に見聞を廣める如くせねばならない。

　眞面目に働け

どうも我邦の家庭は「眞面目」でない、主人は先づ

働いてゐても主婦は安佚を貪ぼりたがる、世の中が世の中故一家の經濟を脊負つて立つ男子がウッカリ出來ないと同じやうに、其主婦にしても少しの油斷を見せてはならぬ筈だのに、事實は頗る面白くありません主人が家運を心配するなら主婦も共に心配をする相談相手にもなれず慰めも働きもするのが主婦の役目ではありませんか要するに安佚を貪ぼらず主婦としては家の仕事を眞面目にやると云ふのです。

五分の時間も大切

家の仕事と云ふのは時の經濟で、成るべく時間の費へが少くて効果が多いやうにせねばなりません、『最少の勞力を以て最大の効果を得る』と云ふ經濟學の原則に隨つて時を利用することが肝腎、時は則ち金であることを自覺して了つたら、五分の時間も却々大切で、芝居を覗いたり、物見遊山に浮れ歩いたり、人を訪問してくだらぬ應答に暇を潰すなぞの事が餘程罪惡のやうに考へらるゝに違ひないと思ひます、芝居を見るとか、物見遊山なぞは暫く措いて、

第一に注意するのは人を訪問して家事を妨げる事です、是は甚だ善くない。

訪問の惡習慣

西洋などでは訪問の日を水曜なら水曜に確めて置く、其日には必ず約束によつて知人朋友が集る、そして一週日の用事も、濟ますし、快談もする、十五分乃至二十分間位でさつさと切上げて歸る、時とすると尋ねやうと思つた人も寄つて來て思はぬ時間の徳をする事もあるのです、其故互ひに時を費やさずに交際を圓滿に續けて行くばかりでなく、家事整理の上に大層な利益があるのです、それを我邦では總て自墮落で、時と場合を考へず、我儘勝手に訪問するそれも親友の間ならまだしも、面識少ない人の家へ尋ねて行つて、悠然と構へ込む、それで當の用事は一言で濟んで了つても本人は却々歸らない、尋ねられた方でも愛想の意味で、一日の定めて置いた家事整理の要件は悉く壞さるゝのを知りつゝ菓子を出す茶を出すと云ふ工合に止度がないツマリ往昔の人が

餘り外出せず久し振で心易い家を尋ね面白半分遊び暮した悠長の時代から引繼で來た惡習慣と思ひます

日曜は安息日

前話した如く我邦の家庭には兎角秩序と云ふものがない、例しあつたにしても不時の訪問を受けて破壞されたりして了つて家政整理の實を擧ぐる事がむづかしい私が學校に於て生徒に示します一家の秩序を定めた時間割と申しますのはざつと恁なつてゐます是は一週の約束ですが日曜日から云ふと此日は一週の間の安息日で朝早く起きて家の老人子供の世話をする朝の食事の用意家の内外の掃除をする家族打揃ての食事が濟んで次の新聞を讀むこの新聞を讀むと云ふ事は最も大切な條件です世の中では女子には新聞は無用のやうに考へてゐる人もありますが苟くも一家の主婦として妻たり母たる者が世間の事情が少しも分ないなぞと申ては誠に仕方のないものです

子供が寢てから讀書

それから家内打連れて郊外散歩に出るのです、これは衛生上から考へても一家の和樂の上から考へても爾うなければならぬのです、そして夕食迄には歸つてくることを忘れてはなりません、夕食後子供に對し一時間位問答とかお伽話などをする、子供は朝早く起すが夜は八時頃に寢かせるやうにする、最も人數年齡に相違もありますから一概には申せません子供を寢せてから日記とか家計簿記を誌たり自分の讀書もやると云風にやるのです日曜日はなる可休息日ですから裁縫其他の事は仕ない方がよいでせう。

一週日の定め

月曜日は朝起、世話、掃除、食事、休息、新聞閲讀、次に裁縫其他の仕事に懸るのです、主人が勤人なら勤めに出てから仕事を始め、晝食、休息、次に午前同樣裁縫其他、夕刻掃除、夕食の準備、一家揃つて食事の後休息、子供の監督、日記等記入、就寢火曜日も略同じですが午前天氣、都合を見て寢具を日光に曝らして風入れをするのです、午後は同樣です、水曜日は午前同樣、午後は來訪を受くる事其他同樣、木

曜日も同様ですが午後訪問する事と定めて置くのです、併し慶弔其外の用事は別として先づこのやうになるべく確めて先方へ夫々通知して置いた方がよいでせう、金曜日も同様ですが唯午前に戸棚、押入の大掃除をやることにします、午後は變りません、土曜日も變りませんが午後子供のために茶話會のやうな事をやる、つまり日曜日は外出、此日は半ドンですから主人も在宅ですし一家の懇話會を開いて樂むので以上何れも時間を正しく定めて割り當るのです

入浴！　洗濯！

入浴は内風呂の仕度のある者は毎日でもよいですが、洗湯へ行くものは水曜、土曜の二回位でよいでせう、ですが家の都合上を見計らつて、人數にもよる事は勿論です入浴時刻は夕食前後がよいかと思ひます洗濯は毎日でもよいですから餘り集めずに朝食前後がよいでせう以上の定め方によれば一日の中で新聞も讀め、讀書も出來、裁縫其他も完全に行ふことが出來て秩序も亂れずに行けるかと考へます私の宅でも此通りにやればよいのですが、何しろ肝腎の私が學校へ參りますから日々の裁縫其他とあるのを學校に費やすゆゑ裁縫丈を他人の手に任かせますのです其外は略定めた通りです最も自分獨り定めましても世間の方々が認めてくれませず或は尊大に構へるやうに見ましてもと思ひまして手加減を加へて居ます今俄にと申た處でいけませんから行々は邦人互に戒め合て時間を有益に用たいと思てます（文資記者）

寫眞のうつし方

丸木利陽

撮影の手際も以前とは餘程進歩してゐますし亦うつすお方も是迄のやうな拙劣なのではありませんですから斯術の發達に伴うて當業者の苦心と云ふものは大變ですこれは重に御婦人方に就てのお話ですが從前は何人に限らず撮影を遊ばさるゝには別に唯眞直に立つてゐるとか位で、兩手が無格好に出て、

太く見えてゐましても小言も仰有らず、寫眞師の方でも殊更に注意を拂ふ樣なこともありませんでした。

指の屈折にまで注意

ところが當節では皆樣の方で、色々あゝでもないかうでもないと仰有るし、寫眞師側でもテーブルに掛けた手の置工合から、指の屈折の方法にまで細かい考へを加へて、外見上の不体裁を戒めて居ります、私共では貴族の方々から御贔負に預りまして、常に諸方のお邸へ參上いたしますが、撮影上で一番骨の折れますのは白色の洋裝をなされたのをうつしますことです。

白服つけたのが撮影惡い

何故白衣裝がむづかしいと申しますと、第一光線を反射させますから自然撮影に要する光線の導き方を工風せねばなりませんし、人間の肉色が西洋人なら白色に近いでせう、つまり何處もかしこも白いものづめを撮影するのですゆゑ容易ではありません、邦人が黄色だからと云つて、矢張白の色彩に近づいたものです故同じ譯です、嘗て私の處へ白の服を着けた西洋婦人がお出でになつて、白い背景で撮影してくれと仰有つた時のは隨分骨が折れました、寫眞師の獨立し得る技術の程度は、通常この白の服をつけたものを完全に撮影したら一人前と云へるのですが、先づ此處まで修業するのは樂ではございません。

俯面は婦人の癖

西洋の方々のお撮影になつてゐる寫眞を拜見しますと、大方眼の着け工合は上です、そんなら我國の者がハイカラがつて泰西の眞似をしたらよいかと云ふに爾うはゆきません、どうも和服をつけたものは矢張眞ッ直とか少し横向き加減の方が似合ひます、それに日本人殊に御婦人の方は一層俯面になりたがるのは事實でございますが、一般日本人の癖でせう、併し當節は体育上の道が充分開けてゐますから昔のやうな脊髓の曲つた方は將來益々少なくなるだらうと思ひます。

百枚が百枚とも違ふ譯

亦撮影した跡で、顏を修正したる場合ですが、修正の意味は先天的醜いのを美しくすること、顏面の骨格までを變更すると云ふやうなのではありませんつまり撮影當時は光線の工合などで、映像の上に不自然な個所がありますから、技術者は夫れを取除くのです、寫眞と云ふものは同じ時同じ場所で寫しさへすれば何枚でも同じ事です、最も一日の中でも時と場所に變りがあり、光線を導く時、雲の往來如何によつて百枚が百枚とも顏に相違を認めることがございます、修正が惡いからなぞと仰有るのは甚だ寫眞師の迷惑に存じますのです。

撮影はいつでもよい

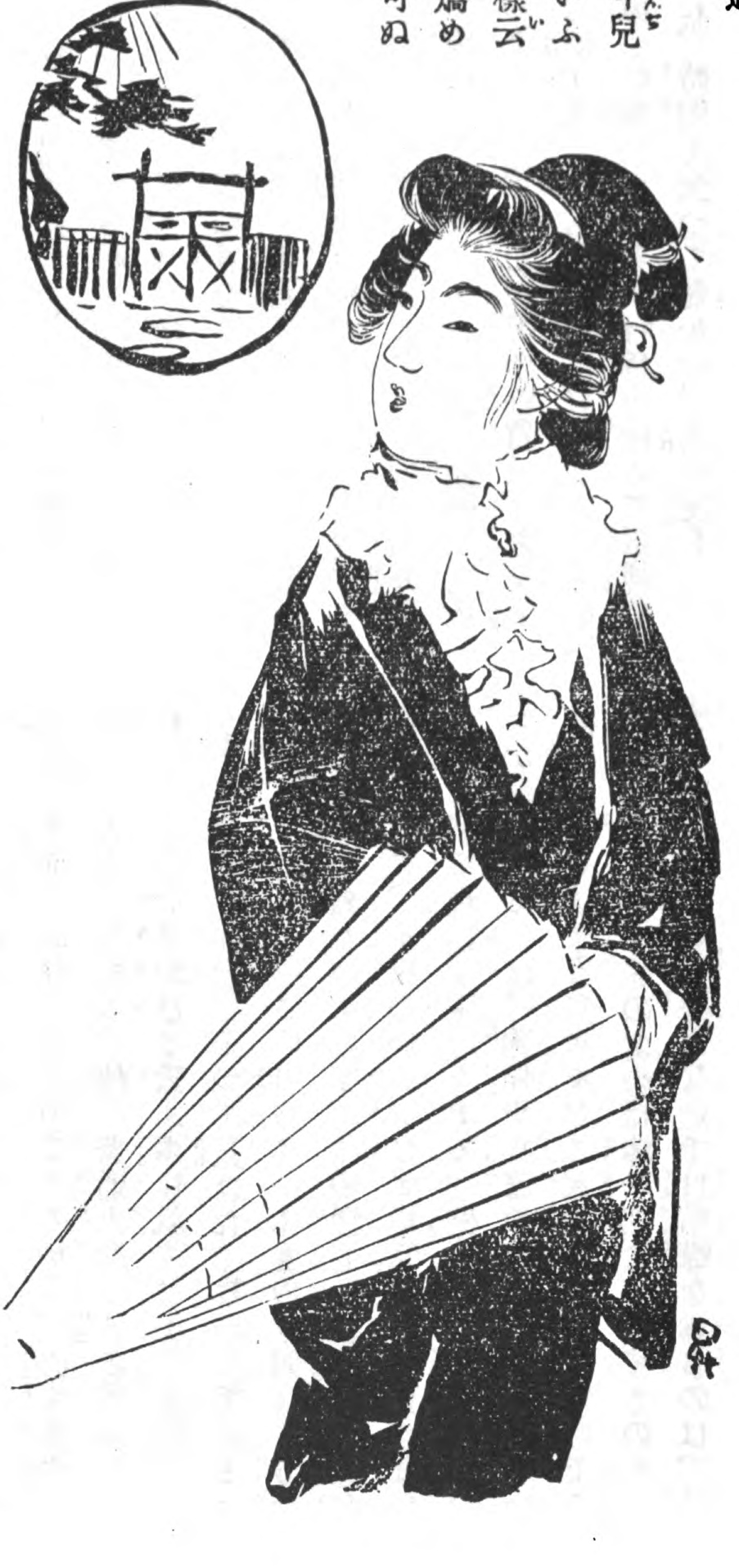
夫れから指輪の寶石入のやうなピカ〳〵いたすものは撮影上何うかと氣にかけるお方もありませうがそんな些細なものは何の支障もございません、其他撮影するのに日中何時頃がよいかとのことですか、それも場所と天氣都合で、雲の都廄さへなかつたら夕刻だとても搆ひません、唯參つたお邸の內でも家の建て方、間取工合で大變寫し惡いのがございますがそれは別問題です、亦寫眞のうつし方と申して外に申上ぐることもありません。（文責記者）

小兒のいさかひ

中村五六

どんなに溫順いと云はるゝ方でも、縱ひ他人といさかひを爲ないまでも、姉妹同士などでは必ず爲るもので、このいさかひといふ事を少し硬く云へば喧嘩、口論、鬪爭などゝいふ事になるので、鬪爭といへば先づ掴み合ひといふ事ですが、この掴み合ひはしないまでも、口論喧嘩位は何誰もなさつたに相違ない、私なども其は覺えがある、どんな仕たことは無いと云つても、大人に成るまで、否、中年になるまで、否、多少物心の附くまでには必ず一度や二度は爲られたに違ひない、何も其を仕たからとて敢て

恥るには及ば無い、この喧嘩口論を爲るといふ事は男女に限らず、文野に拘はらず、小兒の通有性である、現今兒童の教育といふ點から、左樣云ふ事を可成爲めなければ不可ぬといふ說や、或は絕對に爲せないやうにするが宜いと說くものもあるのであるが、小兒が喧嘩や口論をするのは、小兒の本能の一つである



と私は考へる、この本能といふ事に就ては、自己を保存せんが爲にする所の本能とか、又は營養を主とする所の營養本能とか、種々なる本能がある、小兒が喧嘩や口論をするのは、或は防禦の爲にするもの

もあらうし、或は保全の爲にするものもあらうが、畢竟このいさかひといふ事をするには、毎時も怒りの情が伴うて起る、例へば、自分の思ふまゝの事を爲せないとか、又は希望を妨けられた、ア、殘念だ口惜しいと云ふやうな事から起つて來るものである。

それが如何なる風に現はれて來るかと云へば、多くの小兒は泣くとか、又は首をイヤ／＼などゝ云つて左右に振るとか云ふのが普通で、それが少し激しくなると突除るとか、或は推倒すとか云ふ事をするが、甚だしきはヂダンダを蹈むとか、その他隨分荒ッぽい仕打で現はして來る、それに直ぐ顏面に其色を現はすものであるか、併し夫等の性質は、之を大人に比すれば屢次激しいものであるけれども、その現はれ方の激しい割には、その行爲が極めて單純であると同時に、時間も至つて短かい、之に反して、大人となるとなか／＼時間が長い、二日も三日も乃至一週間も一たび腹を立つと口を利かないなどゝ云ふ人が、兎もすれば有るのである、それは兎も角と

して、小兒がいさかひを爲るのは何等の益があるかと云ふに、

過度に渡らない限りは

固より本能と認むべきものであるから、必ず多少の利益があるのである、故に普通世間の人の言ふやう程に、このいさかひと云ふ事に就ては小言を云つたり、又は八ヶ間敷く云つて貰ひたくないのである。

何故といふに、この社會といふものは何れの方面でも競爭の烈しいもので、この激しい競爭の狀態を現はすのに、小兒のいさかひといふものは荒ッぽい形式に於て現はすものである、例へば、國と國といさかひをするには、砲彈や戎器や、その他軍艦とか水雷とかいふやうな種々なる武器を以てするのであるが、それが小兒のものは棒千切などでするのである、假設棒千切を持たないで口喧嘩を爲るのは、恰度甲乙の國と國とで、謂ゆる外交談判を爲るやうなものであるから、小兒がいさかひを爲るのは本能とは云ひながら、前にも云ふが如く、過度に渡つては

ならぬ、何事も過ぎたのも不可ないが、左樣かと云つて及ばないのも宜しく無い、喩へば、日に三度食べる御飯でも、三杯なれば三杯といふやうに定めて居ればお腹の加減も宜いのであるが、それを若しも甘味といつて一杯食べ過ぎると、サア後でお腹が大儀で仕方が無い、所が、三度々々三杯づゝ食べるものを、何かの都合で一杯か一杯半ぐらゐしか食べないと云ふと、少し時間が過ぎると空腹くて仕方が無い、之は及ばぬのである。

右の喩の如く、食べすぎても、又食べ足らないでも、何れも宜くないのである、併しまだ食べ足りない方が始末が仕好い、素より小兒のいさかひといふ事は餘り好ましくは無い、併しチヨツトいさかひをしたからと云つて、無闇に叱りつける杯は是また褒めた咄といふ事は出來ない、と云つて之を奬勵せよと云ふのでは無い。

一口に小兒のいさかひと云ふけれども、之に對して愼重なる注意を拂うときは、隨分

その場合や程度

に依りては價値があるのである、この本能があればこそ、個人と個人は競爭して商賣に勵み職業に勤め學生としては學問を研き智識を磨くのである、それ故に一家この心あれば繁榮し、一郷この心あれば富み、一國この心あれば富み且つ榮えるのである、就中一國となつては特に斯心の必要を感ずるのであるもし一國にして斯心が無かつたならば、迚も他の侵害を防禦する所では無い、自己を保全することすら出來るものでは無い、乃ち小兒のいさかひは、これらの形式の粗ツぽいのであるから、親達や又は長上の者などが無闇に之を矯正するのは宜しく無い。

で、その取扱法は如何したものかと云ふに、成るべく小兒が怒る機會を避けるやうにすると同時に、父母等も怒つて小兒に接してはならぬ、よく世間では小兒が怒つて泣きでも爲ると、その泣き止むまで放ツて置く人があるが、これは甚だ宜しくない、又或者は左樣いふ時に、小兒を獨りぼツちにして置い

て、さうして自分は他の部屋などへ避けて居る親達などもあるが、是等は何れも其當を得たるの處置とは云へぬ、それよりも凡て斯ういふ時には、小兒自身をして自然の結果を經驗せしめて、そして自省を促がすといふやうな處置を取らなければ不可ない。

併し大体から云へば、決して之を奬勵するの必要は無い、隨分明治以前の武士教育としては、坐ろに親達が其子に對つて之を奬勵するの傾があつたのであるが、今日では其必要を認めない、今でも小兒がいさかひでも仕て皈つて來ると、動もすれば之に体罸などを科する向が尠なからぬが、其樣なことを爲るよりも、常に其交はる所の友に優れたる者を擇ばしむるが良い、男女に關はらず、生涯競爭といふ事の範圍を脱する事は出來ないのであつて、如何しても之を繼續して行かならぬのであるが、その競爭といふ事を爲るに附けても性質の良いものにして欲しい、現今學校や家庭などでも種々の競爭が行はれて居るので、隨分結構は結構だが、どうもそれに伴ふ弊害があるのである、それゆゑに夫等の競爭を今少し品好くしたい、謂ゆる君子の爭といふまでゞ無くとも、それに近いものにしたい、それに此競爭も一個々で無く、之を擴めて一群または一團となつた大いなるものにして利用したいのである。

家庭園藝

龍蝿學人

人は娛樂なしに生活することの出來ぬものである以上、家庭に於ても亦何種かの娛樂を要求するのは自然の道理であります、從來家庭に於ける主なる娛樂は、音樂美術を初めとし、茶道活花より、圍碁將棋又は銃獵釣魚に至る迄、數ふればなか／＼にあるが、吾曹は園藝を以て家庭に必要なる樂事となすものであるが、勿論、家庭園藝は利益を目的とするものでないから、面積の廣大なるを尊ばない、三坪の庭でも半畝の畠でも結構である、それ故一名ハンケ

チ園杯とも云ふ。

家庭園藝に於ける趣味は、自から額に汗して一籠のトマト一鉢の朝顔を作るにあるので、この趣味を第一に置かねばならぬ、餘人の作つたものでは、花は奇麗に果は美でも、それ程の感がしない、それが自身で培養したものだとその間に云ふべからざる興味が湧いてくるもので、過去何ケ月間の苦心、例之は下種の面倒、發芽の待遠、灌漑の加減、施肥の手數、生長の狀態、開花の豫想等、自分が今迄の苦心したことが交々記憶から呼起されて、己れも今年は何株仕立てたのだなと思ふと、何んだか人でも救ふたかのやうな緣しい心地になる、スーベストールの本に、老癈兵が今迄戰場で幾多の生靈を奪つたので彼處の露臺で花を養ふて、その罪を償ふてゐるのであらうと云ふことが見ゆるが、全然園藝は仁者の業であると云ふてよいと思ふ。

一方衛生から見ても園藝をやる人に、朝寐夜更をする者がなく、酒色に沈溺する者は無論あらう筈がない、それは園藝そのものゝ性質がかやうなので、例之ば朝顔を見るに、何時までも寢て居られぬやう又日中はいろ／＼鉢物の移植とか、野菜への施肥とか云ふことで、隨分運動ができる、それであるから夜は足勞れて早寐をする習慣がつく、これは健康維持上必要なことで、規則正しい生活をするのは必要の必要である、この家庭園藝一名奧様園藝と云ふ程あつて、家庭の主婦たるべき方は、この心得が裁縫料理と同樣に肝要であると思はれる、それは衛生上から云ふのと、家庭經濟から言ふのとありまするが婦人の衛生上から云ふても、花を作るとか草を植える位は、容易のことで、これが運動としても適當であらうと思はれます、わが國の御婦人方は、やゝもすれば終日座居するの風がありますが、これはよくない事です、尤も近頃出の奧様には隨分自轉車、テニス、ホッケー杯運動の方法を御存もあらんが、之等は一家の主婦となつてからはできることでもあるまいと思はれる、それでこの園藝は老幼の別なく、

貧富に關せず、些少の閑と少許の土地…………土地がなくても出來る、倫敦や巴里や紐育のやうに、人口稠密な處では、ランドレス、ガードニングと云ふて二階なり三階なりのバルコニーへ鉢植として、又箱庭を設ける……があれは誰にでも、又何處でも出來ることであります。

米國の農書にはウーマンス、デスタンスと云ふ語がよくありますが、あれは良人が何十エークルと云ふ牧草地で働く間に、細君が自分でやれる距離を耕作することです、最もこれは農家のことですけれども、商家にしても官員にしても、何れの階級でも、彼國の夫人は養花術についての智識がある、それは彼國の習慣として何につけブケーだのリースだのを用ふるからである、わが國のやうに遠來の珍客を遇するに造花のリースなどを用ふる馬鹿はしたくない、わが國には外國人に珍らしい花がいくらもあるのに何事であらう、それは兎に角、婦人がこの心得がなくてはならぬ、否大にありたいと思ふのである。

單に家庭園藝は各自の衛生上よいばかりでなく、新鮮なる菜果を以て隨時御自慢の料理を試むることができる、新鮮なる材料が衛生上どの位必要かは野菜に缺乏した、旅順の露兵が多數敗血病に罹つたので、知れる、一体今日の女學校で料理學のことを敎授しながら、園藝學の大体をも講義しないのは怪むべき點で料理の材料たる園藝品について、些少だも智識を有せずして料理通たらんとする、到底望むべからざる處である、又家計上から云ふとも、この方面の智識が女子に、必要だと思はれる家庭と園藝とに關する事柄は、未だ澤山あるが、それは省畧して今後自分は本誌の一部を拜借して家庭園藝の方法について聊か羅針盤たりたいと思ふ。

暹羅と英國の女學生

安井哲子

誰しも他郷へまゐつて居りますと、そゞろ自分の故郷が慕はしくなるものだといふ事は豫て聞及んでは居りましたが、實際に自分で之を味はうまでは左まで適切には感じませんでしたが、私のやうな不肖なものが、招かれて暹羅へまゐりましてからと云ふものは、一入この故郷を慕ふといふ念が、朝夕何につけ彼につけて強くなつたのでございます、殊に初め盤谷府へまゐりました時、第一に慕鄉の念の起りましたのは水に就てゞ御座います、御承知の如く暹羅といふ國は至つて雨の少ない國で、それに私の參りましたのが恰度旱り時でありましたから、それは〳〵何の位水に不自由を感じたか知れないのでございます、夫に平素でも盤谷といふ所は井戸を鑿るのに困難な場合でありますから、上下貴賤の別なく、地理書で申しますメナン河、このメナンと云ふことは實は暹羅語の河といふことで御座いますが、それでは判らんと云ふのか、地理書などでは今にメナン河と重ねて申して居ります、このメナン河の河水を使用いたして居るので御座います、一口に河水と申しますれば清き流れのやうに思召しませうが、所が、このメナン河の河水は、實に濁ッた汚ない水なので、何れも之を明礬で濾して用うるのでありまして、至ッて水は大切な物の一と數へられてありますから、私共同行三人の者が、盤谷へ着きました翌朝、小さな盥に僅かばかりの水を入れて、之を三人の洗面用だと云つて出された時には熟々考へました、嗚呼わが故國の人々は何と幸なことであらう、われらも故國に居た時は、父母や先生などから、水を無汰遣ひするなよと誡められながらも、いゝ井戸水は勿論、時としては水道の水までもあたふたと使ッたものを、今やこの僅かな、故國なれば一人前の洗面用にも足らぬ水で、三人まで洗面せよとは、それに附けても故國にある人々は、この不自由を知らずして、朝夕豊

富に奇麗な水を使つて居らるゝよと思へば、なんとマア故國の人々は仕合な事であらうよと感じたので御座います。

次につく〴〵身に詰まされましたのは、矢張水に御縁のあるお咄で、前に申し上けたやうに水が大切であります許りでなく、彼方の風習として日本のやうな風呂はございませんので、云はゞ石油の空罐のやうなものに湯を容れまして、これでまた同行者三人に湯を使へと申された事で御座います、尤も彼方では湯に入るといふよりは、寧ろ湯を使うと云ふ方が適當で御座いませう、それが滅多に爲し得られないのに、私共を欵待の爲に沸して下さいましたので御座いますが、その時また〳〵同行者三人は驚いて顔を見合せると同時に、なんとマア我等が故國の人達は仕合せな事であらう、之を我國の洗湯の岡湯とすれば、僅か小桶に十抔ぐらゐな湯で三人が身体を洗はなければならぬとは、サテも〳〵所換れば品換るとは云ひながら、事を缺くこともあるものでは御座いませんかと云つて、三人共に故郷の空を恨めしく眺め暮した事がありますが、實に旅他國とは申しながら、まだ自分の國の内即ち日本の内でございますれば、たとひ北海道のはて、九州の端れだと申しましても、成程銘々の故郷から見ましたならば遠いには相違ございません、また其所を離れたならば父母の膝下が慕はしいに違ひは無いのでございます、けれども遠く本國を離れまして、風俗も習慣も其他何呉となく一切萬端異つた土地へ參りました時には又一入で、とても東京で自分の故郷の人に遇つたとか、又は長崎のはてゞ知人に廻り逢つたとか云ふ事とは違ひまして、もはや誰でも日本人でありさへすれば懷かしいのでございますが、その人にさへ逢うことが出來ないので御座いますから、その心の裏淋しさは無いので御座います、況して其上に前申したやうな事に出逢ひますと、一層自分の國が慕はしく且つ國に居らるゝ人々の幸福が慕はしく恨めしいので御座います。

私共は左様いふ風に自分の國と比較して、如何に我國の兄弟姉妹が幸福であるかと想ひ到ると同時に彼方の人々に造化の恩惠が薄いかと云ふ事を御氣の毒に考へるので御座いますが、併し諺にも、住めば都と申すやうに、何如なる處でも住んで見ますれば心安いので、暹羅の方々は敢て御不自由とも思召さないので御座います、尤も今更御不自由と思召しました所が、どうも之は天然であつて、人爲を以て如何とも爲ることは出來ないので御座います、その代り暹羅では一つ我國に優つて居る事が御座います、私共も彼方に居ります間は綿入どいふものを用ゐた事はないので御座います、それだけ彼方は暖い國で御座いますか



ら、女子の服装などは孰れもパツトした色氣の物とか、又は白ツぽい物を用うるのであります、まづ十七八歳位までの女子は重に緑の色氣を好むといふ風で、それに勲章の綬のやうなものを肩から脇へ掛けて居りまして、それの色が紅いといふ工合に調和せられ、そして其に種々の寶石などの装飾を施して居りまして却々立派でございます、そしてまた左右の指には、謂ゆる燦爛たる所の光を放つ寶石入りの指輪を幾個も箝て居るので、暹羅には貧乏人が無いかと思ふ位で御座います。

　これに比べますと英國の女學生は凡て質素で、私が皈りがけに立寄つて、彼方此方と女學校を參観し

て、序でに寄宿舍の模樣や食堂の樣子等を窺ひましたが、孰れの女學校でも概して女學生の服裝は質素で、迚も暹羅や我國の女學生などゝは比べものにならないので御座います、例へば、我國で申しますれば華族のお孃さんであらうが、或は豪商紳士の娘さんであらうが、若くは普通の家の娘さんでありませうとも、總て英國の女學生は、寄宿舍へ重に入つて居りまして、其所へ持つて來て居る衣服といへば、何れも通じて敎室や運動場へ着て出るものと、それに食事の時に着換へるものと、外に寐衣ぐらゐで、お宅には如何な立派な物がありませうとも、學校へは夫だけしか持つて來て居ないので御座います、それは〳〵質素で、花簪一つ插しては居りません、それに衣服の色合までが至つて質素で、何の學校でも大凡一定して居るので御座います。

　英國の女學生が質素で、暹羅の女學生が華奢であるといふ事は、畢竟これは氣候との關係であらうと存じます、英國の龍動の如きは、始終深い霧に鎖されて寒冷なるに反して、暹羅は前申す如く溫いので御座いますから、自然左樣なつたのであらうと考へられます、併し物は一得一失で、氣候が溫い所の者は暹羅に限りません、すべて懶惰に流れ易く、且つ生活の多くを天產に仰ぐことが出來ますが爲に、從つて貯蓄心に乏しいので御座います、それ故に暹羅の人々は、何を以て財產の貧富を現はすかと云ふに

　指に箝めたる指輪の多少

で之を區別し得らるゝといふ狀況で御座います、英國では左樣は參りません、その代り一眼見るからに英國の女學生は活潑々地して居りますが、どうも暹羅の女學生はウツトリとして居ります、言ひ換へますれば、暹羅の女學生は大人染て居りますが、英國の女學生は娘らしく無邪氣ない所があるので御座います。

　暹羅の女學生は一般に暗記力が強いので御座いますから、外國語などを習はせますと、大抵は六ケ月間位で一通りは覺えて仕舞うので御座いますが、是

は一つは其母が既に二ケ國や三ケ國の語學に通じて居るので、家庭の薫陶が其素地をなして居るのに基くかも知れませんが、兎に角暗記力の强いといふ事だけは驚くばかりで御座います、一体語學ばかりでは無く、暹羅の人は總てが器用で、殊に手藝などになりますと、僅か敎へたばかりで直ぐ眞似をするので御座いますが、たゞ惜しい事には何事にも忍耐力が薄いので、例へば、刺繍を遣りましても、或點までは非常に早く拵へるのでありますが、いま一息といふ處で腰折れがして了つてそして先生の手を煩はすと云やうなのが暹羅女學生の風習でございます。

英國の女學生は大に其と反對でございます、と云ふものは、敎室で先生が何か敎へませうとも、俗にいふ重箱の隅を楊枝で鑿るといふやうな敎授の仕方は爲ないので、云はゞザツト大体を敎へて、そして其他は自分で考へさせると云ふ主義で御座いますから、例へば、何か問題を一つ與へますにも、是まで左樣いふ事は敎へないけれども、是まで敎へた所の何處にか其答が潜んで居ると云ふやうな問題を與へて、銘々に責任を持たしむると云ふ遣口でありますそれ故に自然研究を重ぬるといふ氣風になるので御座いますが、我國などでも何うか斯ういふ風にしたらと思ふので御座います。

終りに臨んで一言申し添へて置きたいのは、右の如く英國と暹羅との兩國の女學生風なるものを比較し來りますると同時に、現今我國の女學生風なるものを見るにつけ、特に私は

身分相應主義

といふ事を唱導するので御座います、如何に身に綾羅錦繡を纏いませうとも、心に安んずる所が無かつたならば、寧ろ菰を着けたよりも劣るので御座います、之に反して、身には如何なる襤褸を纏はうともその心に少しも疚しい所が無ければ、毫も俯仰天地に耻る所は無いので御座います、尤も人樣の前に出るには、それ相當の尊敬を拂はなければならないので御座いますが、去迚無理な算段をしてまでも着飾

るには及ばないので御座います、なんでは自分は自分の身分相應な扮裝さへして居りますれば、幾ら側から何と言はれやうとも、毫も顧慮するには及びません、それを兎や角想ふのは、畢竟虚榮心に驅らるゝので御座いますから、乃ち克己心を以て其虚榮心に打勝たねばならぬので御座います。（文責在記者）

江の水

佐々木信綱

舟の人いや遠ざかる夕風に
　江の水早みいざ遠ざかる
花さかじ星かゞやかじいたづらに
　生きんが爲のこの世なりせば
天冠にかへよと王のゝたまふも
　かへじをごとはすてじをごとは
手をとりて君しゆかむとのたまはゞ
　海の底ひのしらぬくににも

わたづみの千尋の底に沈みたる
　鐘なりどよむ雪ふゞく夜を
かさ〳〵と枯生笹原音たてゝ
　山鳥たちぬたそがれの谷
いばらかりからだち拂ひ荒野らに
　から松植ゑて十年過ぎにけり
うき人の昔の門のやぶ椿
　むかしながらに花は咲きけり
み山おりてつかれたる身を馬の上に
　ゆられゆられゆくすそ野霧原
そのかみのよしなしごとも思はれて
　こゝろ老いしむる夜の雨のおと
夜ごと〳〵買ひてさゝぐるいさゝかに
　醉ひますまでも老ましぬあはれ
船つくる矢口の村の春の日や
　雪まだ白き川上の山
浪清きこの離れ島君とふたり
　君とたゞ二人あらばいかならむ

お園と藤尾

中島德藏

こゝにお園といふのは、かの淨瑠璃にある、三勝半七の段といふ中にある人物をいふので、このお園といふ人物は、實によく德川時代の女性を代表して居るのである事は、かの謂りものゝ中の文句にても知らるゝ如く、周圍に敵を有つて居るのである、それにも關はらず、尙ほ自分は家に在りて良人の身の上を案じて居る、これが尋常大抵の女子に出來るものでは無い、實にお園の如きは無我の愛を以て理想として居つた、德川時代の女性の好標本である、併しながら之を今日の社會に拉れ來つて、そして批評的の眼から見來つたならば人で無い、神樣である、如何に德川時代と云へ、お園の如き無我の愛を以て理想とするとしたならば、私は斷言する、

理想としては健全で無い

と、尤も封建時代の女子の理想の建方は總て遵奉にあつたのであるが、この遵奉して少しも違背しないと云ふことは、これを一考すると無氣力に陷ると云ふ憂はあるまいか、どうも是は免れぬやうに考へる併し封建時代は其でも好いとしても、最早明治の今日では、憲法に於て自由といふ事が許されてある、故に昔のやうに保守的では不可ぬ、須らく今日は進取的實行的でなけねばならぬ。

佛蘭西の愛國者マダムッローラン夫人は革命軍に投じて大に力を盡し、後斷頭場に向つて、自由よ、汝の名に於て幾多の害毒は行はるゝよ、と云つて悠然として瞑目した程の女丈夫であるが、このローラン夫人が尙だ六歲の時の事であつた、たま／＼病氣に罹ると、母は心配して、どうか藥を呑ませたいと思つて、種々に苦心せられて一服の藥を與へられると、六歲の少女は其母の恩に感じて、呑うと思つて口先まで持つて行くと、プンと嫌な臭がするので呑む氣になれない、併しそれではならぬと思ひ返して、再び口の先へ持つて行つたが、どうも其臭が氣にな

つて呑めないので、如何したものであらう、呑まないでは折角の母様の御親切を無にする事になる、何とかして呑まねばなるまい、如何したものかとトッオイツ思案しつゝ、母と一二の押問答をして、今度はどうしても呑まうと思つて居る矢先、隣室にありし父親は、突然戸を押し開けて出で來り、何を我儘なといひざま、鞭を擧げて一打うたるゝと、今や呑まうと決心して口に當てた藥茶碗を、物をも言はず少女は傍へ抛つけると、父は再び鞭を揚げて丁と打たれ、なぜ其樣な事をするか、なぜ呑まぬのであるか、小兒の僻にと云つて叱言を云はるゝと、少女は口を開いて、お父さんは私が只今呑うと思つて居る所に、何も聞かずして撻たれたのでありますから、モー私は藥を呑みませんと、キッパリ言ひ放つて、最早どうしても呑まうとはしない、僅か六歳の少女ではあるが、なか／＼其決心は堅くして、迚も挺でも棒でも動かない、併しこの少女は、俗に世間で云ふ剛情我慢で父親の云ふことを聞かないと云ふのでは無い、折角最愛の母上が下された藥であるから、何とかして呑まないでは濟まない、が、どうも其臭ひが變なので、口許まで持つて行つても突返すやうで呑めない、是ではならぬ、今度こそはと決心の臍を堅めて、今や呑まうと口許まで運んだ刹那、父上は夫等をも知らずして無闇に鞭たれたのであれば、父上の爲され方は無法といふものである、それに引換へ自分には、何處までも母上の思召を頂戴しやうとしたのであるから、少しも自分に取つては疚しい所は無いのである、と斯く肚の裏で正邪を區別して掛つて居るのである、既に六歳にして此性情を持つて居つたのである位だから、遂に將來革命軍に投じその極斷頭場に立つても、自由よ、汝の名に於て幾多の暴惡は行はるゝことよ、と言ひ放つて、悠然として瞑目したのであるが、どうか女子の理想としては此女史の決心が欲しいものである。

　それから此所に揭げた藤尾のことであるが、實はこの藤尾といふのは實在の人物では無いので、夏目

漱石氏が著はされた虞美人草の中に書かれた假設的の人物であるが、併し或意味に於ては慥かに一部の女性の状態を言現はされたものと考へる、この藤尾といふ女子の父親は、後に外國で死んだ人であるが、その父親が亡くなつてからと云ふものは、殆んど精一杯に母親の手で、一も二もなく氣儘に育てられたのであるが、併し相當の學校敎育も受けた事であるから、成人の後は如何にも淑女らしく育つたのであるが、惜しいことには、諺にも婆々育ちは三文安といふ事がある、その婆々育ちでは無いけれども、母親の甘やかし育ちであるから、どうも生氣が無いと同時に我慢力が無いのであつて、夫が彼女の運命を支配したのである、即ち藤尾には一人の許嫁があつたので、その許嫁は藤尾の兄の友達であつて、兄が哲學者だけあつて、其許嫁の者も矢張り左様いふ傾きのある紳士であつたが、藤尾は敢て其紳士を嫌ふといふのでは無いが、どういふものか其許嫁の紳士の親達を嫌ふ所から、自然その許嫁の人物をも厭ふと云ふまでゞは無いが、蟲が進まぬといふ鹽梅



である矢先、別に小野といふハイカラ紳士があつて、此小野には最早外に許嫁の女子が有のである、其にも關らず、小野は藤尾に心を傾け、藤尾は亦小野に意を注ぐ所から、何時しかに咄しは進行して兩人が結婚すると云ふ事になると、それを傳へ聞きたる双方の友人等は、孰れも皆知合同志の間柄とて、それは大變な事であると云ので、手を分て彼方此方と双方の間を奔走して、そして利害得失を說けれども、却々藤尾は其を聞入樣ともしない、併し小野氏は流石に男子だけありて速かに友人の忠告に基いて心を飜したが、藤尾には友人達も殆ど手を燒て居た、けれども其儘に打捨て置く譯には行かないので、百方手を換へ品を換へ、口を酸ッぱくして說立られたので、いかなる藤尾も獨り心の裡で想ふ樣、自分は是まで何一つとして、言つて聞れないといふ事も無れば、思ふて行はれなかつた事は無のであるが、此結婚の一事ばかりは思を貫く事が出來ないのか、サテは世の中は斯したものか、はてさて味氣なの世やと二十四歲の花の蕾を自ら散して了つたのである。

現今の女學生には、まだ藤尾程の修養が出來て居らぬ者が少なからぬのであるが、併し何れも我といふものゝ自覺は確にあるのであるから、何事を爲すに附けても華美を去つて質素にしなければならぬと同時に、一方には夫に對して親切に熱心に仕遂げなければならぬのであるが、併し突進するに附けても必ず正邪の判斷力に訴へて其方針を誤らないやうにしなければ不可ぬ、言換ふれば、わが意識の嚮ふ所に誤られないやうに、出來得る限り自ら之を抑へて掛らねばならぬ、若しも意識の嚮ふまゝにしたならば、終には藤尾のやうな運命に弄ばれるやうになるのである、さればとてお園のやうに、何も關はずに一意良人を思ふからとて、彼女のやうな工合では今日からの女子の理想とする事は出來ないのである、然らば如何にせば宜いかといふに、私の考では、今日以後の女子たる者の理想は、お園＋藤尾を二で割たもので無ればなるまいと考へる。（文責在記）

己を愛せよ

千勝繰水

人として恐らく己れを愛さぬ者はありますまい、然らば何が爲めに敢て己れを愛せよといふ必要があるか、其處には底もあり蓋もあるのですから、何だ馬鹿々々しいと被仰らずに、何卒お聞取を願ます、さて誰とて己れを愛さぬ者がないとしたならば、それは何が爲めでせう、思ふに、男にもせよ女にもせよ生をこの世に享けた以上は、何しても有る限りの命を保たねばならぬのですから、自然世の中といふ廣い間に其身を置くとしても、何より其命を保つべく其身の安寧を謀らねばならぬといふに歸するのではありますまいか、と斯う申せば誠に朦朧したことですが、それは賢明なる諸姉にお察しを願ふ事として

人生とは如何なるもの乎

といふ事から、次々に申して見ませう、併し學術的に凡ての定義を下して行くのではありませんから、其邊は豫めお含みを願つて、單に話の順序として斯る事をも申すのであると御承知を願ひます、一体人の世といふものは、誠に複雜なもので、表裏あり反覆あり、推移定まりなく、變化極りないものであるといふ事は申すまでもありません、例へば、人は悉く信じ得るものでもなければ、頼みに出來るものでもないといふ事に見て、察する事が出來やうかと思はれます、蓋し人各々其命數を盡すに汲々として、日も亦足らず營々役々たるに基因するものでありませう、是れ即ち

生存競爭

と云ふ言葉のある所以であります、『物平かならざれば必ず鳴る』と申しますが、生存せんとするものが勢ひ競爭する樣になるといふのも、畢竟これに外ならんのであります、其『平かならざれば鳴る』といふのは、自分以外の人と力の平均を保つ事が出來なくなれば、遂に互角の勢を得やうとするからの謂で、優勝劣敗といふも、斯る間に顯はるゝ有樣であ

ります。

榮枯盛衰

といふも亦斯の間に起る現象であります、御覽なさい、人各々希望を抱いて、其の影を追ひ行く樣の如何に慘憺たるかを、昨日は東に今日は西、奔走また齷齪、僅に五十年の命を縮めても、起ちては悅び倒れては悲しみつゝ過ぐる人の世は、誠に糸の亂れの夫れかとも思はれますまいか、さればにや、家といふも名のみ、破壁風荒れて終歲寧日なく、稼ぐに追ひ付く貧乏の浮ぶ瀨もなくて、饑を訴ふる人のあるかと見ますれば、これはまた反對に輕車を驅り、肥馬に鞭つ飽食暖衣の人をも見るといふ有樣、如何に榮枯盛衰の世なればとて、其懸隔の甚しきを思ふては、誰れとて一種の感愴に泣かぬ者はありますまい、あゝ均しく是れ人ではありませんか、然るに、一は美祿に飽き、一は饑餓に苦しみ、一は輕羅を纏うて足らずとし、一は弊衣に包まるだも難いとする斯くても自然は私なしとするのでせうか、月や花や

山や水や、財ある者の友とすべく、窮するものゝ慰みとすべくもないとは何たる事でせう、一盛一衰、人生にこの別あるを以て、古來幾百千篇の哀史を作すとはいへ、不義にして富み且つ貴ばるゝものあるに反し、正道に處しながら猶貧にして賤しめらるゝ者あるが如く、生存競爭に伴ふ榮枯盛衰の現象に、貧富と善惡に相關することの多岐多樣なる、到底常理を以て容易に解釋し得られぬものもあるのであります、人呼んで、『運命』といふものは即ち、之れを指すのでせうか、斯くの如く、或は榮え或は衰ふるといふ事が、人の運命といふものでありますならば、人の運命ほど分らぬものはなく、人の世ほど賴みにならぬものはありません、然り實際に人の行末と世の成行とは分るものでなく賴みになるものではありません、果して然らば

女の運命

とても知れて居るではありませんか、と申したからとて何も悲觀して終まうのには及びません、泣いて

暮すも一生なら、笑ふて暮すも一生であると申す通り、苟も女として生をこの世に享けた以上は、やはり其命數を盡さねばならぬのでありますから、よしや、六ケ敷い世の中であるにもせよ、徒らに果敢ない運命を苦にするより、如何にせば其運命を幸福ならしめ得べきか、如何にせば榮枯盛衰に弄ばるゝ事なく、安らかにこの世を送り得るであらうかと考へべきではありますまいか、けれども、女は自ら男と違ふものでありますから、多少その工風を異にする所がなければなりません、昔し支那の伯樂天と申す人が『人生婦人の身になる勿れ百年の苦樂他人に依る』と申された通り、女といふものは、幼にしては親に從ひ、長じては夫に從ひ、老いては子に從ふといふ樣に、何しても男を先に立てねばならぬ運命を持て居るものであります、併しながら、何處までも女の運命は他人に由らねばならぬといふのではありませんから、自身は何でも搆はぬ、女には運命を開拓すべき力がないものであるのだから、萬事男任せに如かずといふ樣な考を持つものではありません、たとひ女の運命は他人に由つて決するとしても、女には女の天分といふものがあるのであるから、男の影身に添ふて、何處までも其天分を盡し、以て自己の幸運を拓いて行かねばなりません、としたならば、何して其幸運を拓くべきものでせう、これが即ち本題の主眼とする所で、私の考ふる所は

　己れを愛せよ

といふ一語に止まるのです、己れを愛せよといふ事は女に限つた事はないのですが、私は特に之を女の方におすゝめ申したいので、斯う申したならば、また其運命を幸福ならしむるといふ事が、分り易くはなからうかと考ひて、この一語を本文の主題とした譯なのであります。

人若し自らを愛する事がなかつたなら如何でせう、踏むべき道も踏まず、人情に悖る事を敢てして恥づるといふ事もありますまい、爲めに一旦世の指彈する所となれば、益々自暴自棄の人となつて、品性の

墮落などゝいふ事を意に介せぬは勿論、罪惡に陷ると知りつゝ不德を犯して顧みぬといふ樣な事にもなりませう、さらずとも、自らを愛せぬ程の人は自分の考の淺いことを知らず世の事は凡て運命の手に弄ばるゝもので、到底人の力を以てしは如何にもする事が出來ぬものであると信じ、人の幸運なるを見ては羨み、自ら薄運なれば忽ち世を恨むといふ樣なものです、之に反して自らを愛する人は如何でせう、幸運は精勵の外ならずと悟る事も早からうし、また忍耐の力強く、貫徹の氣象に富むものです、のみならず、自愛といふ事は、よく謙遜を敎へ、よく妬心を殺ぎ、よく慢心を抑へ、誘惑に克ち、勇氣を增しまたよく悲んで心をやぶる事なく、樂んで淫する事なきものであります、故にかゝる人は、その職分に熱誠なるのみならず、怡々として鬱屈に困しむ樣な事もありません。

其れは初めにも申した通り、誰れとてわが身を愛さぬ者はありますまいが、愛といふ事も條理正しいものでなければなりません、我利々々の愛ではいけません、沒義道の愛ではいけません。

諸姉にして眞に己れを愛されたならば、年頃によく誘はれ易い惡魔をも退ける事が出來ませう、妻としても、充分に夫を助ける事が出來ませう、またよくある舅姑の壓制をも其德に依つて逃るゝ事も出來ませう、母としても、よく其敎育を爲し得る事が出來ませう、否慈母として不言の間に未來の偉人を作る事も出來ませう、虛榮心、不衛生、嫉妬、怨恨、貪慾、あらゆる其れ等の惡德を去つて、圓滿なる家庭に一生を終る事が出來ませう。

諸姉よ、希くは、つとめても自らを愛し給へ、而してこの世を平和の世とし給へ、世の平和は諸姉に待つ事が多いのではありませんか。





○如くものぞなき朧夜の景は、櫻に於て更に妙なり、月は限なきをのみ愛づるものかは、或は淡く、或は暗く、微雲の光をこめて、花影の參差たる姿、眞個千金の値あり、風一陣金鈴の紐に度れば、靜心なく散るはく、紛々靡々として勾欄に飛雪の斜に洒ぐめり、階を埋め、庭も狹に積りて、明る朝箒取る人の春魂いかに繚亂せむ。

○玉翠の餘韵斷えて、春の夜はいつしか深けゝる、かつけものあまた賜はりて、今しも奥殿よりさがる秀女は、見えぬ眼に月ある方を眺めつ、此宵はわけて月花の色うるはしと承る、四つの年兩目しいたる身は、光も香も覺え侍らず、只月といひ花といひ、其名を聽いてあこがるゝのみ、思はず打歎けば、案内の侍女も詞なく、夜寒の風に灯な取られじと、紫の長袖に雪燈を掩ひつゝ『さぐりても見せたきもの』と、口のうちに言ひける、秀女は目こそ見えね、心は盲せず、侍女の厚き情にうれしさは如何ばかり、落つるは涙か花の雫か、侍女は心ある人なり、散敷く香雪を一掬し、小杉紙に包んで秀女に渡しぬ、秀女は感極つて泣く、月西廂に傾いて花の影初めて明かなり、夢なるかな春の夜は。

○東京控訴院の刑事部に、朝早くより傍聽の男女集まること夥し、好事の人もあるものかなと老廷丁は笑ひ

ぬ、聞けば盲美人の公判ある故なり廣き白洲は忽ちにして一つの空席なきに至りぬ、闥を排して、衣冠の人は入來りぬ、滿廷肅々として聲なし力なげに悄乎立つは秀女なり、何故に斯る淺ましき身の末とはなりしぞ罪の名は委托物費消なりと云ふ、忌はしき限なれ、判官の鞫問に答ふる所は、仇し男の爲に欺かれ、家財も賣盡し、諸家よりは出入を禁ぜられ己なく茲に至れりと苦說するに在り涙に綾めも見えず、懺悔の思に腸や寸斷せん、其の罪を惡しんで、其人に及ぼさず、判事も目をしばたゝき、檢事も顏をそむけゝる、辯護士は詳に其の情を盡くして、彼女の唱ふる俗曲中、露のひぬ間の朝顏に似たる生涯、惠みの露こそ望ましけれと結論したり、犯せる罪は免れ難く、禁錮幾月に處せられぬ、無殘なるかな、新朝顏物語とて、其の頃の評判高かりき。





夕暮なり、又雨なり、殘楓哀菊秋も老行けば、人も亦老ゆべし、瑠堵蕭然たる四谷霞ケ岡の一區は、住む人更に城中の感なからむ、愛氷中川大人の家は茲にありて、山林白雲の庵に似たり、大人は才を憐み客を愛す、此宵も清宴を設けて、文友の誰彼を招きぬ、簾外には落葉の下ること雨と共に繁し、雨は酒を催ふし、又詩を催ふす、賓は主を忘れ、主は賓を忘る、逸興夜と共に長し、大人は尙興を加へんとて、當代箏曲の名手某氏を招きぬ、名手は盲目の美人なり、大人はひそかに坐中の一人を盲女に紹介せける、其の人は辯護士なりき、盲女は絶せんばかりに悦び、且つ恥らふ姿のいたはしさ、知る者は大人と女と狀士の三人のみ、燈に背く寒菊一枝、やがて霜に摧けんか憫れの風情なりき、女樂師は思込みたる面色にて、『巴曲ながら先づ露のひぬ間を奏で侍らん』と云ひける、主人はうなづきぬ、醉客は皆面白し〳〵と賛せり。

清搔一曲、常にまして凄婉を極む、あやしや涙ははら〳〵と十三絃の上に玉を散せり、狀士と大人は默して語なし、雨蕭々風颯々、夜や深し、怨や深し。

捕はるゝ勿れ

廣井辰太郎

近頃は大部世間で捕はれたる人といふ語が流行するのであるが、これはもと是まで理想派の小説家を、謂ゆる自然主義者の側から言初めた言葉で、何に致せ捕はれるといふ言葉は、軍人社會などでは最も禁物である、一體この捕はれるといふ言葉は、何も昨今になつてから特に生れた言葉といふので無い、以前から在つたのであるが、それが前に云つたやうな事から、當今は廣く世間に用ゐらるゝやうになつた迄で、少しも珍らしい言葉といふでは無い、そこで之を佛教の語で云つて見れば執着といふことになるのである。

我々人間は如何なるものに執着するかといふに、例へば、親としては吾子に執着し、名譽に執着するもあれば、地位に執着する者もある、その他富に執着し若くば美に執着する者もある、この執着すると云ふのは即ち孰も皆夫等の爲に捕はるゝのである。

これは何新聞か其名前は失念したが、ツイ近年の事であつたが、ある一富豪の老人は、病んで褥に就いたが、この老人には一人の親戚縁者も無いので、病勢は日一日と募つて行つて、最早臨終に幾日も無いと云ふ場合になつたが、どうも是まで何十萬といふ巨額を積んだ富が氣に掛るので、死ぬにも死なれぬといふ羽目で、大抵の人なれば最早遠に死ぬべき病人が、殆んど三四日も息を引取らなかつたと云ふ事が出て居ましたが、この老人は其儲た富に執着して居た爲に死際の往生が惡かつたのである。

また昔、これは虚構で實説ではないが、一人の田舎者が東海道を通つて富士山を見て、どうかあの富士山を自分の田舎へ土産に持つて行きたいものである、如何したならば左樣出來るだらうと思ひ詰て、とう〳〵其爲に發狂して死んだと云ふ假設譚があるが、これは前の富豪の老人に比べると、大に詩的なり美的である、實際誰しも東海道を通つて富士山を

見ると、アヽどうか儘になるものならば、彼の富士山を懷へ入れて、自分の田舍へ土產に持つて行つて遣りたいといふ感想の發るものであるが、昔し孟子は、泰山を腋挾んで北海を超えることは出來ないと言はれた如く、富士山を風呂敷に包んで土產に持つて行くといふ事は、恐らくは神樣でも不可能の事である、併し左樣いふ感想を起すのは、まだ詩的美的であるとは云ふものゝ、矢張捕はれるといふ事に於ては一つである。

兎に角何事なりとも、執着する捕はるゝといふ事は決して宜しく無い、世には道德に捕はれたる道德先生などゝ云ふ人もあるが、その道德に捕はれたる道德先生の說く所の道德ほど融通の利かないものは無い、少し話が飛ぶが、西洋の歷史を繙くと、宗敎家が有名の學者等を迫害し、又は殺戮した事は歷々として、今尙ほ其痕跡を史上に留めて居るのであるが、何故宗敎家が其樣な事をしたかと云ふに、ツマリ是は宗敎家が其宗敎に捕はれたる結果に外ならぬのである、斯く物事に捕はれると、その爲に害毒を流すことは非常に恐るべきものがあるのである。

右に數へたるが如く、名譽、宗敎、道德、その他美や名譽や地位等に執着することの宜しからざる事は言ふまでもないが、

殊に危險なるは金錢に捕はるゝの一事である、併し金錢といふものは頗る偉大なる力を有して居るものであつて、若しも出來得るならば、私に今五十萬圓の財產を有たしめたならば、それは必ず目覺しき仕事を爲るのであるが幸か不幸か其が無いから斯うやつて蠢爾して居る、併し此ぐずぐずして居る間に、我は吾天職を盡しつゝあるのであるから、敢て其資產が無いからと云つて、悔みもしなければ又それを羨みもしない。

よく世間では、金錢の事を口にするのは卑賤であるとか、又は劣等であるとか云ふが、手近い咄が吾人が日常生活して行くには、是非とも缺くべからざる生活の一大要素であるのである、去れば卑賤いと

ひ劣等と罵る人でも、之なくては生活を持續して行くことは出來ないのであるから、心の中では其を許して居るに相違ない、既に之を許すとすれば、敢て之を蔑視することは出來ないと考へる、併しながら金錢といふものは、昔から諺にも云ふ如く

金錢は他人の初まり

といふやうに、この物の爲に親子兄弟は云ふに及ばず、親戚朋友に至るまで、隨分仲違ひ等を生ずるのである、けれども亦時として斯物の爲に、謂ゆる千金にも換へ難いといふ程の人命までも救ひ得らるゝので、左樣いふ場合には實に絶倫なる威力を有つて居るのである、否、左樣いふ場合のみに限らず、金錢といふものは古今を通じて實に偉大なる威力を有して居るので、換言すれば、之を善用すると惡用するとに拘はらず、金力の偉大なることは實に意想外である、この意想外なる絶倫の力を有する金錢を善用するものは兎も角ですが、縱ひ之を惡用しないまでも、この金錢に捕はれたる人は、恰も天刑病か或は腐骨症に罹つたものゝやうであると、田中正造翁は評を下されたがこれは、實に犀利なる警語と思ふ。

世には大久保事件の出齒龜のやうな色魔もある、この外權勢地位などに戀々たる權魔といふやうなものもあるが、是等は左まで恐るゝには足らない、最も恐るべく最も警しむべきは金魔である、故に世の青年子女達は此金魔に捕へられないやうに今より警戒を加へられん事を切に望むのである。

歐米見聞談

文學士　上田　敏

歐米見聞談などゝ云ふ題は今より二十年も前に出すべき標題で、實は自分ながらも陳腐であるとは思ふのであるけれども、兎に角私が此度の洋行は、別に官命を帶びたといふでは無く、ホンノ草莽の野臣一の布衣として洋行したのであるが、極めて其時日が短かく、その見聞した所も至つて狹いのであるか

ら、從つてお話の種といふものも無い、左樣いふと不實のやうであるが、實は皈つてお話をしやうといふ量見で洋行たので無いから、云はゞ自分で見て獨り心の裡で莞爾つとして居るといふやうな始末で、其何をお咄しやうといふ事も無いのであるが、たゞ其中一つ二つお咄して見たらと思ふ事を述べて見やうと考へるので、その事が彼方で見聞した事であるから、取敢ず歐米見聞談といふ、陳腐ながらも標題を掲げた次第である。

このお話をするに就て、實は少々その途次の事を述べなければならないのであるが、まづ其はお預りとして置いて、直ちに本文に掛るとしやう。

是まで多くの洋行者が皈つて來ると、まづ萬口一致といふ工合に、何れも彼方の國々の景色が惡いといふ事を云はるゝのであるが、成程私も彼方へ渡つた當座は頗る同感であつたのであるが、段々日を經るに隨ひ、眼を通すに伴れて、歐米と日本では景色が違うといふ事を發見も大業であるが、實は氣附いたのである、言はゞ吾日本の景色といふものは總てピクチユアーデスク的のものであつて、歐米のやうな崇高とか、雄大とか、或は一種の宗敎心を惹起すとかいふやうな點は缺けて居ると考へる、即ち是迄の支那風の繪畫とか、又は狩野派の繪畫とか稱するものも皆それである、一体藝術といふものは、英のオスカーワイルド氏が云はれた如く、

天然は藝術を眞似て居る

と絶叫せられたが、果して天然が藝術を眞似て居るか、或は藝術が天然を眞似て居るか、夫は兎も角として、米國へ行つて見ると、彼地の景色は一口に評して見ると渺漠である、故に彼のソートレークなどへ行つて見る、殆んど彼方此方に白い小山や丘が散在して居ると云ふ風で、云はゞ單に山水ばかりである、又建築で見れば彼の名高い摩天閣の如きは、恰度我邦の普通の二階建の上に、尙ほ三十階も四十階も積重ねたといふやうな建築物がある。

この建築の事に就て、幸い途中で某建築學者と同

船したのであるが、それは摩天閣のやうな高い建築物になると、素人眼には下層も上層も同樣の寸法であるやうに思はれるが、あれは決して左樣でない、何故なれば、人の眼といふものには視錯といふものがある、その視錯を正しからしむる爲には、どうしても上と下とは寸法を違ひなければならぬのである、乃ち下層よりは上層に至るに從つて寸法を少しづゝ詰めて行かなければならぬのである、と云ふ事を説き聞かせられたが、藝術家といふものになると、斯樣な處まで注意を拂はねばならぬので、却々容易なものでは無い。

それから佛國へ行つて見ると、此所はまたズツト景色が差つて、謂ゆるパノラマ式である、元來歐羅巴の藝術といふものは、その根源を希臘に發して居るので、すべて色を鮮明することを貴ぶのであるから、從つてコランの躶体畫のやうなものが好かるゝのでむらうと思はれる、それ故に景色を見るに就けても、自ら東洋は東洋、西洋は西洋といふ風に、其

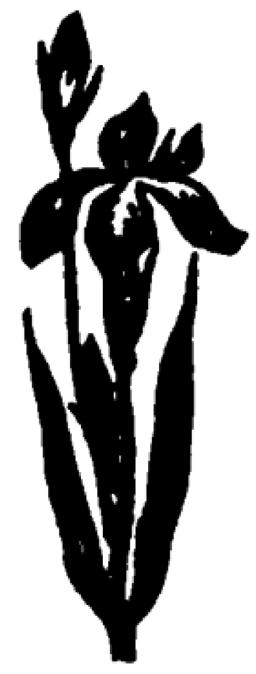
間に區別を附けて視なければならぬと考へる。

次は學問のことであるが、之は何うしても尚だ我國が彼方に學ばねばならぬ事を思ふ、成程吾邦にも隨分偉い學者は澤山にあるが、まだ〳〵彼方には先頃渡來されたコッホ氏の如き、或は此程渡來せられたヘーデン氏のやうな一流の學者が外國には少なく無い、自分で自分の國の學者をケナスのでは無いが吾邦の學者を外國の學者に比べると、外國の學者は眞の學者であるが、吾邦の學者は恰かも技手の如き觀がある、何故といふに、彼方の學者となると、總体に學問上の常識が發達して居る、言はゞ學問の間口も奥行も相應して居る、例へば、文學者と云ふ中の小説家でも、彼は必ず一度詩を作つて來たものである、それと同時に詩を學んで來たものである、また詩人その者は、小説を學ぶと同時に之を作つて來たものである、縱ひ小説を作らないまでも、必ず之を學んで來て居ることは確である、凡て大發明大發見をするには、この學問の常識が無ければ出來るも

のでは無い、例へば生物進化論で、名高いダーヴン氏の如き、若しも同氏が動物の側ばかりを見て居つたならば如何であらうか、迚も彼の大發見は出來ないのである、即ち植物學は勿論、その他あらゆる學問の常識に富んで居つたからである、又無線電信で名高いマルコニー氏の如きは、必ずしも無線電信は同氏の創作では無く、それより以前にヘルツ氏があつたのであるが、兎に角マルコニー氏が單に電氣學ばかりで無く、その他の學問、例へば、天文、氣象、地質といふやうな學問に通曉して居られなかつたならば、到底同氏が無線電信に於て成功する筈は無い何となれば、天氣の好い時と惡い時では、電氣に及ぼす影響が違うであらう、また地勢の高低あると同時に、空氣の厚薄等が如何なる關係を來すかといふやうな事を知るの必要があるではあるまいか、是等一二の例を以つても、如何に外國の學者が學問の常識に富んで居るかと云ふ事の一班を知らるゝのである、殊にマルコニー氏の夫人の如きは、頗る電氣學に精通して居られて、良人の成功に與つて力あるといふよりは、過半以上その力であると聞いては驚くの外は無いのである。

それから人生そのものに就いても、吾邦と歐米では大部異うので、歐米人の生活は却々複雜、この複雜といふのは俗にいふゴミ〳〵して居るといふのでは無い、喩へば、音樂で云つて見ればオルガンやピヤノが種々の音調から成立つて居るやうであるが、之に比べると吾邦の人の生活は、一口に云へばオルガンの中の單音のやうで、極めて單純であるが、之は何うか彼方のやうに、すべて興味ある複音のものにしたいと思ふのである。（文責在記者）









小説 姉弟

伊藤楊花

○

——今しがた生垣の外を誰やら二三人ぶつ〳〵囁きながら通つた、時刻は彼此四時過ぎでもあらう、日脚の薄い光は斜に奥の障子を射て心地よさそうに夕日を浴びて、眠つて居る猫の影が長く椽端に引いて居る、と田畝で餌をあさつて居た雀の一群が、何に驚いたか、パッと飛び去つて、向ふの櫻の木にうつッた。

「玉の宮居は丸の内
近き日比谷に集まれる………、

高聲に唄ひ乍ら表から這入つて來た哲一は、偶と片手に竹の棒切を持つて立留つたが、椽側の柱に寄りかゝつて居る姉の姿がチラと目に入つたので、急に棒切を拋り投げたが、

「姉さん！………姉さん！」と威勢よく驅けて來て、「え、姉さん、何してるの？」

摺り寄つて姉の顔を見上げたが、默つて返事がないので急に萎げて了つた。

姉さんと呼ばれたのは年の頃十五六の優しさうな娘、此所と言つて美しくは無いけれど、温雅しさうな容子の、殊に涼しい兩の眼に言ふに言はれぬ愛が漂ふて、くつきりと白い襟元に後れ毛が二筋三筋、風に吹かれて居る。

「え、姉さん！什麼したの？」

と弟は心配さうに云ふ、

「またお母様に………？」

と言つたが急に心付いた樣に口をつぐんだ、姉は垂頭た儘クルリと後を向いてフイと立つてしまつた。

○

「ねえ數江や」

思出したやうに頭を擡げたのは二十八九の、色の白くない、目元の邊り何所か勝氣が現はれて居る女である、癖ではあらうが妙に口を曲げて大袈裟に首を振つて、

「お前什麽してお母様の氣が解らないんだらう、」

と暼と横に見てわざとらしくホツト溜息を吐いた。

俯伏加減になつて覺束なげに縫物をして居た娘は不思議さうに目を見張つたが又直ぐ垂頭いてしまつた、何所やらでブーンと羽虫の障子へ當つて唸る聲がして居つたが、其れも止んで廣い家の内は森閑として了つた、茶の間で鐵瓶の湯の沸騰る音がするばかり、

「妾は眞個に腫物へさわる様にして居るんだよ、」

と又暼とする、

「奈何したらいゝんだらうねえ、」

さも萎縮した様に兩手で顔を撫で廻したが、又氣を繳へて

「判明ない様な處はお母様此所は何う縫つたらいゝんでせうと聞いて呉れる様だといゝのだがねえ、」

「さうすれば妾だつて整然とお前の解る迄敎へてやるし、………黙つて唯泣顔ばかりして居られるとお前も損だし妾も什麽して可いのだ解らなくなるからねえ、」

娘は依然垂頭いて居る。

「それに………」と有繫に言淀んで、

「お前が那麽だと、近處の人が妾がさも繼子苛過でもするかの様に思ふからねえ、」

「そんな………」

と數江は極く微かに口の内で言つたが、よくは聞き取れなかつた。

「まあさ那麽事もあるまいけれど、世間にはよく有る事だからねえ、」

暫時は無言であつたが、茶の間で鐵瓶の湯がグラ〳〵沸へ返つて居るに氣が付いて、そつと立つて水をさして來て、又元の所へ坐つたが、妙に調子を替へて窘めるやうに、

「妾の前ぢや良いけれど、他人の宅に行くと、最とハキ／＼しないと困るよ、女と云ふ者は何時迄自分の家に居られるもんぢやないからねえ…………お前だつて今二三年も經てば一度は何所かへお嫁に行かなけれやあならないんだから、」

と言かけて氣を見る樣にチラと娘を横目にかけて、

「其時になつて此所が解りませんからと言つたつて誰も敎へて呉れるものは有りますまい？………それに這麼縫ひ樣をして御覽、それこそお前…………」

此處迄言つて針箱の側に置いてあつた縫掛の袖を尺で引寄せて娘の顏と見較べながら獨言の樣に、

「眞實に困り者さねえ、」

と態とらしく首を傾げて考へ込んだ。

表の方では皆な野良仕事から歸つて來たのであらう、急にごた／＼し始めた。

「あの、奥さん………」と襖をあけて這入つて來た下女のそれには答へもせで、

「お島、一寸御覽な」と縫ひかけの袖を抛つて見せて、

「えゝあ…………」と下女が頓狂な聲を出して呆れた樣な顏を見もせずに、

「もう御夕飯の樣だねえ、」

と娘の方を强く一瞥して納戸の方に行つてしまつたあとには數江、默つて垂頭いて、そして兩の眼には涙が一杯、今にも落ちさうになつて耳の邊りへ亂れかゝつた後れ毛がブル／＼と顫へて居る。

○

「左樣で御座いますか、何所に行らしつたんで御座いませうねえ、」

ガラ／＼と格子戸が啓て忙しさうな下駄の音がする

「いゝえねえ、弟の方は瀟洒して居ていゝのですけど只、姉の方がねえ什麼も………」

日はもう暮れかゝつて一ツ二ツ燈火が見え初めておるのに家の廻りは妙に騷然して落着がない、

「姉さんは………？」

何氣なく裏から這入つて來た哲一は臺所でゴタ／＼

して居た下女のお島に對ねたが返事が無いので、
「え、お島……………」
と促がした、それでも未だ返事がない、
「おい、お島つてば！…………姉さんは？」
今度は少し怒つて言つた、
「外に被在るでせうよ、」
とツンとして少しも落着がない。
哲一はふいと外へ出た、薄暗い廐小屋の前へ行つて見ると、其處には正兵衛親爺が他の知らない人と話をして居る、
「一体貧乏士族の娘なんて云ふものは斯ふ云ふ百姓屋には似合はねえよ、それに旦那があの通りだから今の内はまあえゝが又產れでもしようものなら何うせ圓くは治まらねえだ…………、」
哲一には何の事だか一向に解らないけれど其儘内へ這入つた、奥の六疊に行つて見ると、お父樣が火桶の向ふに何日も見た事のない苦い顔をして、
「早く彼方に行つておいで、」
と言つた樣な目付であつたので、這入つては惡いのかしらと躊躇して居る。
姉の數江が暮方から見えなくなつたのである。

○

今迄良々繼母の虐待を忍んで居た數江は其の日伯母の家に行き一伍一什を語つた。
あんな優しい娘を永く繼母の傍に置くのも可哀さうだからと言ふので其儘伯母の許に預けられる事になつた。
哲一は毎日さつぱりして良い子だと言はれて居るが、此の頃お母樣のお腹は目立つ程膨れて來た。

玉兎の一曲

本誌發行の前、製本出來の日、社員社友相會して茶話を催ふし、將さに發行せんとする本誌の内容に就て、會合諸氏の意見を徵し、壹號は壹號より、面目を新にし、誌面の發展に資することゝせり。

十月三十日の夜も、例によつてこの茶話會を開き會するもの約三十名、種々面白き談話は交換されたるが、當日は來會諸氏の興を深からしめん爲に、日本音樂に堪能なる關口銀次郎氏を招待せり、氏は社主の友人にて、實業界に於ける紳士なり、啻に資產に於て紳士なるのみならず、その行狀世の摸範たるもの多く、往年その一日の計に苦む時に於ても、兩親に仕て至孝に、殆ど痒き所にも手の屆かせ、些の不足を感せしめざりき、氏の嚴君は投機心深く、苗字帶刀御免の家柄なる豪農なりしも、爲に其產を傾くるに至り、猶之を斷念する能はず、氏が至孝は遂に其非を悟らしめ、氏がうるはしき家庭に、誰羨まぬものな



き樂隱居たらしめたりき。

この美しき性行を有する人なるが故に、その演せらるゝ音樂にもまた數段の價値あり、氏は音樂によつて、優しき美しき性格を養ひ得べしと信じ、令夫人にもまた令孃にも、その餘暇に於て音樂に遊ばしめ、常に親子三人水入らずの樂みをなして、一日の勞苦に酬ゆることゝせり、即ち音樂を本位として遊ぶ分量は、他の家庭の幾倍なるを知ざると同時に、氏の家庭の活動は、また多くの家庭に幾倍せるかを知らず、されど家族音樂に遊ぶ家庭は、多くは家產を蕩盡するが常なるに、氏は音樂に遊ぶ快樂の爲に、家業に出精して、資產日にます／＼多きを加ふ、人の生涯はかくありたきものなり。

この床しき家庭をわが茶話會に移して、一曲を乞ひたる三君の演藝は、淨曲玉兎とて、狸の近所に柴苅に行きたる例のお伽淨瑠璃にて、お月さんさへ嫁入なさる抔いふ無邪氣なる文句に、輕妙の譜曲、絃聲と相俟つて、此上なき餘興にてありき。



果して女子は男子に劣る乎

成女高等女學校長　宮田脩

いつも世間では、女子と男子とを比較して、一口に女子は劣るものであると云ふやうに斷定を下されて、身体が虚弱であるとか、智識が淺薄であるとか云はれて居るが、成程身体は男子に比べたならば虚弱で、腕力などゝいふ點になつては、迚も男子に及ぶものではあるまいが、智性の點になつては、未だ劇かに左様斷定を下すことは如何あらうかと思ふのである。

尤も女子の智識は、概して局部に行届くといふ事は緻密であるが、男子のやうに大局を觀て、謂ゆる物を大摑みにするといふ智識を缺いて居る、第二に女子の智識は具体的の上には能く働くが、抽象的の事には働かない、約言すれば、女子の智識は單純であるが、男子の智識は複雜である、心理學者の說く所によると、

直接の智識と推理の智識との二つがあつて、高等なる學問即ち哲學とか科學とか云ふやうな學問は、孰れも複雜なる、而かも抽象的なる智識を要する學問は、どうも女子には餘り適しないやうに考へらるゝ、視易い例が、何處の學校でも課せらるゝ多くの學科の中で、文法とか數學とかいふ科目になると、何れも成績が善くない、試驗の答案紙を見るに、何れも是も其答案が習つたまゝに書かれてある、之に引換へ男子の答案紙は、槪して習つたまゝ、又は先生に聞いたまゝには書かれては居らぬ、是を以ても女子の智識は男子の其に比して應用の働き工合が稀であるやうに考へる。

然らば女子は到底それらの智識を要するものは不向であるやと云ふに、之に就て興味ありと思はるゝは文學の事である、即ち昔の紫式部とか、又は淸少納言抔といふ女流は、日本文學の元祖とも云はる位で、なか／＼侮ることは出來ないのである、併し一体に我國の女流文學者は、之を外國の詩人又は

小說家と稱するものに比較すると隔たりがある、即ち形式が小さい、例へば、加賀の千代女の如きも、婉麗で輕妙で、朝顏に釣瓶取られてもらひ水と、云ふやうに實に輕妙である、けれども如何も其範圍が狹くて、その言ふ所が自分を離れて居らぬ、また古今集に出て居る、

春霞いまぞ見捨てゝゆく雁は
花なき里に花ぞめづらん

と、これは伊勢の歌であつて、その心持は、今この地を見捨てゝ去りゆく雁は、もとより寒い土地を好むので、その寒い土地には花の無いものと思ふが、併しまた其寒い土地には、その地相應の花のあるものと見えて、その花を愛觀に行くものと見えると云ふやうな工合で、これまた範圍が狹くして、幾んど自分といふものを離れて居らぬ。

更に移りて繪畫の側を見るに如何かといふに、是まで描かれたる女子の手に成れるものは一般に實物が多い、先頃上野に開かれたる文部省の展覽會とか、又は玉成會とか云ふ處に陳列せられたる所の物を見るに、何れも女流の出品物は生物即ち靜かな物が多きを占めて居る、これは東西ともに同じ工合のものと見えて、名高い佛蘭西の女流畫家ボンヌール女史の如きに至りても、その描かれたるものは虎とかライオンとかいふやうな動物が多いのである。

そこで世の中には、それ其ごとく假令大家といひ名家と云はるゝ女流でも、到底文字や繪畫に限らず、男子を凌駕するといふ事は出來ないのであるから、矢張女子は男子に比して智識の點に於ても打勝つことの出來るものでは無いと、云ふやうに女子を輕侮する論者もあるのであるが、それは少しく論者の思が到らぬ點があるのであらうと考へる、即ち男子のやうに、

ある一定の時期

を計つて、充分勉強の餘地を與へぬからではあるまいか。

前にも述べたる、深く且つ高い智識を要する哲學

とか、又は數學科學等の如きも、昔し希臘がゴーデン、エーチ即ち黃金時代に出た大學者ペリクリーズ氏は如何であるか、素より此人は篤學の爲に後世まで名を垂れたには相違ないが、このペリクリーズ氏の背後には一の女流の偉人が潜んで居つたのであるその名はアパーシャーといふ婦人で、このアパーシャーといふ婦人は、昔で云へば日本の白拍子靜の如く、今日の韓國で云へば官妓といふやうなヘチラといふもので、宴會や酒席などへ出て、種々の物語や舞などをして座興を補くるといふ勤をする一女子であつたのであるが、このアパーシャーは其にも關はらず、政治や哲學其他抽象的推理的の智識を要する種々の高等なる學科に精通して居つたので、爲にペリクリーズ氏をして不朽の名を成さしめたのである單にペリクリーズ氏に寄與したのみならず、ソクラチース氏の如き碩學も、しば／＼アパーシャーに種々の疑義を質したとの事である、降つて紀元四百年代に於けるアレキサンドルのヒパーシャー夫人の如きも智的の人である、それよりも最近に於ける彼のラヂユームの發見の如きは、その成功の大半以上はキユーレー氏の夫人の力であると云ひ傳へられて居る、又これは素露國の婦人であるが、自分の國では出來ないと云ふので、遂にストツフオルムへ行つて、コバレスキー大學の敎授となられたスチデン女史の如きもある。

斯く云つたならば、或は多くの婦人中には左樣いふ擢んでた婦人もあるか知らないが、それは千人に一人とか、又は萬人に一人とかいふのであつて、それを以て一般の婦人を律することは出來ないと、云ふ論者もあるか知らないが、兎に角

女子にも斯可能性がある

といふ事は否むことが出來まいと考へる。

日本では未だ斯ういふ統計が出來て居ないから、且らく米國の例を引證する事とするが、それは米國のシカゴ大學の敎授トムソン博士が、男女の學生に就て其智性の如何を研究せられたので、年齡は十九

歳より二十五歳までの者の間で、最も興味ある學科は何かといふ質問に對して、科學に於て男子の十に對する女子の十四といふ數を示し、最も困難なる學科はといふに對して、數學に於て男子の十二に對して女子の六人といふ比例を得たのである、尚ほ此他にも種々な比較研究があるけれども、今は其を省くとして、兎に角以上掲げたる僅少の比較研究に徴しても、女子に高等なる學科を咀嚼するだけの智識が無いといふ事は言はれないと思ふ。



右に依つて見るも、ダーヴン氏の進化論のやうに、到底女子は男子の敵でないと云ふ事は云はれない、例へば繪畫であらうが、詩であらうが、又は哲學や數學の如き高等なる學科であらうとも、必ず女子にも男子のやうに十分勉强の時間を與へて、十年乃至十五年の長日月の研究さへさせれば、急度男子のやうに成業すると云ふ事は是を以つても證せられるのである、左すれば世の女子たる方々は、幾ら論者が兎や角と言はうとそれらのために決して落膽するにはおよばない、否

諦らむべき筈のものでは無い、出來得る限りは高等の學科も研究せらるゝが良いのである、と云ふものは、修養の如何に由つて、必ず其を咀嚼し消化する事が出來るからである、それのみならず、高等の學科を理解して居る時には、その爲に各自の生活上に利する事は幾何であるかゞ測られないのである。

（文責在記者）

マロツク孃の婦人觀

井田東陽

家母すなはち原語のハウスマザーと言葉は、これを耳にするだけでさへも優美で、且つ穩健であるかゞ想察せらるゝのである、何となれば、その家母なる言葉の裡には、暗に賢明、親切、慰籍、善良などいふ總ての性質を含蓄せらるゝ事を言顯はして居るからである、實に幸福なる階級を經て、妻となり母となり、おのづから家母といふ運命に逢へる者、或は他家に養はれたる娘主婦、さてはまた近く到る所の國々に於ても多く見る例の、父母の遺産とか貯蓄とか云ふものに依りて、多くの資産を得たると同時に、兒童の養育その他の注意と義務とを有する寡婦の如き、何れにしても家庭に於ける主婦たるものは一方から見れば大層幸福であるが、それと同時に他の一方に於ては嚴肅でなければならぬといふ事を承知して居らねばならぬのである。

一体服從するといふ事は、溫柔、愉快、優美なるものには相違ないが、併し人の品性といふものは、單に他人に服從すると云ふ斗りで完全なる發達をしたものと云ふ事は出來まいと考へる、と申すものはこの多數の婦人の生涯の中には、

如何にして支配せは可なるや

詳らかに云へば、如何にして自己を支配し、如何にして自己の周圍の者を支配して宜しいか、と云ふ事を學ばなければはならぬ時の來るものである、抑も物事を專斷したり、或は己が意志の儘にしたいと云ふ

權力を愛することは人間の本能より來るものと見えて、彼の極めて幼き兒童の中に、猛き性質を有つて居る時には、それより少々年上のものまでも、それに從ふものであると云ふ事は屢數見る所の實例である、斯く云へばとて、茲に一の注意すべき事がある、幵は權を專にすることゝ支配すると云ふ事とは、これ全く反對の性質から出るものであつて、その間には大層の差別のあるもであると云ふ事である。



曾てある嚴密なる思想家の言はれたやうに、最も多くの婦人は、少くとも其妙齡の時代に於ては、習慣と氣質との然らしむる所に因り、單に形容詞たるに過ぎず、中に就て能く實名詞となるの機會を有するもの尠なし、言を換へて云へば、多くの婦人は唯形容に過ぎないので、能く他を支配するの機會を得るものが少ないのである、併しながら



他を支配すべき地位に立つた婦人が、果して自然に適つたものであるか如何か、抑もまた羨はに足るものであらうか如何か、其事は暫らくお預として置く、要するに婦人の生涯と云ふものは、是まで凡て男子の爲に支配せらるゝの習慣があつた、尤も其中に或は保護を受けた者もある、又獨り立ちて保護を受けないものもあつた、のみならず、稀には進んで他人を支配し、或は保護すべき事情の下に立つた者もある、けれども斯く他人を支配すべき運命に遇へる婦人は、却々これに處する事が頗る難く、且頗る痛ましい事を見受けるのである、蓋しそれは何故に左樣であるかと云ふに、畢竟それは彼女に於て、是より以前毫しも左樣いふ場合に處するの準備が無い、たとひ有つたにしても、却つて準備の無いにも勝るやうな手立てのみである、要するに、全く如何にして支配して宜しいかと云ふ事を知らないのである、されば婦人が一たび斯樣な場合に臨んだ時には、一家の適當なる整頓管理とか、會計の整理とか、又は婢僕の監督や指揮などの事に至つては、擧げて自然に任せて置くの外は無いのである。

　譬へば、一家は猶ほ一の小王國のやうなものであつて、その王國が一朝にして政綱が紊れ、朝臣が權を弄して紛爭が止まず、且つ國王は暗愚であつて政紀が張らなかつたならば、云ふまでも無く政令は下に行はるゝと云ふ事は無く、從つて世を擧げて禍亂の中に沈淪するといふ鹽梅で、遂に何とも手の附けやうが無い、纏りが附かないと云ふやうに、若しも家政の宜しきを得なかつたならば、家族や婢僕は如何して宜いのか分らんといふので、朝から晩まで毎時もウロ／＼して居るといふやうでは、必竟破滅に皈するの外は無いのである、昔ある詩人は、オー國土よ、卿の國王の幼弱なる時、卿の痛ましさはソモいくばくぞや、と歌はれたが、われは、オー家族よ、卿の主婦が、幼弱なる者にもまして無智無能なる時、卿の痛ましさはソモいくばくぞや、と警告したいと思ふのである。

王國が政を失へしと等く、家族の治め方が宜しきを得ざる證據は、此小社會即ち家族の勞働の根本たる、婢僕を制御する塲合に於て顯はるゝは事實で、大抵人々の知る家族の中、その半以上が婢僕に關して苦情の無いのは何故であらうか、たゞ婢僕の過失と認めて可いものであらうか、支配する者と支配さるゝ者との地位の上より自然に起る結果であらうか、抑もまた何人も非難する事の出來ない、他の惡むべく避け難き、人生の多くの狀態と同樣なる一狀態であらうか。

我等は今最も多く人の注意に上れる、中等社會の家族に於ける主婦の中より、著しき見本を取りて、その家政を行ふの途が、宜しきを得て居るかどうか、特に婢僕を御するの道が、當を得て居るか如何かと云ふ事を觀察して見ませう、勿論これらの見本は、それ／＼の一人々々に當箝て云ふのでは無くして、兎も角も一階級を總括して、その概括したる上に假りの名稱を附したのであるが、何故さうしたかと云ふに、孰れも之は其結果の上より觀察したので、その原因に就ては究めないのである、その原因を究めて其人に當箝めると、或は其人の全道德を害するの恐れがあるからである。

スミス夫人の家政

何人でも此夫人の家を訪ねるごとに、一家の整理方を變更した由を聞かぬ者はない、又何人にても凡そ四週間ばかり經つて其門を叩くと、その都度見知らぬ顏の下女が取次に出て來るのを目擊しない者は無い、そして夫人の長男で、今歲僅かに九々の表を暗んじた小兒が居る、この兒が夫人の結婚後に出換りたる家婢の人數を計算すると、いつにても九々八十一人まで行つて、その上の勘定には首を捻るのである、併し解雇されたる下女の中にて、五六十人の外は然まで惡いものでは無かつたけれども、夫人の云はるゝには、惡鬼の小兒が女に妖化て來るとも、よも彼等に勝る惡しきものではあるまいと、今如何なるものが解雇されたかと云ふに、試みに其二三を

擧げて見れば、燒肉の脂を賣り、或は巡廻の査公に燔肉を與へたる料理人、掃除をなし、皿を拭ひ、食堂に侍して給仕し、訪問者があれば走り出でゝ取次ぐ等、小間使としては申分なきも、洗濯と裁縫の出來ぬ下女、又いやに外見を飾るが好き(夫人の口調にて)にて、厚がましくも夫人が二三日前、流行の內側に草花の飾りある帽子を求め來れるを見て、直にそれと寸分違はぬ帽子を求めて冠りたる保傅など、こそらが謂ゆる鬼の子の化物よりも惡しき連中であつたのである。

かくスミス夫人の腦裡は、絕えず家婢の問題で充たされて居つて、その全生涯は、抓く、嚙む、唾はく、罵るなどの賤しむべき家內の紛擾にて終つたのである、この夫人の家は立派でないのでは無い、又家婢の給料とても少ない譯では無い、尤も此給料は寛量なる良人の拂ふ所であるが、それでさへも此夫人に仕ふることを欲する婢僕が無いと云ふは、抑も何故であらうか。

それは何故といふまでも無く、家婢が辛抱して仕へないのは、全く夫人が主婦たるに適しないからである、即ち此夫人は家婢等に對つて命令したり吩咐たりはするが、肝腎の支配することが出來ないで、たゞ無闇に罵り懲すのみで、賞讃するといふ事を知らない、それに眞實の威嚴が無いので、強て威嚴を保てるやうに見せかけやうとするのである、約めて言へば、空威張に威張散すのである、それに有るか無きかの敎育で家婢等を使廻さうとする、換言すれば、無智なるものが無智なるものを制御しやうとするのであるから、夫人は始末の附かない家婢とし、家婢は道理の判らぬ奧樣として居るので、兩者の間が圓滑に行きやう筈が無い、假りに夫人が主婦の權を固持する爲に、彼が巳の帽子の眞似をしたとて、保傅に暇を遣はすほど甚だしいとても、若しも家婢の中にて材識のあるものは、この夫人が貴婦人の資格を有して居るもので無いといふ事を直ちに發

見するであらう、又もし實際人ありて、夫人の着せる綾織の上衣を脱がしめ、その馬車を賣り、その住める華美なる座敷より出でしめ、而して之を最下層の地窖に住はしめたならば、スミス夫人なるものはその召使へる料理番の下婢に比して、一點だも勝る所が無い事を見出すであらう、サテ此夫人に兎も角も氣に入つて仕へて居るものは、極めて立廻りの敏捷き小間使一人であるが、是は六ケ敷しやの夫人を籠絡する程の腕前を持て居るのでも知らるゝ如く、全く地窖の下より最上樓の室に至るまで隅なく立廻りて、家内中の整理を爲すのであつて、之は夫人に取つて至極都合が宜いから、他の家婢共よりも、一層永く召使うことであらうが、茲に注意すべきことは、この小間使の性質が他の家婢等よりも善良であるからと云ふのでは無くして、たゞ單に敏捷なる點に於てのみ、かくは永く勤むるに過ぎないのである。

ブラオン孃の家政

このブラオン孃の家族の治め方は、全く前のスミス夫人とは異つて居る、孃の一家に於ては、主婦の公平を失すると、家婢の辛抱の足らないとより起る所の兩者の間の不和、さては其他のコセ／＼した家内の紛擾の如きは少しも聞くことは無いのである、孃は家婢などゝ爭ふのは、まるで犬猫その他の下等動物に戯むるゝよりも劣れりと考へて居るのであるから、かゝる賤しい事は夢にもしないのである、孃は性質至つて極めて嚴重であつて、能く主婦たるの義務を盡し、規則正しき給料を與へて居るが、一體孃は門地と教育とに比しては收入が少ないので、實は家婢に與ふる給料は至極低廉なのである、併し孃は餘分の勤勞を爲さしめない代りに、休暇を與へる事も極めて嚴重で、家婢は何れも隔週の日曜毎に教會に詣づる事を許され、その外一ケ月に一日の休暇を與へらるゝ事になつて居る、孃の家計は吝嗇の方では無いが、頗る節儉であると同時に、萬事が恰かも時計仕掛のやうに行はれん事を望まれるが、それが又能く行はれて居る、且又孃の性質は自ら過失の

無い事を期せらるゝは勿論、他人に於ても過失があつて非難しなければならない事の無いやうにしたいと平素心掛けて居らるゝから、若しも萬端規律正しく行はれぬ事があれば、その時には躊躇なく家婢どもを解雇するといふ主義を執つて居る。

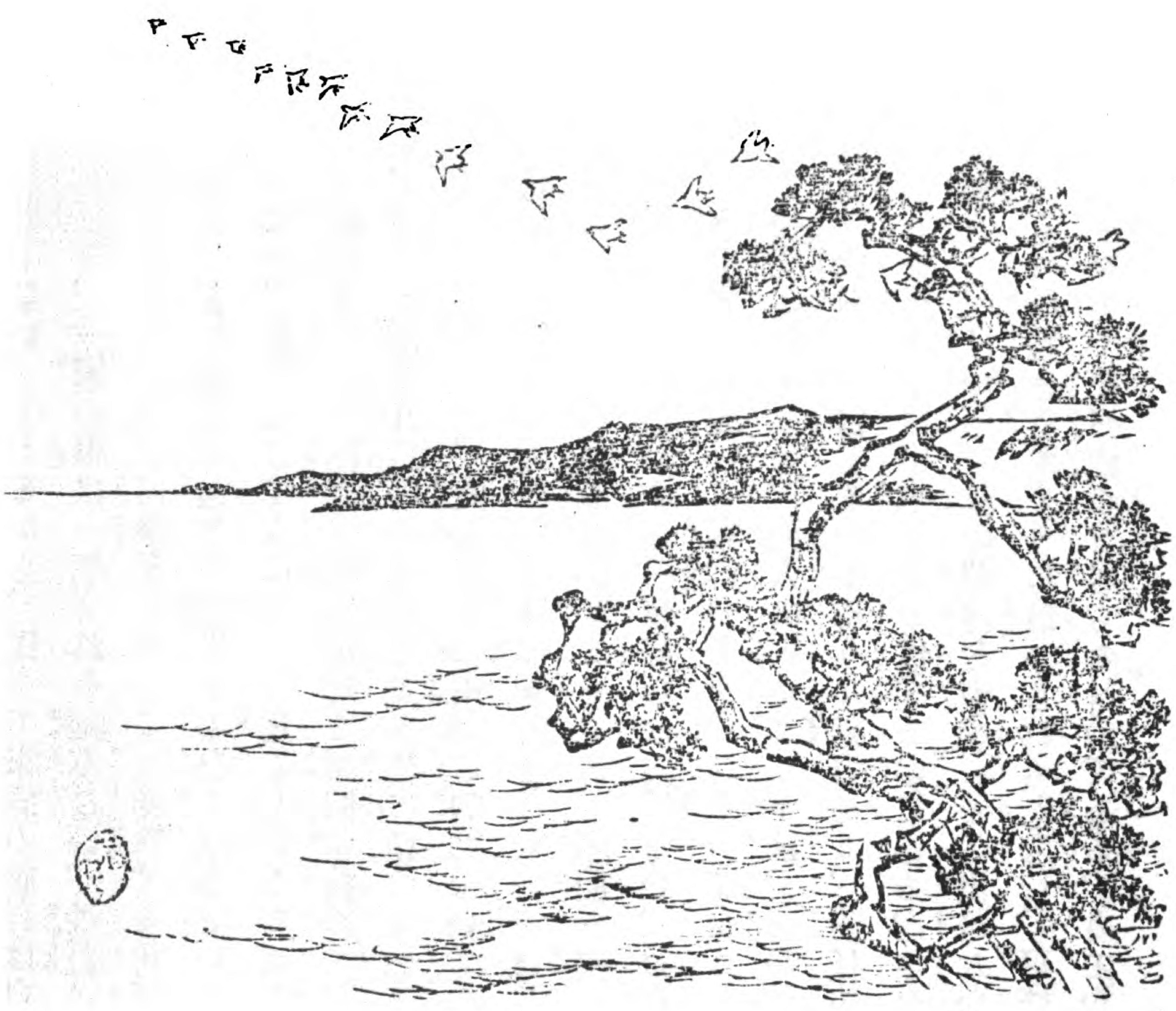
何事も孃は良心に從つて行動する崇敬すべき淑女であるから、自ら行ふより以上の事を他人に望まない、去れば召使へる婢僕一人として之を尊崇せぬ者は無い、されど斯く嚴重であるから、孃と婢僕等の心の間に何となく間隔があつて、謂ゆる肝膽相照すと云ふやうな調子には行かない、それ故に何人も、孃と其下婢等が婦人といへる同じ血肉を分ち、且つ死して同じ塵灰に歸するものとは信ずることは出來ぬであらう、蓋し下婢等が能く孃に服從し、且つ能く勤むる事は正當であると云ふであらう、けれどもまた彼等が同情を表するといふ事はなく且つ之を信じないのも、それは無理ならぬ次第と言ふであらう恐らく孃とても、數月の間心地が常の如くならざるも、孃の嚴格なるに怖れて、推して勤めつゝありし家婢が、孃に侍せし目前にて卒倒し、その夜死したる時、或はインカーマンの戰爭（一八五四年クリミヤの役）の報知來りたる當日、その軍に從へる壯年士官ブラオン大尉の事に就て一方ならず心を痛め、數時間幽暗寂寞たる客室に坐し、タイムス新聞を手にしながら一語をも發せず、憂に沈み居るに、一人の來りて大尉は如何にしたまひしやなど、問ひ慰むる者もなく、或は孃の顏色をうかゞひて苦しみを分つ者のないのを見たならば、その時こそは孃も家婢等が、心から己に服して居らぬといふ事を深くも感ずるであらうと思はれる。

ジョン夫人の家政

ジョン夫人の一家は、全體に於て家婢等が權も強く、何れも怜悧活潑にして注意深いのみならず、各自に己には價値があり、又才智あるものと信じて居る、されば彼等の美々しく着飾るのは夫人にも劣らない、チヨツト日曜に外出するにも日傘を翳し、そ

の受取る手紙の名宛には何々孃と認められてある、彼等は又クリスマスの贈物を分與せらるゝ際には其多少をさへ爭ふさへあるに、時々戸外に出でゝ意中の人と語らん事を欲するのである、或は女主たる夫人が不平を洩す時は、それに對して口答をするなど、すべて彼等の賞與とか又は特權とかいふものを失ふ事を恐れて朋輩の間は勿論、主婦に對つて迄も嫉視反目の態度を以て接するといふ風であるから、常に高慢であつて、少したりとも人に頭を下げまいとして居る。

さて斯樣に家婢等が自尊放恣に流るゝのは、これ全く主婦たる者が餘りに家政を寛に失したるに基くのである、此くても夫人は其性質が親切温順であつて、愁に懲誡叱責などして家婢等の反抗を招ぐであらうと氣遣つて居る、又かくして一



家に風波を起し、家政を亂し、且つ庭前に生ふる雜草の、芟ても亦直ちに生ずるやうな賤婢の過惡を咎めやうよりは、寧ろ少々の苦痛と實際數々の不便をも忍ばうとするのである、さて夫人は己が友達に向ひても、徒らに家婢などを叱責し、或は無益なる猜疑しやうよりは、己の意志を靜かにして所置したならば、萬事が圓滿に治まり、給仕人より雜仕女に至るまで、一家が肅然として治まると述べらるゝ、つまり夫人の言ふ所は、主婦たる夫人さへ堪忍して行けば、何事もなく治まるといふに歸するのであるから、之を聞く夫人の友達は、夫人の家族が實際に治まれるや否やと、夫人の信ずる處とを、思合せて、この夫人の爲に其思慮の淺いのを惜しむのである。

ロビンソン夫人の家政

ロビンソン夫人の家政は、平易に云へば極めて締りの無い治め方であつて、云はゞ凡ての家政中で最も危險なる共和政的の家庭に近いのである、この夫人は是まで永く放肆に日を送り、昏睡を貪つて起居

も敏活でない、であるから、從つて家族の成行は自然に任せ、一家の事は一切これを顧みない、性質は柔弱に過ぎて、誰が何事をしやうとも非難する勇氣が無く、また懶惰に過ぎて何事をも自ら爲るといふ事は無い、さればとて人に敎へて爲さしむるでもない、而かも夫人は固より明らかなる兩眼を持つて居るが、サテ指で姓名が書き得らるゝ程に積つて居る家具の上の塵埃は、幾んどその兩眼に映じないものと見える、併し夫人とても淸潔を好まないのではないから、自分は勿論下婢に至るまでも、顏面を美にし、衣服を麗はしくする事を好むは疑ない、けれども萬事獨りで勤むる家婢ベッチーに取りては、かゝる扮裝の遑もない、夫人は善良なる下婢、詳かに云へば給料に相當して働くやうな効力あり、責任ある婦人を得る事は出來ないと信ずるのである、されば夫人は、己が望む程の義務を盡すことの出來ない且つその義務を盡すやうに敎へられもしない、可憐なるベッチーを召使つて居らるゝのである、さてか

ゝる有様の起る所以は、よしんば貧困は避け難しとするも、塵埃や襤褸は始末の仕様のあること、又よし無智なるにもせよ、年歯の往かぬものは一般に敎育し訓誨し得らるべきこと、よしまた家は少さく且つ不整頓にしても、少なくとも掃除の出來ないと云ふ筈は無いこと、よし又晝食の献立が粗末なるにもせよ、調理の鹽梅によりては珍味となる事等は、夫人にもベッチーにも思ひ當らぬものと見える、且つ各主婦たるものは、たとへ下婢、少なくとも常に才智ある頭腦を持つて居るから、如何やうにも齊家の方法や、又は使役教訓の道があるであらうと考へる、もしそれ斯る頭腦を持つて居ないにしても、少くとも勞働に供すべき二本の手だけは有つて居るのである、夫人たるものは積つても分ることであらうと思ふ事は、若し汝が毎朝一二脚の椅子を拭ひ、或は蜘蛛の巣を掃つたならば、それを見たるベッチーは如何なる感想を起すであらうか、それが爲に一層汝を尊敬しないやうに爲るであらうか、詳かに云へば、

ベッチーは汝の爲す所を見て、何れも己が爲すべき事であるといふ事を悟り、そのやうに汝を煩はすを己が耻として、それより一層努めて汝を勞しないやうになるであらうか、是までと異つて汝自ら手を下し、且つベッチーにも手傳はせて晝餐の調理をなしそして汝の良人に供したならば、良人は其を不快に思ふであらうか、抑もまた一入味よく覺えるであらうか、汝の家は豐かならず又榮えず、恰かも之に幸福を與へぬと同時に、神の子たるの義務をも課せられぬやうに見える、されぱとて出來得るだけの力を盡して家内を清潔にし、家財を整理するは、主婦たる汝の務ではあるまいか、若し左樣しやうとて、破れたる椅子掛、或は綻びたる絨氈などを綴り繕へる爲に、汝の纎細なる指頭に針の迹を留めたのを、汝の良人なる人が見て、愉ばしくも亦愛しくも覺えないであらうか、されども汝はベッチーと同樣、左樣いふ事柄には心附かないであらう、今われは汝に一條の金言を贈らう。

汝は自ら爲し能はざるものを、家婢に爲すべしと望む勿れ、もし是非爲さゞるべからざれば、汝自ら爲すことを學ばんには如かず。

泰山を腋挾んで北海を飛超えるといふやうな事は固より絶對に神とても不可能の事であるが、一柄杓の水を持つて來るぐらゐの事なれば、三才の兒童でも出來る事柄である、家政を整理するものは克く此の間の消息を知らねばならないのである。

小兒の福音と寒不知

佐々木式哺乳器及び御伽煖爐

市下麴町區飯田町四ノ二二佐々木四郎氏は、自から牛乳を以て小兒を哺育するに當り、從來の哺乳器の不衛生的、且つ不經濟なるを嘆き、世の牛乳哺育者に同情し、苦神研究の結果、極めて安全にして經濟的なる一哺乳器を發明し、其筋の特許を得、更に小兒科の泰斗たる大學教授弘田長博士、及び皇孫殿下の侍醫たりし小田穎之氏の證明を得て發表したるに、小兒科病院長瀬川博士及内田堀川諸大家、又西尾、岩崎船曳、原、根岸の諸產婆、西、光村の諸看護婦は賞賛措ず、何も其指定品とせり、本器の從來の物に勝れる點は、内外無管消毒煮沸兼用掃除簡便價格低廉なる等にあり、從來の哺乳器は護謨管の取替のみにても、小兒一人につき一ヶ年六圓外に、掃除用ブラッシ代壹圓卅八錢を要す、佐々木式は全く右等の費用を省くのみならず、例の硝子管を用ゆる事なきを以て、硝子の破片を嚥下し、腐敗せる乳粕を吸込み、小兒の胃腸を傷ふ等の危險更に之無といふ、また近頃盛に輸入せられつゝある獨逸式及び米國式と本器とを比較するに、實に一ヶ年一人凡そ四圓七十錢乃至七圓廿錢の利益なり、しかも本器が其耐久力及び使用の簡便なる數等兩國式に勝る者あれば、全國小兒哺育者が普く使用するに於ては、其國家を益する大なりといふべし、本器は壜の目盛を兩樣とし、即右は二百瓦、左は一合迄とし、二十五瓦以下を五分し、煉乳調合に便ならしむる等、用意甚だ周到なり。

來るべき春の流行

三越呉服店
注文係主任　飯野一三

來るべき春の流行の事をお咄しするに就ては、固より春着の盛裝としては重に紋附であるから、左まで色合の事をお咄する必要は無いのである、けれども同じ春着といふ中には、必ず紋附とばかり限られたるものでは無いから、矢張り少しく色氣の事に就て述べて置く必要があらうと考へる。

尤も色氣の事に就ては前回にもお咄をしたが、現今は濃い鐵色のものは全く流行界から去つて了つて藍氣を中心としたものゝ中でも藤色が、まづ此暮から春へかけての流行色のやうに想はるゝのであるが併し同じ藤色といつても、餘り淡くない、言ひ換へれば單純の藤色でない。

藤色に少しく鼠氣を加味したものが喜ばるゝ傾が多いので、例へば、二十歳ぐらゐの年配の方なれば、藤の花の中へ少しく鼠色を加へたもの、即ち藤鼠といふ色氣が令孃や奥さん方に歡迎せられ、それより年上の方すなはち三十才以上四十歳の方々になると、藍氣の無い、そして餘り藤氣の無い、難波鼠、朧鼠、住吉鼠などゝいふやうな色氣の物が春着として御注文がある、之を繰返せば、藤色も間色であるが、それよりも尚ほ一層間色が多く好かるゝやうになつたのである。

それから尚ほ主なる流物の色氣に伴ふ所の副色といふものが、半衿とか帶揚とか、又は下着といふやうな物によつて流行するので、それにはクリーム色オレンヂ色、ウスヤナギ即ち柳の芽ざしの色等の數種である。

一時小供衆向として大層流行した所の褪紅色も、餘程昨今は以前と違つて、一般に淡い色を好くといふ風で、例へば、オレンヂ色と褪紅色との間色と云つた向のものが七、八歳ぐらゐの小供衆の春着として流行しつゝあるのである。

次に模様は如何かと云ふに、單に寫生風の美しい

謂ゆるたゞパツトしたといふものよりは、その寫生風のものを模様化させた趣味ある雅致あるもので無ければ氣受けが好くない、例へば、光琳風の草花を模様化した謂ゆる光琳式明治模様と云つた様なものとか、又は光琳風であるものを今日の絞り風にしたものとか、或はまた光琳風の模様を絞つたとか云ふやうな物が喜ばれて、是までのやうに寫生その儘のものは廢つたのである、例へば、上品なものになると、光琳風の地質の上には菊を出して、下には絞りの籬の中に繍で出すといふやうな工合、また上前に枯蘆を出して其中に鵞鳥の群を扱らつて、全部を工合よく光線を應用した繍にして、下前へ持つて行つて光琳風の水を配合すると云つたやうに、云はゞ趣向の異つたものが好かるゝといふ傾になつたのである。

お孃さんものは年一年と華美になつて來る一方で單に裾や袖の先ばかりで無く、胸や肩の邊までも模様を施して、殆んど總模様のやうなものが、十五、六

歳位の御年配の方々の間に流行するのである、約めて云へば、華やかなるものが好かるゝので、例へば、牡丹に菊に櫻に梅といふやうな各種の植物を、謂ゆる明治式光琳風に模様化して、それらを總体に工合よく配置して、それを刺繍と染とで出すとか、又は梅に雪輪を全体に配置して、幹や雪輪や花瓣等を、或は刺繍に、或は染模様に、或は絞りといふ風に、刺繍と染と絞りとで顯はしたといふやうな物が歡迎せらるゝのであるが、ツマリ是等は何れも上等の部に屬するのである。

帶はどうかと云ふに、副色にクリーム、オレンヂなどが流行する結果、金茶といふやうな色は遠ざけられて、薄鼠を好まれるといふ傾向であるから、帶には唯の白茶といつたやうな薄色が好まれる、即ちクリームの如き、又は白地のやうな物が春着としては注文が多いのであるが、その模様となると、成るべく一種のもので、種々のものが集つて、そして其れが一纏になつたものは流行らない、例へば、梅と

此外本裁にて袖下裾模様付及無模様等



本裁八掛付江戸褄模様五ツ紋



四ツ身袖下模様三文（無八掛）



四ツ身袖下模様三文（無八掛）



本裁八掛裾模様五ツ紋

か菊とかいふやうな、遠くからハッキリと見えるもの、人の眼に附くものに倚ほ一寸他の模樣を扱らつたものが流行つて、有職模樣などは全く地を拂つて影を潛めて了つたのである、そして其地質は金泥織とか、又は銀泥織とかいふもので、それに墨繪模樣などを織つたもの、或は全く墨繪を書いたもの等が流行するのであるが、倚ほ之に就て少しくお咄をすれば、春着の上へ用ゐらるゝ帶は、繻珍などよりも糸錦などが流行して居る、何故といふに、この糸錦は繻珍ほど光澤はないけれども、模樣をしつとりと沈着せて見せる點は、繻珍よりも遙かに優つて居るからである、またその模樣から云へば、前述の如く種々の模樣を集めて一つの模樣にしたものは廢れて極めて單純なものが歡迎される傾向がある、例へば、椿なら椿、藤なら藤を單純に現はしたものを云ふのであるが、その他には綴織、錦上綴の樣なものが流行で、之に次では厚板織であらう、それも縞物などには稍粹向が歡迎されますので、厚板織の變り物や、綴縮緬、靜波織、ゴブラン織等が盛んに行はれこれには又花卉の模樣化されたのや、廣東縞を模樣の中へ應用したものなどが專ら流行して居る、この傾向は近來御婦人の會などが盛んになつたので、いかに高價な帶にしても、さういつも〳〵同じ帶を締めて御出かけが出來ないから、取換へ引換へ締めらるゝといふところから起因したものであらうと思ふそして此流行は來春へも引續く樣である。

春着の襦袢となると、これは通例冬衣のものとは變へて、紋附下には餘り友禪ものは用ゐられない、例へば、白の紋縮緬とか、或は鴇色とか、又は鶸色とかいふ色のものが重で、形附けのものや絞りものになつても、ツマリ色ざしの澤山ないものが流行するが、これは模樣の多いと少ないとに拘はらず、前陳のやうな色合は至極品の宜いものである。

次に御婦人の羽織は、年を召された方は兎に角、お若い御婦人に黑のお羽織は餘り流行しません、矢張色物が歡迎されます、併しこれは正服の紋附外で

あるから、それを混じないやうに願います、そこで色氣は矢張りお若い方は藤色であるが、同じお若い中でも質素の方では淡雪、都鼠、朧鼠、筑波鼠、小町鼠などで、令孃向としては藤鳩羽、八雲鼠、紅藤色などであるが、羽織となると少々濃い色が引立つて見えるのである、そして地質は縮緬若くは鶉縮緬が優勢で、一時盛であつた絹縮の如きは、今は見やうと思つても見る事は出來ない、紋は色物としては先づ三ツ紋に限られて、紋形も八分五厘位のところが行はれて居る、その他はお召類の朧縞、木理縞等に縫紋をしたものが流行する、それも白糸ではなく、多くは地色に似寄つた糸とか、若くは薄鼠などで縫つたものが多く、縫もまた手縫や蛇腹縫は歡迎されず、絞縫とか、菅縫とか云ふのが流行で、又一時御婦人は綿入羽織の外は召されぬといふ傾になつて居たが、昨今では袷羽織を召される事が年一年と多くなつて來たが、これらも時代の變遷とやらであらう、さて縞物では矢張りお召縮緬本位で、色は衣服より少々濃目のものが流行して居る、而して北裏は如何かといふに、一時流行した繻珍の類は少々下り坂で、只今のところ羽二重の友禪が大層評判が宜い、といふものは、第一この羽二重は輕いばかりで無く、その辺りの工合なども繻珍から比べると宜いそれに型も織物のやうに平凡で無く、奇抜のものが多いから、自然歡迎される事になるのである、ソコデ少々變つたものになると、地質は矢張羽二重で、絞りを施したものなどが可成注文があるのである、御婦人の物はまづそれ位に止めて置きまして、少しく

男子方の春着

の事に關してお咄をして見れば、云ふまでもなく男子方の盛裝と云へば、まづ

黒の羽二重や斜子

に止めを刺すのであるが、下着となると薄鼠、例へば鼠に茶を含んだものが年一年と一般に流行するのであるが、縞物の上等品としては淸綾織、優綾織、

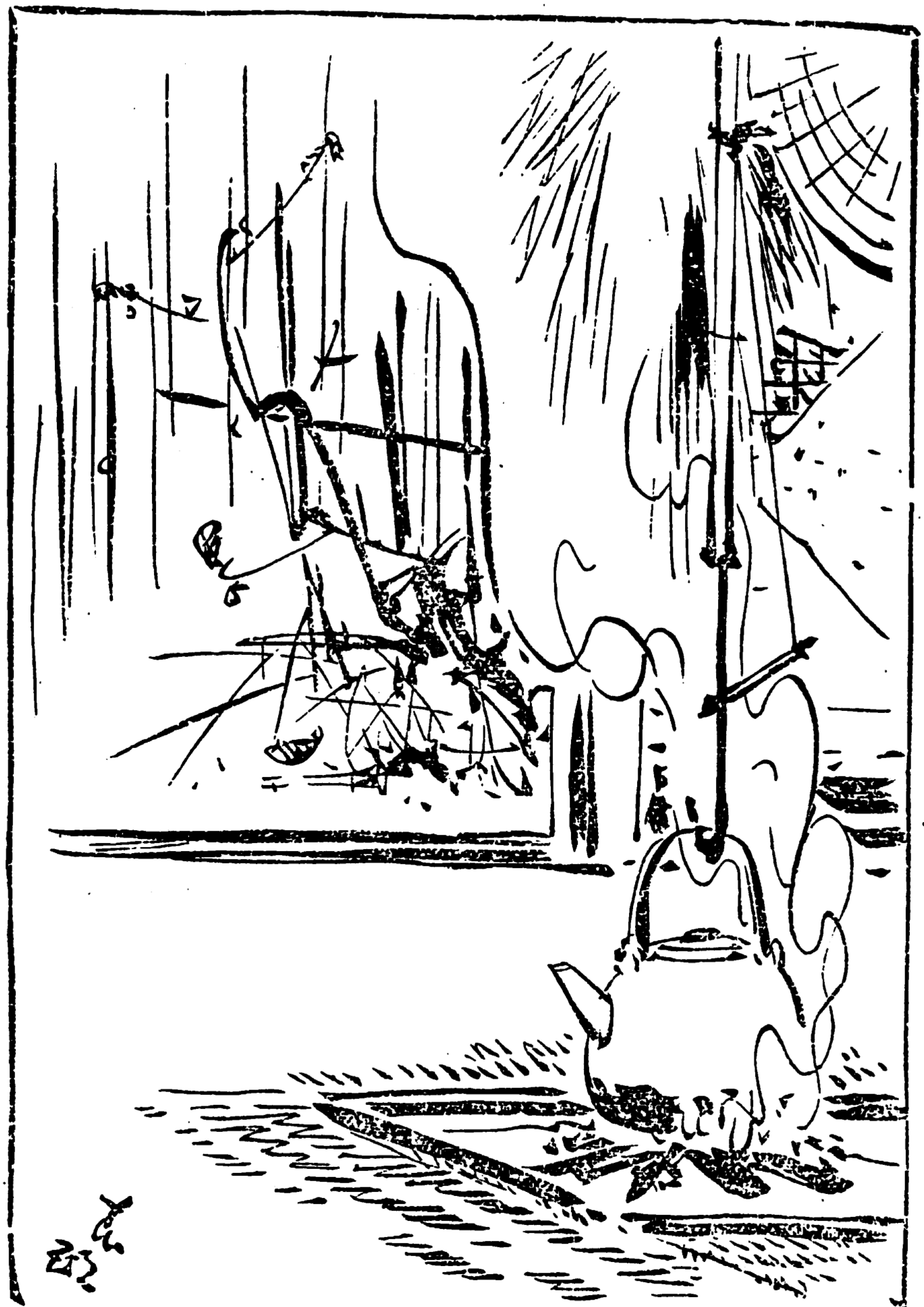
光華織、綾お召、綾糸織、繻織のやうな綾物、若くは縮質のものが大流行であつて、次で澁向のものとしては結城紬とか、大島紬とかいふやうなもので、孰れも平らな綾織風のものが流行して、その柄合はといふと、相變らず朧縞風のものが好かれて、縞であるか無地であるかと云ふやうなものは厭きられて來た。そして大體に於ては縦縞が喜ばるゝので、縦ひ横縞であらうとも、それが矢張縦縞のやうに見えるもので無ければ好かれない、而して其色氣は、鐵色は全く厭きて、鼠色の薄いものを歡迎せられるのであるから、大體から云へば大した變りは無いのである、それに是までは多く三枚襲ねにせられたのであるが、近頃は二枚襲の方が流行するのである。

それから男子方の羽織は、是また黒の羽二重や斜子で、紋は大抵鯨の一寸位で、そして五ッ紋に限られて居る、裏はどうかと云ふに、縞物に更紗の羽二重や友禪の羽二重や、又は繻珍などが流行つて、廣東縞は受が惡い、而して模樣は矢張光琳風の草花物を模樣化して、換言すれば、花やかの中に澁味を持たせたものが喜ばれる、尤も極品の宜い物になると白の繻珍とか又は白の鹽瀬などが迎へらるゝけれども、これは一般とは云へぬ。

袴、これは別に縞に變りは無いが、例へば、鼠の棒縞などである、よしんば横に縞の入つたものでも鎧縞のやうに縦に見えるものが喜ばれる、そこで地質は博多平、仙臺平、茶鵜平などが優勢で、そして綾織縞になると、表に縞を顯はして、裏は白地にして置かるゝのが例である。

男帶は、最早縞物はすべて流行しない、紋織風のものが好かるゝやうになつたのである、が、これは幾らか婦人化したのではあるまいか、即ち模樣もので博多の紋織とか、繻珍などが盛んで、これは極新らしい優華織と云つて、紋織博多に綴の味を有たした新製品で、至極評判が宜しいのである、而して色は一般に鐵風のものよりは茶鼠のものが歡迎せらるゝのである。

帽子で際立つて最新の流行といへば今更繰返すまでも無いが、世界各國の皇室の御用を受けたまはる英國のグリーン會社で製せられたシルクハットで、高さや鍔等には別に變りは無いが、全で是までとは打つて變つたのは、是までは凡て鉢



巻がリボンであつたものを今年は丸でそれを羅紗で巻くといふ事になつたのが非常な變化であるのと、是まで中山といへば概して黒に限られたかの如くであつたものを、今年は矢張り同會社製の色中山帽

子といふので、これまでの黒中山とは少し背か低くて、そして其色は茶に鼠を含まれたもので、至極わが國の男子方の顔の色との映りが宜いのである。
　それから中折帽子であるが、之は從前のものより少し脊の高い、鍔の餘く廣くないのが最新の流行でこの外鳥打帽子等は人々の好き〲であるから、取立てゝお咄する必要もあるまいと思ふ。

柴錦子の君の哥澤の家元を嗣ぎ
たまへるをよろこびて
文學博士　小杉温邨

うゑつく松の若みどり
ときは深むる色よくも
千代をかさねて吹傳ふ
風のしらべぞ面しろき

同　中川愛氷

幾千代をかけて通へる糸竹の
しらべともなれ松の下かせ

同　哥澤芝湍

人みなの道の栞と仰ぎつゝ
幾千代かけし嶺の松かせ

同　如瓜子

おもしろき波のつゞみの音そへて
千代をしらぶる岸の松かせ

菊　關口勇子

曇る夜も星かと見えてませ垣に
咲みだれたる白ぎくの花

打よする波もかをりて匂ふかな
いざやくまゝし菊の下水

殘菊　住山永年

露しもにたへてのこれるしら菊は
枯れたるよりもあはれなりけり

河上落葉　水上史郎

ながれ行くもみぢを見れば大井川
井せきも秋はさゞめざりけり

家庭舞踏の二　大漁船

大漁船紹介の由來

理學博士　田中正平

去三十八年の夏、銚子に遊んだことがある、客舍の軒に涼を入れて居ると、風がもて來るとでも云ひたげに、三味線、鐘、太鼓でドンチャン大騷ぎが始まつた、何事が起つたかと、垣根より音する方を覗いて見ると、長幼の男女打揃うて、盛んに踊つて居る、所がそれが盆踊と云ふやうなものではない、文句は數へ歌で大漁を祝して作つたものらしい、歌の節も踊の手も面白く、なか〳〵捨てがたい所がある、例の好む道であるから、早速旅宿の主人に交渉して、この踊の出來るものを呼んで貰ひ、歌と三絃の譜をとり、踊の傳習をもした。

無論地方的の歌であるから、歌ひ方には缺點がある、それは漁人か田舍的に歌つて、さう細かな譜節に合ふ譯には行かぬ、であるから三絃に乘つてキチンと拍子が合ふことは望まれない、その軌道を少し外れた所に多少の興味はないでもないが、それを直ちにそのまゝで我々の畠へ移植することは出來ぬ、そこで少々歌の節らしいものに直して見た、この時は別に廻り踊の材料にとも思はず、たゞ一の民謠として興味を感じ、ノート中のものにしたに過ぎなかつた。

さてこの大漁船の歌は、至極簡單で、寧ろ簡單に過ぐる程あつさりしたものである、然るにこの簡單な歌で、うまく歌はうとなると中々むつかしい、而して歌に餘裕があつて、美術的趣味を含んで居る、この歌は五六十年前この地に非常な大漁があつた、その喜びのやり場がない程であつたので、土地の所謂通人がこの

大漁船樂譜

大漁船



歌を作つた、手の舞足の踏む所が、自然この振に現はれたと云うてもよい程であつた、農人が農年を祝して歌ふ盆踊に比して、また一段の趣がある、一つの立派な民謠と云うてよい、否小唄として民謠以上に發達した面影がある。

但しこの歌の節は中々一夜漬で出來たものではない、作曲者は非常な苦心を經たに違ひない、それとも投機が當つたのかも知れない、この歌の中に、充分人を樂ましむるに足る要素が含まれて居る。

これを洗ひ上げて、田舍の泥くさい所を捨てたなら、大に日本の民謠として、味ふべきものとなるであらう、所が今年の春、美音會有志によつて、總おどりの研究が始まつた、幸ひこの歌の貯蓄があつたので、多少の訂正を試みて出品した譯である、振の方も古雅な所は少く、寧ろ近世の作であるといふ要素を含んで居るが、その振たるや、美術的踊にもよらず、されば迚て亂暴な姿勢もなく、至極簡單な所に何處やら優美な氣がするのである。

舞踏 大漁船

大漁船の拍子と手足の振

拍	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
子	ヒトツト	セー	イチバン	ーフネヘ	ツミコン	デー	カワグチ	ノリコム	オーヤゴ	エコン	ダイリョブ	ネヤコリヤコリヤ
振	1	2	3	4	5	6	7 8	9	10	11	12	13

この歌は十二の拍子より成ろ、されど手足の振は十三あり、即ち七の拍子の中に、七八の振をもり込む、振の圖解は振の番號による。

大漁船のうた

大漁船の歌に就ては、田中博士の談にて盡せり。左に歌句を記さん

一つさせ　一番船へ積込んで、川口乘込む大矢聲　この大漁船

二つさせ　二葉の沖から外川まで、つゞいで積込む大鰯　この大漁船

三つさせ　皆一同に招をあげ、通はせ船の賑かさ　この大漁船

四つさせ　よろ晝たいてもたき餘ろ、三杯一挺の大鰯　この大漁船

五つさせ　いつ來て見ても乾鰯場は、空間も隙間も更に無　この大漁船

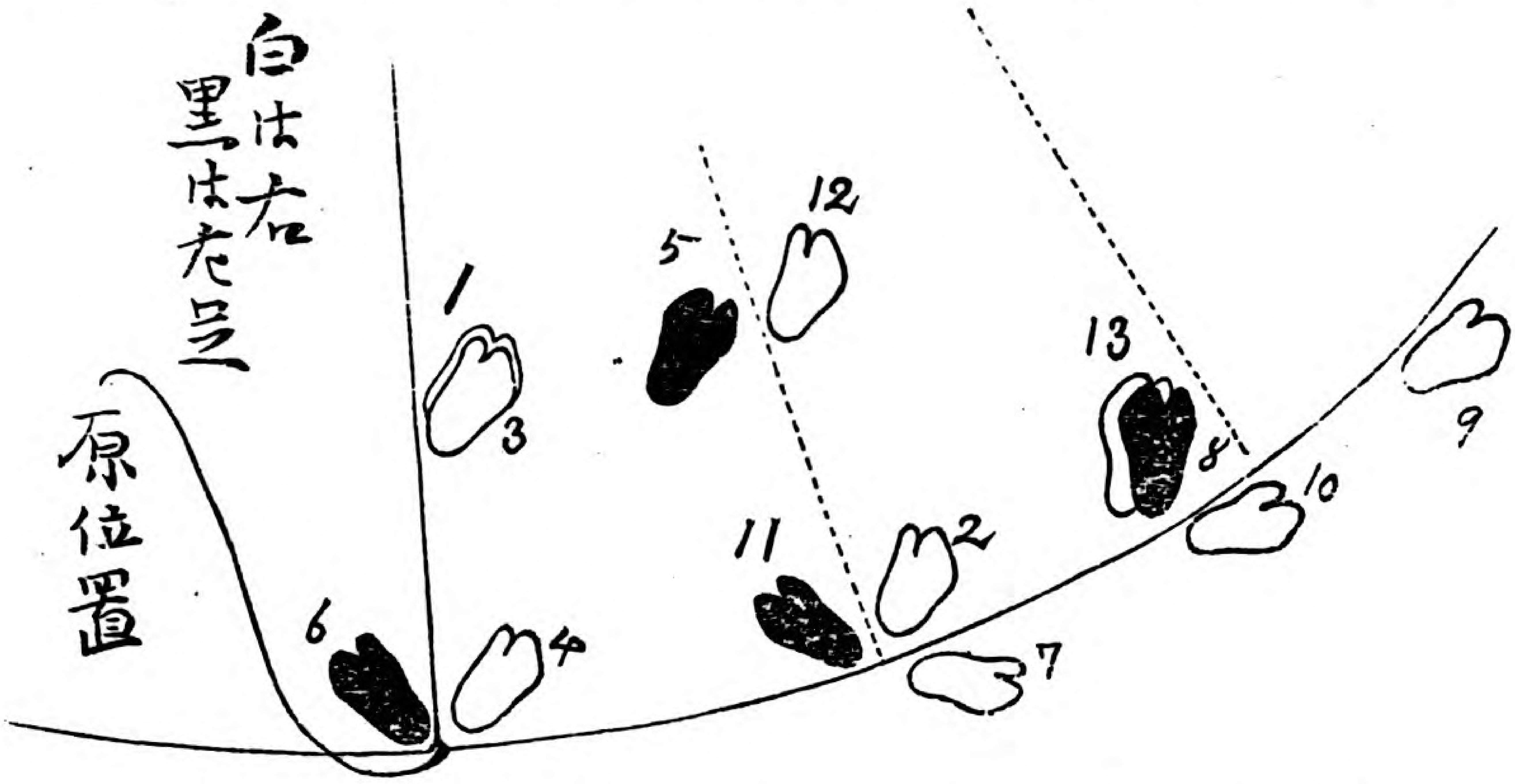
六つさせ　卯時から酉時まで粕割が、大割小割で手に追れ　この大漁船

七つさせ　名高き利根川一面に、粕や油を積おくろ　この大漁船

八つさせ　八手の沖合若い衆が、萬祝揃へて宮まゐり　この大漁船

九つさせ　この浦守る川口の、明神利益あらはせる　この大漁船

十させ　外國人もうらやまん、けふの踊の銚子歌　この大漁船



足の運び

この足跡は手の振に伴ふ足の運びにて必ずこの圖の如くには行かず、この圖はたゞその順序の大要を示したるに過ぎざれば、凡そこの順序によりて、廻轉舞踏さるゝ程度に於て、不自然にならぬやうすればよし。

この足の運び、(一)の足を、原位置の縱線を左に(五)の足と對峙する位置に出すをよしとする説もあり、されば(三)も同じく位置を變ずる譯なり、美音倶樂部にては兩樣あるやうにて、重に圖の如くなせど、道理の上に於ては、後者の説の方よきやう也。

圖中傍記の如く、(四)(六)の足は原位置にして、(十一)(十三)まで廻轉舞踏の歩をすゝめる譯なり、さて(十一)(十三)また次の原位置となして幾回轉す。



◎振の一　手を左側面に圖の如き位置にしつゝ、一拍子間に二つ拍つ、はじめ一つ拍つと同時に右足が出る譯なり。
この手を拍つは、はじめ手を多く開かずして、然も景氣ようつなり、この手の開きは、約一尺位なるべし。
歌の終は、右の足原位置の時とは、その開きに相違あれど、歌の初にかへる時は、前の如き位置に出すなり。

◎振の二　前に拍つた手を、足を右に引くとともに、少し右側面に向きて、手を左右に圖の如く開くなり。
この手の開くと同時に、上半身少し前にかゞまる、まさかに網を打つ形にもあらじ、可笑味のある所に價値あり。





◎振の三　右の足を前に出すと同時に、兩手を圖の如く肩の上にかざす。
この時身體を《振の一》の如く少し左側面に向け、足も亦《振の一》と同じ位置にすゝむ。
《振の二》よりこの《三》に移る姿勢甚よし。

◎振の四　肩の上にかざしたる手を、右の足を左の足に接近させて引くと同時に、圖の如く垂下す。

◎振の五　（振の三）と同じく、少し右側面に向き、左足を出す、即ち方向が左右に變るだけの相違にて、左の足を前に出すと同時に、兩手を肩の上にかざす。

◎振の六　（振の四）と同じく、たゞ左右の足の引き方が反對となるだけの相違にて、かざしたる手を、（振の四）に示せる圖の如く垂下す。





◎振の七　右の足を、回轉舞踏圓環軌道の右に出すと同時に、圖の如く右の手を下に、左の手を上にするやう少し離れて相對せしむ、右の手の甲は右の足と同じ位置にす。

◎振の八　今回は左の足を圓環軌道の左に出すと同時に、左の手を左の足と同じ位置にて下に、右を上に、前回の如く少し離して相對せしむ。

◎振の九　（振の七）と同じく、たゞ一足前に進む相違あるのみ、この七八九の手振、頗る優美なり。

さて右七八九の手振、たゞ手を彫付けたる如くにてはおもしろしからず、柳の葉の戰ぐ如くしなやかに手を上下すべし





◎振の十　左の掌に對して下手にある右の手を、掌をかへしつゝ、右の肩の上にかざして、右の脇の下に垂下す。
この時右の足を一歩退却す、即ち七八九と手振おもしろく前に進みたるを、この時足をひきつゝ、右の手をかざして下におろすこと故、目先かはりて、おもしろし。
この所振袖美しく揃ひたらんには、いと目ざまし。



◎振の十一　こたびは、前回と反對に、左の足を一歩引きつゝ左の手を左肩の上にかざして、左脇の下に垂下す。
◎振の十二　これは(振の一)と同じく、右足を前に出し、身體を左側に向けつゝ、手を二つ拍つなり。
◎振の十三　(振の二)の如く、拍ちたる手を、右足を右に引きつゝ左右に開く、然どこの開き方は(振の二)と違ひて、拍て引く手をまた輕く拍つゝ開くなり、これにて終り、また次の歌にかへる時、右の足を始の如く出すなり。

右の手振にて、七、八、九と三足進み、十、十一と二足退く故。この一足づゝ、歌一回に付回轉の度をすゝむることゝなる。
さてこのもと歌は如何なる故にや、九までありて、十の歌なし、こゝに『十させ』のあるは、たゞ數を合せる爲につけ加へたるにて、もとより歌の調子も違ひ、決して銚子あたりにてこれを歌ふにはあらず。

御祝儀かぞへ歌

この大漁船の節は、數へ歌ならば何にても合ふ譯なり、されど追分は忍路高島に限る如く、たゞ文字を見たるのみにては左まで感興を引かねど、この節はこの歌によつておもしろく、殊に『三つとせ』は頗る妙にて、通はせ船のと歌ひ來り踊り來れば、得も云はれぬ興味を感ずるなり。

さき頃某博士の結婚披露あり、その歡興を添へん爲め、この家庭舞踏を催ふしたるが、大漁船は木曾節とゝもに來會者の喝采を博したり、その當時左の新作によりて舞踏せられたるが、聲調よく整ひたれば、左に記すべし、このかえ歌はすべて優雅なるをよしとす。

一つとせ　人もうらやむ女夫中、かはらぬ契千代八千代、このおめでたや、
二つとせ　ふたり揃うてむつまじき、新婚旅行のでだちばえ、このおめでたや、
三つとせ　三棟四棟の殿づくり、花嫁御寮の新座しき、このおめでたや、
四つとせ　蓬が島もよそならず、君のよはひをつきじまに、このおめでたや、
五つとせ　いつしかしめた岩田帶、結びかためた二世の緣、このおめでたや、
六つとせ　繈褓ながらも子だからに、なほもさかえはいやまさる、このおめでたや、
七つとせ　なゝもゝとせも老せぬや、くすりの水は汲まずども、このおめでたや、
八つとせ　やをよろづ代の神々も、まもるめぐみの家の風、このおめでたや、
九つとせ　こゝにつどひし人々の、いはひさゞめく惣おどり、このおめでたや、
十とせ　十の指にもあまるまで、君がさかえをかぞへ歌、このおめでたや、

美顏術を受けたる記

尾上きく子

櫻の花の愛でらるゝ限りは、女の顏かたち美くしかれと願ふは、素よりその所なるべし、玉を包みても襤褸の袋は錦に代らんやうなし、ましてや向ふ鏡の影淸ければ、心の塵も拂はまほしく思はむものぞ。

われは宿世の罪深ければにや、顏かたちの他にすぐれて醜ければ、せめては心の垢を洗ひ淸めて、かの貞女の鑑なる小川直子の君が、せの君の御紀念を得給ひし時、その喜びの御顏に映し出されて、さまで美しといふほどの君ならねど、その刹那は並居る友どちをして、天つ乙女の降り來ませし如く、氣高くあでやかに、世にはかゝる美しき人もかるものかなど、思はしめたりしとありしにも似るべからんか、いな／＼それほどのことゝ何としてわが身には。

さいつ日、京橋區竹川町を通りける折、理容館と云ふ看版の目に入りたるが、日頃顏の醜きをくやめるおのれの、何として看過さるべき、されど思へばはづしきことかな、いかに美顏術を施す所とは云へその顏の如何になる氣かと問はれなば、さて答ふる言葉とてはなし、罪ふかきわざをするものよと憎ましう思はるゝを、女の淺き心とな笑ひたまひそ。

さりとはそこを去りかぬるまゝに、われにもあらず訪へば、よくこそと愛想よく出迎へられたるは、世にも稀なる美しの乙女、さだめて美顏術を施す人なるべし、斯ばかり美しき人のあるものをと思へば、いよゝこの顏をとも云ひよどむなり。

さすがにかゝる事には馴れたりと見えて、よくこそ來ませり、いざおん顏をと促したてゝ、後しざりするおのれの、いつしか施術室に伴はれ、兎角するうちに安樂椅子に仰向に横たはれば、胸より足にかけてショールを掛け、先づタオルの消毒して蒸されたるものにて二回顏を蒸さるゝが、打かけし香水の得ならぬ匂ひと、折柄の寒さも忘られて、春にも逢ひ

たらんやうの思ひしたりき、これやがて皮膚の毛孔を粗にしたるにて、これにクリームを塗り込み、一の吸收器にて毛孔内の垢を誘へるクリームと共に吸收し、それより數回各種のクリームを塗りて、護謨のルーラ其他の器具にて摩擦し、最後に冷水にひやしたるタオルにてよく顔面を拭ひ、毛孔の粗となりしを密にし、外氣に觸れて顔のあれぬ樣にしたり、かゝる間の凡そ四十分ばかりは、睡氣催すばかりいと心地よく、術終ればわれながら見違るほどになりしに、これほどの利目あらんには、さまで歎くにも及ばぬをと思ふも、また慾目にてあらんか。

館主は遠藤波津子の君とて、この道には一方ならず苦心せられしとぞ、はじめはかばかり利目のあるものとも思はぬに、美顔術といふ名の、その術を受くる人の後めだくも思はれて、今のやう持囃さるゝに至るまでには、容易の事にてはあらざりしなるべし、館主の君はおのれに向ひて、一葉の寫眞を示され、この寫眞の主に見覺えは在さずやと云はるゝにおのれは變れる事を問はるゝものかなと、いぶかしむ顔をそれと推したまひてや、この寫眞の主こそ、君のおん顔を借り參らせたるものなりと言はる、寫眞はなめげなれど、薄き痘痕さへ見えて、いづれかと云へば醜き方なり、さておのれに施術せられしは、十人並をすぐれて美しきに、不思議の事よと更に見比ぶれば、なる程その面ざしはあり、よく〳〵見れば顔の格好はそのまゝにて、たゞ痘痕に加へてむさくろしうも見えしソバカス、シミとも見えたるが、痕もなく消えたるに、薄化粧さへしたれば、さてこそ斯くは美くしうなりたるなれ、さるにても美顔術の利益のいやちこさ、わが顔美しかれと神に祈らるゝ方の何をさて置きても、この術を受くべきものとこそ。

かくて思ふに顔に紅白粉を塗るほどの人は、いはでも知るく、わが顔美しかれとてなり、さるをこの美顔術受くる人は、おのれのこゝに來ることを、ゆめ他にな洩らせそと、いたう惡しきことにてもしたらんやうにも思はるゝは、合點行かぬことなり。

美顔術を受ればとて、黒き顔の白くならん筈はなしさの事なれど、薄き痘痕ソバカス、シミ、細き皺などは此術によりて取去らるゝほどなれば、顔を艶やかにする事と、尋常にては除れぬ毛孔中の垢を取りて、顔の美といはんより、顔の衛生にも此上なし、されば此術を受くる者は、必ずしも若きに限らず老いたる人の、さなきだにぢゝむさうなれるを、清らかにするは、其身の為とよりも、他に對する禮義の端ともなるべし、扨も此術をいつはる人のありと聞くぞうたてき。

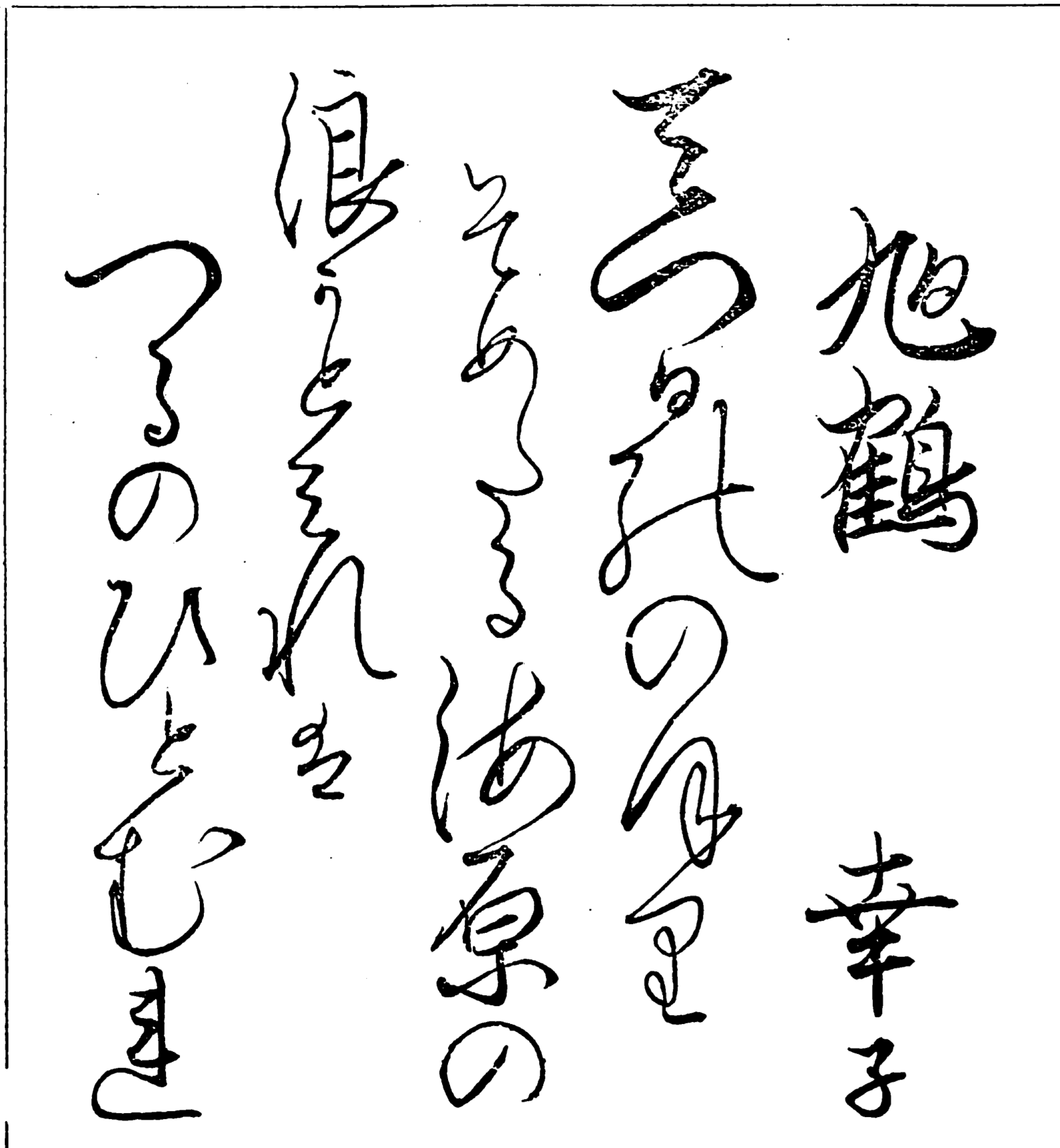


中山幸子刀自

明治の女鑑と仰がれし、中山幸子刀自は、多年病軀を驅りて愛國婦人會、共立育兒會さては各種の慈善事業の爲に多大の賛助を與へられしが、遂に起たず、去る十八日白玉樓中の人となり給へり。

刀自は文武の道より風流の術にも通じ、一日杜鵑の聲を聞きて感興湧き、夜を徹して吟詠三百首に及び、そを本社に投ぜられたるが、いたく世の斯道に遊ぶ人をして感賞措く能はざりしめたり、今や其人亡し、哀しいかな。

下の歌は刀自の眞筆なり。





東京帝國大學講師 佐々木信綱先生選

冬の月

天
福島縣福島市本町　伊東よし子

冬しらず天の雄神が白金のかぶとのごとも照れる月かな

（評）一首の調ひきしまりて、まことに冬の雄神の雄々しき姿を仰ぎ見るが如し



地
越後西蒲原郡卷校　松永繁子

はんの木のまばら細道雪の道道一筋を月寒うてる

（評）まさにこれ一幅有聲の好圖畫。

人
美濃關町明淳寺内　原もと子

あたゝかくならば〳〵となぐさめて母をみとりぬ月さむきまで

（評）あはれ深き歌、いかで此母の病、さくいえよさここそ

秀逸

◎遠江　夏日かく子

船を出て一かたまりにのぼり來る人かげ寒し月の眞砂路

◎横須賀　藤原下枝子

誰そ追ふさ我足音を疑ひつ枯野を急ぐ冬の夜の月

◎岐阜　中西よし子

猿なく聲もきこえて山寺の庭もの淒し冬の夜の月

◎横須賀　柏原美奈子

焼跡の廣きが中に黒く立つ土藏の上の冬の夜の月

◎

全山の猿の音すごし阿閦くむさ
月かげくだき氷わる夜半

岩代　岸野なか子

◎

月氷るつくば颪の身にしみて
わかれし友を偲ぶ夜かな

東京　倉重利子

◎

岸ちかくましら聲して山中の
水うみさむく月さえ渡る

岩代　岸野菊子

◎

こがらしはうしろのまつにあつまりて
つきにさはりもなきいほりかな

須磨　有村紫芳子

◎

冬枯の木立淋しき庭の面を
凍るばかりに照らす月影

東京　牧千啓子

◎

松くろく眞砂路白き磯づたひ
貝からひかる冬の夜の月

岐阜　文野さかへ子

◎

渡し場の柳は枯れて冬の月
水にうつれる影のさびしき

横須賀　小野ゆき子

◎

もみぢばをさそひつくしゝ木枯に
吹かれてすごし冬の夜の月

新潟　岩本芳子

◎

まつ人はかげだに見えず霜しろき
門田にさゆる冬の夜の月

山根しげ子

◎

艦に居ます吾が背子いかに寒からむ
月影凍る冬の夜半哉

東京　紀藤榮子

◎

夜を寒み坑を出で入る裸火の
二つ別れぬ金山の月

岩代　樹口ゆき子

◎

かれ尾花さびしきかげに墓のかげ
かさなりて見ゆ冬の夜の月

美濃　渡邊ひろし子

◎

那珂川やあしの枯葉に風さえて
氷をながす冬の夜の月

増田やい子

◎

たゞ一人枯野の岡にたゝずみて
亡き子を思ふ冬の夜の月

美濃　平岡かん子

◎

あはれにも辻占ひさぐをさな子の
呼聲さむし冬の夜の月

東京　中村千代子

◎

伯耆　錦織さち子

わらぶきの十月の村に霜しろく
　ろう梅さけり月さゆる宵
◎　美濃　傍島小枝子

木枯じは狂女のさけぶ聲の如
　ひゞきてすごしかたはれの月
◎　東京　神田けい子

冬の月大路にさえて更けし夜を
　かるたかへりの少女つれかな
◎　千葉　淺井愛子

霜しろき枯生の野邊の草の上に
　てる影さむし冬のよの月
◎　名古屋　土屋たま枝子

こがらしに雲も木の葉も散りはてゝ
　光くまなき冬の夜の月
◎　須磨　有村繁子

さよあらしふきしつまりて大そらに
　さえにさえたるふゆのよのつき

甲

○　横須賀　藤原下枝子
墓原や人夫が鍬に掘り上げし白骨寒う冬の月照る

○　北海道　清水清子
饉え狐ひさこゑさほく又近くれられぬ窓にこほる日かげ

○　常陸　金澤すゑ子
冬たけぬ船一つなき海原を千鳥なく夜の月ぞさむけき

○　秋田　長谷川薫子
白樫の枝もたわゝにふる雪のはれ間にさゆる冬の夜の月

○　名古屋　星野ふさ子
ながしゆくあんまの笛の音もさえてひかり身にしむ冬の夜の月

○　江岡　鈴木いわ子
薪採りに入りし孝子は歸りこで山口寒し冬の夜の月

○　本郷　星野千代子
霜白くさえ渡りたるおばしまに松の葉ごしの月を見るかな

○　山根よし子
くろこけの松の木たてるやけあさをさむけにてらす冬の夜の月

○　越後　岩本芳子
冬なればたれかもめでんつむ雪にこほりていづる山のはの月

○　横須賀　小野ゆき子
時雨せし雲はいつこに行きにけん冴え渡りたる冬の夜の月

○　遠江　夏目かく子
友いはず我語らはず峯越ゆる岨の三里の月の寒けさ

○　飛驒　南みつ子
白熊の遠吠きこゆ蝦夷が野の雪に照りそふ冬の夜の月

○　東京　牧千春子
行くれて野路になやめる巡禮の姿冷たき冬の夜の月

○　横須賀　渡邊比佐子
古寺の大木のいてふ亂れちりて木枯寒う冬の月吹く

○　兵庫　湖東澄子
月すごく鐘のひゞきのさえぐ〳〵て枯野の末を冬の風吹く

○ 清國 福田つる子
物乞がおごろの髮に霜見えて寐すがたさむし冬の夜の月

○ 横須賀 高橋つれ子
裏町の犬の遠吠へもの凄し冴えて影なき冬の夜の月

○ 横須賀 柏原美奈子
雪晴や松を離れて大空に限なく澄める冬の月かな

○ 美濃 呉 美勢子
檜切る斧の音やみて白雪の月にうつくし飛だの山ささ

○ 岩代 岸野せい子
ひじり逝きてとふ人もなき荒寺の庭ものすごし冬の夜の月

○ 伊豫 益田春子
枯木立堤にすごし荒川の氷にやどる冬の夜の月

○ 福岡 高瀬たけ子
凄まじう吹く木枯は身にしみて見る人もなき冬の夜の月

○ 美濃 長濱鬪子
はげましてやりしかなし子うるみ眼の面はいぢらし冬の夜の月

○ 千葉 土川千夏子
おく霜に光をそへてひさかたの雲井にさゆる冬のよの月

○ 須磨 有村とみ子
ましらなくこゑもこほれるしものみちくまなくてらすふゆのよの月

○ 佐賀 藤松りカ子
ふきわたる松のあらしも音ふけてしもにさえゆく冬のよのつき

○ 美濃 各務不美子
やむ母のくすり買はんと冬の夜の月ふみつけてあはれ少女子

○ 東京 武村よれ子
木枯のこゑさへ寒くみにしみてのきの垂氷に月やどるなり

○ 田代貞子
嵐吹きこほるしもよの中空に物すさまじく月更にけり

○ 下總 小澤よみし子
冬の月あはれ語らむ友もなし里居はたちの子にうすき幸

○ 愛媛 巽 秀子
霜やおくと夜半の窓に打見れば庭のくち葉に月やどるなり

○ 東京 水田ふみ子
冬の夜のひまもる風にさまされてさし入る月を夢かとぞ思ふ

○ 陸前 菊地みさを子
うたゝねのうつゝにさめて見るかげはみにしむ色や冬のよのつき

○ 岐阜 傍島敏子
乞食の子もらひしものを芭蕉葉につゝみつゆきぬ冬の夜の月

○ 神戸 小山濱子
木枯の風吻きすさぶ賤が家を淋しく照す冬の夜の月

○ 東京 靑木たま子
さえ〳〵てあふぐも寒し霜かれの梢をてらす冬の夜の月

○ 神戸 足立あさ子
こがらしの磨きあげたる冬の月天津乙女の鏡かと見る

○ 田代糸子
もみぢばの錦はちりて霜の上に雪より白き月ぞこほれる

○ 臺灣 浮洲德子
舟人の篷の雫も氷る夜に江の上高く冴ゆる月影

○ 仝
木枯の風はいつしか吹きたえて雲間にさゆる冬の夜の月

○ 岐阜 中西よし子
山寺や鐘の音たえて霜こほる片われ月に梟しはなく

○ 仝
老松の松の葉末におく霜に月さえ渡る天の橋たて

○ 美濃 牧 幾美惠子
深山寺のみ法もはてゝかへるさの小夜風寒しかたはれの月

○ましらなく片山里は霜さえて朽葉にしろき月のかげかな　神奈川　飯田榮子

○うらふれの我かげ寒く月さえてなみだつめたき北山のかぜ　伯耆　錦織賜子

○おのがゆくあしたの音のいさ寒く大路にさゆるふゆのよの月　名古屋　高橋かき子

○みやしろに通ふほそ道落葉してこずゑに寒き月の影かな　神川川　飯田榮子

○我かげを見るだにさびし冬の夜の月に向ひて何かこつらむ　神戸　足立ゑい子

○ほこ杉のかれえに冬の月さえて目路をさへぎるふくろうのこゑ　東京　杉田繁子

○でみせみなかへりし後の風さむし山門たかき冬の夜の月　美濃　傍島眞佐子

○捨小舟靜かにうかぶ池の面にやどるもすごし冬の夜のつき　東京　倉重千惠子

○丘に立ちて呼べば帆の人船ばたに遠き吾れ見る冬の夜の月　美濃　松田文子

○美くしき眞玉眞砂路貝がらのひかるも淸し冬の夜の月　美濃　遠山よしの子

○冬の月更けゆく森の古沼やをちの火事見る丘の上にして　岩代　岸野つれ子

乙

○己が影少さくなりて大路にはもの丶香すなり冬の夜の月　岩代　樋口ゆき子

○寒こりの鈴の音さえてみたらしのみ地にこほる冬の夜の月　山根しげ子

○さ夜ふけて犬もなきやみ風も死して只つむ雪にてる月のかげ　越後　岩本芳子

○賣出しの軒頭高く揭げたる旗かげさびし冬の夜の月　横須賀　小野ゆき子

○兵士はみな還りたるならし野のおく霜の上に照れる月かな　[illegible]　浮洲德子

○枯れはてし木々の梢に霜白く月かげ寒くてらす夜半哉　神戸　いし子

○狼の遠吠たえて荒寺の寒樹にすごき片われの月　岩代　岸野登代子

○美くしき人らかこめる歌の座に松影きよく冬の夜の月　美濃　松田雪子

○野に山に冴へ渡りたる冬の月霜の花咲く夜は更けにけり　横須賀　高橋つれ子

○漁火の何時とはなしに消えはてゝ水にうつりし冬の夜の月　仝

○降りつみし雪の小笹の影ゆれて梅の香さむし冬の夜の月　淸國　稲田つる子

○初しまだお高祖頭巾につゝめども尙はつかしき月のかげかな　仝

○黑髮の君と並びて磯の原松に見て行く冬の夜の月　美濃　松田昌子

○かゝる夜と涙ながらに武夫がなき友かたる冬の夜の月　兵庫　湖東澄子

○野ら犬の遠聲寒き木枯の寺門に高し片われの月　横須賀　渡邊比佐子

○　横須賀　渡邊比佐子
冬の月筏にのせて輿のせて下に湊江千鳥しば鳴く

○　美濃　松田直子
希望ある光はみてぬ雄心はそゞろに輝る冬の夜の月

○　飛驒　南みれ子
病みませる伯母をいたはる湯の宿のあしたつへたき冬の夜の月

○　仝
目しひ吹く笛竹の音やこほろらん影も寒けき冬の夜の月

○　遠江　夏目かく子
一人越す長き板橋小ゆらぎて踵おのゝく月寒き夜半

○　仝
月かげは冴え渡りつゝ大空にひゞき澄みのぼる那智の大瀧

○　仝
天地はひた遙きて月冴ゆる直下萬尺ナイヤガラ瀧

○　仝
虎吠ゆる竹林千里月冴えて木枯すさぶ唐の大土

○　山根よし子
おる度をかゝる霜夜にふむ女あはれすごくもてらす月かな

○　仝
都大路霜夜の月にわかふさの下駄ふみならしから歌うたふ

○　美濃　松田武子
緋の帶の小女美くし犬連れて一つ家をでる冬の夜の月

○　本鄕　星野千代子
折々に月のながめはあかれども冬の月こそいさあはれなれ

○　靜岡　鈴木いわ子
人絕えて艫綱つなぐ孝女一人やせし面輪にさす冬の月

○　仝
氷る夜の裏戸によりて今日も亦故里思ふ冬の夜の月

○　仝
風騷ぐ尾花が波に月浮きて狐飛行く霜川原哉

○　美濃　松田露子
辿り來し戀路明りの惜くき哉さゝゑかたなき冬の夜の月

○　秋田　長谷川薫子
琴の海氷たちわり魚とるさ篝たく夜を月冴え渡る

○　東京　平塚いさ子
狐なくや荒野十里の地藏そん立かげさむし冬の月かな

○　遠州　疋田こん子
水車音もさびしき一つ家のやれし軒ばに片破の月

○　名古屋　星野ふさ子
おもはずもゑりかき合せかけ入ぬまどの外寒き月の光りに

⊙　美作　鈴木雪子
竹の葉につむ雪今ななだれ落ちて月に眞玉さこほる夜半かな

○　美濃　松田信子
共に見し沖の島べのそなれ松冬の月いかに寒く照るらむ

○　伯耆　錦織よし子
中空にすみこそまされもちの月今宵やごりの雪ふかくして

○　横須賀　大澤まさ子
吹きすさぶ風ははだえをつんざきて空には氷るまんまるの月

○　相摸　服部八重子
大空に白き月一つ江の面に其影一つ冬の夜の村

○　仝
町はづれ障子にかこむ人影の居酒屋にぎはし冬の夜の月

○　仝
見るまゝに白く靜けく淸らけく果は淋しき冬の夜の月

○　兵庫　木村まさの子
秋風に散るコスモスのあさたえて凍るばかりにさゆる月影

○遠州　疋田伸子
倒れたる薄くゞりて行く水に淋しく見ゆる冬の月影

○神戸　神谷ひろ子
こがらしの木の葉誘ひし梢にはさはるかげなき冬の夜の月

○兵庫　佐藤萩子
水深く影もこほりて澄にけりびわ湖に宿る冬の夜の月

○伯耆　錦織千代子
この月をいかに仰ぎて母やおはす山三百里しら高き脊

○下總　大野ひさめ子
月白き嵯峨野の奥に琵琶の音のしらべぞきこゆ冬のまよなか

○仝
大阿蘇の灰ふる野邊に露をもつ花にうつりぬ冬の夜の月

○越後　水野やすへ子
雪道を病む友見んさわれ行けば白梅月夜影淒き哉

○下野　井上尙子
かり人が得物をなぶる谷川にひかりさむけき冬の夕月

○東京　岡本やす子
寒きよにみかたまゐるさよふ人のうしろをてらす冬の月かげ

○美濃　松田春子
冬の月妻戀て鳴く鹿が音に涙もらしぬ奈良の夜すから

○神戸　今西白露子
織りかはす塵の巷のあさもなく只ものすごし冬の夜の月

○磐城　木幡きよ子
月見てもおもひやる身は哀れ深しおなじよ渡る冬の山河

○美濃　芳翠敏子
なさむぞさ駒に打ちのる斥候の兄を見送る冬の夜の月

○麻布　倉重喜代子
ふきすさむ嵐に空のさへまさり枯野の霜に月ぞやどれる

○神戸　藤幸子
風さむき冬のみ空をながむれば月はさえ共母はいまさじ

○牛込　芦原浦子
かきあわすコートのむれも風寒き大路をてらすよひ月のかげ

○仝
街燈の光ものうき冬の夜の軒ばにさむき三日月のかげ

○相摸　中島類子
枯果てし野山を照す月さへも氷りてかゝるふる里の空

○神戸　今西操子
勇ましき鈴の音の世を偲ぶ哉驛路てらす冬の夜の月

○陸前　菊地さみゑ子
友さちさかへる夜さむくたまほこもくまなくてらす冬の月かな

○上野　小野里鶴子
枯尾花まねぐ方より冬月はかげもさやかにさしのぼるかな

○仝
行きくれてしはし岩根にやすらへば氷の如き冬月のぼる

○仝
故郷のおさつれなるか雁のこゑ仰げば高し冬の夜の月

○群馬　小野里佐久良子
水鳥の羽風に峯の雲晴れて澄みて宿れる冬の夜の月

○仝
澄み渡る空を寫せる泉水の面に氷れる冬の夜の月

○麻布　倉重靜子
霜の夜も氷らざるらむ天の川みか月淒く流れてぞ行く

○下總　月沖ゆり子
枯蓼に行く水寒し瑠璃鳥の啼けば冬月うかび出づるかな

○北海道　佐藤央子
やごりてしつゆのあさちのあけをさふ月かげこほるにはの上かな

○　美濃　松田君子
燈臺の影いと高し冬の月千鳥鳴き來ぬ磯の樂堂

○　清國　葉山綠子
山姬の化粧ふ鏡やみがきいでゝ枝にかゝれり冬の夜の月

○　群馬　吉田きく子
天高く凍りて出でし冬月は稚子もあきれて手だしかねらん

○　靜岡　渡邊實子
朝まだき神にあゆみをはこぶなり光くまなき冬のよの月

○　東京　佐々木壽子
霜も寒くふけゆく空に冴え渡る影も凛たり冬の夜の月

○　岐阜　中村はな子
くる月もまたくる月も月見れどさむけきものは冬の夜の月

○　仝
城跡や百舌鳥かれ寒き夕まぐれ山茶花ちりて冬の夜の月

○　仝
二見潟雲ゆく方をながめては父母しのぶ冬の夜の月

○　美濃　各務照子
山高くさえたる月はちさけれどかげいと寒き冬の夜半かな

○　横濱　鈴木まつ子
更科の里にてみれどふゆのよのつきの光りの淋しかりけり

○　河内　竹内敬子
うら枯れし柳の影に辻君のかほものすごし冬の夜の月

○　牛込　平塚白百合子
あら小田の鳴子のなはに霜見えてかゝし寒げの初冬の月

○　美濃　松田花子
木枯の折々吹きし岡の家の杏子木高し冬の夜の月

○　神戸　中川すみ子
畔道を靜にながる水の上にさびしく宿る月の影哉

○　近江　辻姚子
はつ冬や嵐の止みし夕ぐれを砧かすかに月は沈みぬ

○　相摸　山本久子
小笹ふりつ獨りつぶやく亂れ髪の狂女を照す冬の夜の月

○　美濃　松田時子
君が靈今宵浮くとぞ氣が淵に波に見て居ぬ冬の夜の月

○　兵庫　湖東靜子
業はてゝ歸り路いそぐ姉妹にさびしくてらす冬の夕月

○　仝
吹く風は顏面にいたき野中道寒月さへて行く人もなし

○　埼玉　横田秋子
角田川つくばねおろしさゆる夜は波間にすごき月のかげ哉

○　牛込　平塚つゆ子
千鳥なくやしも夜をつぐろいそでらのかれの音さえて月さむうてる

○　美濃　松田星子
夢さめてそとほゝゑみて窓により今や君見る冬の夜の月

○　神戸　錦本郁子
閨の戸を打出て見れば空さえて袖さへこほる夜半の月かげ

○　茨城　脇坂須磨子
古さとの不破の中山落葉して木の間にすごく月ぞみえける

○　埼玉　横田やな子
上總おろしさゆる相摸の浦に出て漁る海士人月をくだかむ

○　美濃　松田幹子
ふくよかの君が笑顏と冬の月思ひめぐりぬくれのぼたんを

○　美濃　後島みゆき子
谷ごよみ深雪つもりて山くづれ木の間にすごし冬の夜の月

○　大阪　木村春江子
こほりては影もゆるがぬ池の面の月にさわぐや水鳥のこゑ

貴族院議員
御歌所参候 子爵入江爲守先生選

遠山雪

天 佐賀縣呼子村　藤松りか子

谷かげの里は小暗くなりぬれど
まだ暮れやらぬ遠山の雪

地 新潟縣南蒲原郡中野村　岩本芳子

冬枯の大野の末に見ゆる哉
雪いやたかきいやひこの山

人 埼玉縣川越町　横田秋子

鳥は木に雲はふもとに歸るなり
ゆふべを殘す雪の遠やま

佳調

◎ からさきの松のあらしの末はれて雪さえまさる比叡の遠山　福島　伊東普子



◎ 夕ぐれの雲にそびゆる遠山のいたゞき寒く見ゆる雪かな　名古屋　高橋かき子

◎ 吹すさむ北山おろし冴ゆる夜は
遠のやま〳〵雪のかゝれる　須磨　有村繁子

◎ 松原のはての遠山けさ見れば
高根ましろに雪のかゝれる　名古屋　星野ふさ子

◎ 埋もれぬ山こそなけれふる雪に
遠きは越の白嶺なるらむ　岩代　樋口ゆき子

◎ 今朝見ればいつ降りにけむ遠山の
松が枝白くつもる初ゆき　神戸　小山浜子

◎ 朝ぼらけ紅葉ちりにし梢より
はろかに見ゆる雪のふじのね　品川　杉田繁子

◎ 吹く風も冬のしらべにかへりけり
をちのむら山雪ふりしより　岩代　岸野常子

◎ れりぎぬをかつぎしこゝにつらなりて
雪ぞつもれる遠のやま〳〵　須磨　有村さみ子

◎柴人の道さへたえて遠山は
みやこにしらぬ雪ぞふりける　田代糸子

甲

○都だに行手の道もしら雪に遠山里はいかゞなるらむ　神戸　足立ゑい子

○天そゝろ峯は八峯よ谷間まで雪さやかなり大八つが嶽　伯耆　錦織さち子

○をちの山みれ白妙にはれにけり夜のまや秋のわかれなりけむ　岩代　岸野登代子

○ゆあみ終へて背戸に出づれば風さむし遥き伊吹の山のしらゆき　美濃　平岡かん子

○我里にふる日やちかくなりつらん遥き伊吹根雪の白たへ　美濃　倭島みゆき子

○梅の花ほころび初めし朝より早つもりけり遠山の雪　東京　紀藤榮子

○常ならぬよへの寒さに今朝みればま白になりぬ甲斐の高峯　臺灣　浮洲德子

○遠山の峯の白雪ながめつゝ里は小春の馬士のはな唄　横須賀　高橋つれ子

○炭かまのけぶりうすれて雪つもるをひえのおくの小野の山さゝ　埼玉　堀越千枝子

○すみかまの遠山煙目なれても雪のあしたはめづらしきかな　埼玉　横田やな子

○おばしまに簾まかせて大君の歌に詠みます遠山の雪　美濃　松田文子

○紅葉みにのぼりしをちの山のはもけさはましろにゆきぞふりける　横濱　鈴木まつ子

○かすかなる炭やくけぶり今朝見えて峯には松に雪ぞかゝれる　東京　牧千春子

○わがいほをさふひさまれになりにけりやまぢや雪のふりつもりけむ　須磨　有村紫芳子

○狩りにいでし吾が背まちつゝ眺むればおちの高根にみ雪ふりけり　岐阜　中村はな子

○ありさたにしられすあるをふりつもるゆきに見えくるおちの山々　北海道　佐藤央子

○ほの〴〵さ明渡りゆく遠山のいたゞき白くつもる雪哉　河内　竹内敬子

○杣人は住めば都さ遠山の雪の中にや春を待つらん　磐城　木幡きよ子

○今朝見ればよへの寒さも知られけり富士のたかねに雪ふかうして　兵庫　今西益子

○きのふまでたづねし里のもみち山いたゞき遠く雪を見せつゝ　東京　水田ふみ子

乙

○空かける飛軍にむかう鉾さきかざばかり凄き雪の鈴ケ岳　伯耆　錦織よし子

○をち方の雪の峯より吹き來らむ紅葉をわたる風ぞつめたき　越後　松永繁子

旅に出でしわが子の上を思ひつゝかなたに遠き山の雪見る　美濃　吳　美勢子

○

寒風に母なつかしみなかむれば遠のみ山は雪ましろなり　茨城　金澤　すゑ子

○

暖き小春日和の船の上に雪積む遠の山を見るかな　横須賀　柏原　美奈子

○

野も山も雪より明くる朝まだき眺めはてなき遠の島山　兵庫　梶原　玉子

○

雲間はれ朝日の光り照りそひてながめ眩し遠山の雪　福岡　高瀬　たけ子

○

ふる雪もうづめかねしか遠山の白き峰よりのぼるけむりは　千葉　土川　千夏子

○

今朝はしも母がねざめやいかならむましろにみゆるふるさとの山　大阪　木村　春江子

○

浦つたふ一むら千鳥影きえてさほき山々雪ましろなり　美濃　目島　まさ子

○

降りつもる八重たつ峰の白雲は匂はぬ花の盛りなりけり　神戸　綿本　靜子

○

重なりてみ空さわがぬ遠山を今朝一筆の雪つみにけり　東京　平塚　つゆ子

○

病みませる母上いかに故郷の秩父の山は雪眞白にて　東京　山本　久子

○

ひさしほにけさは枯野の風さえて遠のたかねに雪ぞふりぬる　名古屋　土屋　たま枝子

○

窓明けてくれ行く富士を眺むれば高根に白き雪はふりつゝ　横須賀　渡邊　比佐子

○

昨日までくれなゐふかき遠方の高峯の山に雪はふりつゝ　美濃　遠山　よしの子

○

霜おきて尙ほほの高し白菊の垣間にみゆる遠山の雪　美濃　松田　直子

○

かさゝぎの啼く音寒し遠方の不二の雪みてくるゝ磯村　美濃　松田　信子

○

山住の身にも一入おもほへてあかずながめぬ遠山の雪　兵庫　湖東　澄子

○

夕べ寒く軒に吹きにし雪山颪今朝遠山の峯にかゝれり　美濃　松田　露子

○

きみゐますあたりの山はゆきふりてかよふちごりのなくれだもせず　須磨　有村　むらさき

○

うちはらふ天なる姫の袖の香に淸くもかをる遠山の雪　東京　佐々木　壽子

○

ふりわけて見する雪かな重なりて一つに見えし遠方の山の端　東京　平塚　白百合子

○

ぬば玉の夜をば寒みの朝戸出に眺むる峯は雪になりつゝ　飛驒　南　みれ子

○

うそ鳥や何さうたはん遠山のゆきのあしたのくしきすがたを　群馬　吉田　きく子

○

夕ばへの雲うつくしきおちこちの峯にかゝれる白妙のゆき　岐阜　中西　よし子

○

我里は稻苅り終へぬ昨日今日はや遠山に雪のつもれる　横須賀　小野　ゆき子

○

今朝見ればおもしろきかな夜べふりし雪に眞白となれる富士の根　淸國　葉山　みさり子

○

見渡せば遠のやまへはいつしかに花さみるまで雪ふりにけり　田代　貞子

○

なき母を忍びて夕の扉によれば遠山はるかに白雪のして　下總　月沖　ゆり枝

○　美濃　各務不美子
遠くさもいよ〳〵高し比叡伊吹けさ見る雪にあらはれにけり

○　東京　平塚いさ子
色もなき白雪ながら遠山をけさそめわけてふりにけるかな

○　清國　福田つる子
磯千鳥なく音もしげき此夜頃遠のみ山は吹雪するらむ

○　須磨　有村繁子
ふきすさむきたやまおろしさゆるよはをちのやま〳〵雪ぞつもれる

○　兵庫　湖東靜子
窓をせば吹き入る風の肌さむくをちの高嶺にゆき白ふみゆ

○　横須賀　藤原下枝子
今朝見れば遠の山々雪積みぬ母や越路にいかゞ在さん

○　東京　中村千代子
朝まだき汐風さむき波間よりましろに見ゆる高麗の山々

○　美作　鈴木銭子
いたづらに暮れゆく年のわびしさを更に思ひぬ遠山の雪

○　横須賀　大澤まさ子
彼方なる峯には雪の殘るらし綠さ白のまだら見ゆれば

○　伯耆　錦織千代子
美しく朝日に峯の雪はへて富士を見おろす鹽尻峠

○　増田やい子
筑波山み雪ふるらしましろにぞ朝日ににほふ冬のあけぼの

○　伯耆　錦織賜子
ふるさとの山なつかしく見え初めぬ雲井五十里ゆきほのしろう

○　相模　服部八重子
打出でゝ故郷の方を眺むれば戀しき山のはや雪ぞふる

○　東京　片山幸子
白雲の絶え間〳〵に遠山の松のみどりにかゝる白雪

○　岩代　岸野せい子
紅葉する梢にかゝるしら雲はをちの高根の雪にぞありける

○　伊豫　益田春子
しぐれけり木々の紅葉ぢりはてゝうす化粧せる遠山の雪

○　山口せん子
遠山のしろきを見れば忘りしぬのこの急にせがれぬるかな

○　美濃　傍島眞佐子
遠に見ゆる山の高根に雪つみて眺めよろしき朝ぼらけかな

○　東京　神田けい子
さえし夜は遠の山邊に知られけりはつゆき白う朝日にほひて

○　東京　倉重千惠子
白妙にゆき積りけりをちの山かれ木の枝も松の梢も

○　東京　芦原浦子
富士のねの雪の姿は知りながらまたもみそらさあやまたれぬる

○　上野　小野里鮎子
夜を寒みねての朝げにながむれば遠山の嶺にふれる白雪

○　相模　中島ろい子
ふる里の山の綠も今はみな富士の高根の色になりけり

○　岐阜　傍島敏子
板屋根に小石のせたる町はづれかなたに遠き雪の山みゆ

○　神戸　今西操子
見馴れつゝけさ珍らしくあふぐかな比良の遠れの雪のすがたを

○　東京　岡本やす子
ひえ鳥のこゑも身にしむ朝寒に遠山まゆはしらかされせり

○　下野　井上倫子
朝日かげ雪にまばゆき遠山のふもとの村に煙たつなり

○　兵庫　佐藤萩子
遠山にさざせる雲さ思ひしは夜半につもりし雪にぞ有りける

○　兵庫　木村　まさの子
遠くより見ろだに寒き深山雪住む里人は如何にあるらん

○　越後　水野　やすゑ子
黒髮の山に今朝見ろ白雪は一夜に老いし姿なるらん

○　秋田　長谷川　薫　子
よしの山今朝は花とも見つろ哉みれにかゝれろ雪のしらゆふ

○　神戸　足立　あさ子
久方の雲井に領てさゝくらむつもりに積ろ遠山の雪

○　神戸　神谷　ひろ子
はろかなろ吉野の山をながむれば雪の花こそさかり成けれ

○　伯耆　錦織　さみ子
ながめなれし御山ながらも目もはろにうから集ひぬ雪ふりのあさ

○　遠州　疋田　仲　子
見渡せば雲かあらぬと墨染の山の頂雪ぞかゝりぬ

○　名古屋　山根　しげ子
白雪のつもろおもひも淺間山けむりとなりてきゆろなりけり

○　神戸　脇村　いわ子
昨日まで錦よそひし遠山は早やそで寒く白雪のふろ

○　靜岡　渡邊　賀　子
見渡せば海原遠き岳の山に雲とまがひて雪の積れろ

○　東京　よ　れ　子
さびしくもひとり聳えし遠の峰に今朝めづらしくふれろ白雪

○　河内　竹内　たれ子
遠山にけさふり初し初雪をわが庭もせにうつしてしかな

○　美濃　傍島　小枝子
霧たちて見えぬ遠山高き峰雪にちかくも見ゆろ今朝かな

○　神戸　藤　幸　子
ちら〳〵と降りくろ雪は遠山の松の梢に積み初めにけり

○　美濃　松田　昌　子
遠山の雪みえそめて吾菴の垣の茶の木も咲きそめにけり

○　遠江　夏目　かく子
いつはあれと晴れたろ雪の遠山は松の葉越しに今朝ぞ見ろべし

○　陸前　菊地　とみゑ子
をちこちに紅葉のにしき殘れろにふりそむゆきやをちの山のれ

○　陸前　菊地　みさを子
さと〳〵はまたあきながらみ山ぢはたまさみゆきの今朝はみえけり

○　東京　青木　たま子
初みゆきはやもふれはやみわたしの遠の山々ましろなりけり

○　神戸　今西　白露子
あさふすま重ぬろほとに小夜更けて山のは遠くゆきぞつもれろ

○　美濃　松田　君　子
かた椿ほゝゑみそめろ花の末に寒くもみせたり遠山の雪

○　美濃　各務　照　子
今と見れば越の遠山雪ふりて常よりちかくなりにけろかな

○　北海道　清水　清　子
うつろはぬ黄菊をめでゝふとみやろとほ山つゝきはや化粧しぬ

○　東京　萬屋　ゆき子
眺むればわれ待ち顔に遠方の山美しく雪降りにけり

本欄冬の月

には規定に違ひ、一人一首以上の題をのせあれど、これは清書するものゝ間違なれば、例外として見玉はんことを乞ふ



日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

杜の家

府下龜戸五ノ橋十七、星野方 奈良八重子

お濱は夢から醒めた。病に疲れた身を半起して、四邊を見廻すと、枕もとに油煙で眞黑になつた豆ランプが、薄暗い光を放つて、傍に置いた目覺時計が、三時を指してゐる。夜が明けるには間があると思つて、仰向になつて目を閉ぢると、外は風が吹いてゐるとみえて、雨戸ががた〳〵鳴る、ポチポチと雨滴の音もする。そうして時々骨の髓まで慘み透るやうな、冷々した風が、襟首を撫でる。朦朧とした頭腦もだん〳〵明瞭になる、全身の神經も新らしく競ひ立つてくる。お濱は強ひて眠らうと思つて、夜具の襟と枕で兩耳をおさへたが、中々眠られない。雨戸にあたる風の音、枇杷の葉を傳ひ、軒端を叩く雨の音が、しつきりなしに聞えてくる。

ふと心淋しくなつて來た。ジイ〳〵油を吸ひ上げながら、今にも消えさうな灯影を見てゐると、悲しいやうな、はかないやうな思ひがする。目を閉ぢて凝然と戸外の風に耳を澄ますと、遠い遠い際涯もない處へ運ばれるやうな氣持がする。……そして、其の音にも、何處やら悲哀の響が聞える。

『こんな時に、母さんが生きてゐられたなら……』

と思ふと、身長のすらりとした、顏の輪廓の正しい、目の大きな母の顏が浮んで來る。つゞいて、森の中の一ツ家、助爺の白髮頭が浮ぶ。もう一度杜の中の人になりたいとお濱は思つた。

夏が過ぎ、蟬の聲が次第に薄らぎ、西方を繞ぐる巒峯に雲が細く、畑の方から豆殼を燃す匂がたゞようて來る頃になると、森は深碧の空の下に、一團の樺

色の宮となる。そして、十月の末頃から、夜となく晝となく、しつきりなしに栗の實や木の葉が落ちて、淋しい音が森を包む、夜になつて、風とともに落葉が、雨戸にさら〳〵と微かな音をたてる時の淋しさは、一通でない。秋雨が降る宵などは、早くから戸を閉ぢて、圍爐裡端に腰をかけて、母が話す桃太郎の話を、栗の實を燒きながら聞くが、常であつた。あゝあの時分は樂しかつた。死んだ母が戀しい。可憐さうだ。父に早く別れて淋しい寡婦暮をしてゐる中に、私が九ツの春、ふとしたことから、病の床について、さうとう九月の末に死んでしまつた、しかも貧乏の最中、不自由をして、あの暗い六疊の房室で、助爺夫婦の外に、傍に居て看護するものもなく、私の行末のみ案じながら、無言で死んでしまつた母が、可憐いさうだ。

お濱の腦裡には、東向の暗い房室、何にもない、濕ぽい、天井の低い、壁には古ぼけた新聞や繪をはりつけた室の中で、薄汚ならしい蒲團の上に臥つて、病に艶も失せた髪を亂して、目を閉ぢてゐる母の姿があり〳〵と浮んで來た、母は私を捨てゝ父の後を追ふたのだと思つた。そうして、ふと殘された現在の我、この世界に親もなく姉妹もなく、命とすがる人もない身の上を思うて、お濱は、嘗て覺えぬ孤獨の感にうたれて、しらず〳〵熱い涙が頬を傳つて流れた。

（雨評）詞づかひさいひ、筆の運びさいひ、よく整うて、すこしもうつり怡も動いて居る。何處に出しても、先づ恥かしくない文である。

地

秋の雨

下總佐原町篠原大崎範一方　大崎ひさめ

遠くからきこえて居た、正信偈が、はたさやむと、庭の植込みにふりそゝぐ雨の音さびしく、颯と吹く風は、白芙蓉をそよがせて、ほの白い、闇の夜は、いたくふけた。

電燈の光のぱつと明るい八疊の間、銀瓶に一さしきり響をたてゝ居た松風は靜になつて、桐胴の火桶の火も半ばは灰と消えて、萩の花さ、紅芙蓉をいけ

た、七寶の花瓶の近くに、夜着の袖ふかく夜氣をいとうてふせる京子。そのらうたかりしさふらん色の唇は、早くもあせて、紫の桔梗色とうつろひ、いたくも細りたる玉の腕、すつとだして、まぶしい光りの中に、何物かをさぐる様。

『母さん！　母さん！』

『あいよ、苦しいかい』子を思ふ闇に輝く涙は、はら〳〵と膝にこぼるゝをおさへて『お藥あげやうね。』

『いゝへ、もうとても……母さん隨分お世話になりましたネ』

『なんの世話なんて……』とむせびかへる。

夜風は颯と雨戸を襲ふなど、ばら〳〵とつぶてのやうな雨が四邊を騷がして、さはざはとしたあとはしづまりかへつて淋しい。

『母さん、私、お願があるんですけれど……』

『京ちやんにお願が……？』

『えゝ、高利貸だけはやめて頂きたいのですけれど……妾、不孝の罪は幾重にもおわびしますわ、ネ母さん、だつて鬼がきて、私をいぢめるんですもの、人でなし、人でなしつて……』と夢の跡を追うて恐しさう。

思はずほろりとした母親、あはれ、これが今年十三歳の子の口から出た言葉であらうかと考へて見ると、泣かずには、あゝこれが泣かずには……思ひあまつてなきつくしてぼつとした眼をあげて見ると、はたと落ちた花瓶の芙蓉花一輪、かすかにゆれて居る。

『京さん堪忍して……』暖い手をさしのべて、しかと青白い京子の腕を握つてしばしは無言。

雨はしとしとと、秋の夜はいたくふけてゆく……

（雨評）一寸身にしむ秋の雨の音である。

人

小春日和

越後國中頸城郡名香山村　大石孟子

野菊の花が眞白く雪のやう咲きつゞく野路の草に、露の情や鳴き殘る夜半の蟲の音を踏み、水無き

用水堀に添うて、土橋の上に來た。下を覗くと、此の間の雨で溜つた水は、玻璃のやうに澄んで淺く、岸の秋草は、儚ない影をあり／＼と浮べて居る。きら／＼と眩しいやうに輝く白い砂の上を、赤い小さい蟹が、あちこち匍ひ廻つてゐる。風もないのに、蘆がさや／＼と戰いで、雪のやうに花を散らす。と、可愛らしい一羽の蝶がひらひらと輕く舞ひ上る。すると、亦一羽の蝶が、かたまるやうに追ひすがる。

右も左もみな稻田で、よく熟つた重い穗が、兩方から垂れ合つて、徑を塞いでゐる。數知れぬ蜻蛉が入り亂れて、黄金波をうつ稻の面を掠めて、低く飛び廻る、柔かい風が、夢の樣にそよいで、稻の香が袖に泌みる。向ふの六地藏の辻に、こんもりとした一本の大きい櫻の樹がある。葉といふ葉は、すつかり黄色に染まつて、眩しいやうな、柔かい日影に洒されて、かさ／＼と重なつて落ちる。雀が二三羽この樹に集まつて、囀つて居る。ずつと向ふは、小高い丘になつて、薄樺色の疎らな雜木林の中に、藁屋根の農家が二三軒、白壁土藏が、木の間からちらりほくり、鬼燈提燈さながらに色づいた柿が、桑畑の中に眞紅に輝いてゐる。その上を何鳥か知らず、遠く／＼澄み切つた青空を、小さく成つて飛んで行く。あたりは薄紫にうら／＼と霞んで居るやう。

田圃を通り拔けて、小川の岸へ出た。水清く砂白く、小波の影亂れて、小さい魚が十尾ばかり、時々きらりと銀のやうな腹を見せる。鶺鴒が一羽、長い尾をふりながら、柳の蔭を石から石へと川上へ飛んでゆく、向岸に、二人の可愛らしい乙女が、賤の小唄をうたひながら、秋草を折つて居る。

（雨評）少しくありふれては居るが、叙事の筆は中し分が先づ無い。

秀逸

◎◎夢がらす　　下總　月沖ゆり子

坊は夜半にぱつちり眼が醒めた。行燈の光が末廣がりに、薄暗い天井に夢の如く、いろんな顔がみえる。けれど、それを阿母樣の顔にしやうと思ふと、縫な顔が出て來て、舌を出して嘲笑ふ。

急に怖しく淋しくなつて、一人で泣きだした。あゝ私の母樣は死んぢまつたんだと思ふと、わけもなく悲しくなつて、床を拔け出した。阿母樣〳〵と泣きながら、坊は襖をあけると、十疊の次の間へ夢中で通つて、障子をスラリ。長吉がしめ忘れたか、雨戸が一枚明いてゐた。月光が白う夜明で水を打つた樣に、外は靜だ。

『お母樣』小聲でかう呼んだ。軒の釣干菜淋しくささやくのが聞える。子供の耳にも秋だと思つた。庭下駄の大きなのを、小さい足につつかけて、敷石の上へ出た。あの優しい母樣は今はどうしてゐるだらう？ 坊やはかう思ひながら、いつか庭へでた。

* * * * *

それは、葡萄が花盛りの頃だつた。政ちやんと二人で井戸の中をのぞいて居て、母樣にしかられたのは。しかし叱つた後でも直にやさしくしてくださる。あゝ母樣！ とよび乍ら、いつのまにか枝折戸を出てしまつた。

兩側が銀の海の樣に見える松畷を行く。氣がつくと、下駄はぬいで、一箇は水田に浮んで、フワ〳〵と桃太郎のお話の桃が流れてゆくやうだ。一箇は目の前にころげて居る。

坊やは、夢のやうな白い影をふむで、ずん〳〵たどつてゆく。

いつのまにか香取の森へ入つてしまつた。淋しくなつたので泣き出した。けれども、誰もきてくれぬ。すると、眞暗な奥の方で、一羽の鳥がカアと鳴いたのが始まりで、二羽三羽と、しまいには幾十羽となく、はなれて間近の大銀杏の上に來て、群がつて騷しく飛び廻るのが、梢の上でゆるく大きな風車がまはるやう。

熟と見詰めてゐると、烏の羽色が黑から薄黑に、薄黑から鼠に、鼠から白に、段々變つて、遂には雪のやうな鳥になつた。不思議だ、と思つて、見てゐるうちに、坊やは更にかう思つた。此鳥はだゝの鳥でないんだ。乾度母樣の居る所から來たんだ。さうだ、今に飛びながら坊をお母樣の所へ連れて行つて呉れ

るんだらうと、そこで坊は鳥に聲をかけた。『鳥、からす、お母樣は何處に居るの？』けれども、鳥は何とも答へぬ。けれど、幾十羽のが、皆枝にとまつた。さうして、坊を熟と見た。月あかりにいとゞ白い鳥が、みんなして熟と、坊の方を見た。坊は心細くなつた。でも一度尋ねやうとする途端、カアと一聲一羽が啼くと、一度にたくさんの鳥が、颯と森の南へとんで、忽ち殘らず去つて了つた。眼に見えぬ怖しいものが身に迫るを感じた。ワッと聲をだして泣きだす瞬間、目が醒めた。——夢の鳥？お母樣？解らない。

（雨評）趣向は一寸面白いが、坊やの年齡が問題である。

◎◎お祖母さん　　埼玉　高橋とよ子

斯う申しましたら、皆樣はお笑ひでせうが、私はお祖母さん育ちでございます。五つの時に、孤獨の果かない身となりましたが、其のお祖母さんがあつたため、これ迄に手足を伸ばして下さつて、思へば實に有難い。この偏屈な放縱な私を、不憫に思召して、どんなに涙を分けてお世話なされたか。生育先無難にと、それは、神や佛にまで……！

今こそ歲も十八と取り、お祖母さんのお膝を離れて、此の遠き都の學校に修業してをりますが、まだ三年前迄は、其のお側に甘へてをつたのです。だが、小供乍らも、あゝ有難い。私のために、老の身も惜まず、骨も折られ、心配もなさるかと思ふと、うれしい懷かしいといふ心が募つて、疳癪もわがまゝも、影を藏めて、お祖母さんの前には、どんな苦痛も忍ばれ、勘忍もできて、夜の一時が二時までゝも、肩も敲けば背中も摩つて上げたのです。何時ぞや脚を按んで上げた時「お祖母さん、お脚が細くなりましたね。」と申したら「あゝそれでも、お前が太くおなりだから嬉しい。」と、おつしやられたこともある。兄弟一人身寄一軒あるではなし、いつもいふことでありますが、お祖母さんでも居りませぬなら、歸る古鄕ではありませぬが、慈悲深き其の一人に、夢にも忘られぬわが古鄕！

過日も歸省しましたが、いつもお祖母さんのお側では、スッカリ元の小兒に返つてしまつて……さ

て歸校と包を持てば、風邪なひきぞと情のお詞、ああ今も耳に？　お祖母さんと思ひ出せば、全身にうれしい血潮が沸きかへるのです。

今日しも日曜散歩してかへると、机の上に小包一箇。解く手遲しと開けば、さても、愛を重ねた綿入衣、はみ出た紅絹の袖裏が、其の眞情の色を見せて……實に親切と押し戴けば、これはまた、足袋や襦袢まで!!

寒さに向ふ今日此頃、私の身の上をお氣遣ひなされて、孫の苦勞に、幾條の其の有難い皺も增して老の手に、いく夜かけてか、情も厚く温みをこめた、縫ひ出でられた此の品々、私がどうして泣かずに居られませう。

（雨評）情も辭もよくきこえて、ひきしまつて整ひたる文なるが、何んとなう少しくもの足らぬ感がする。

○◎悔恨の夜　木曾　山下とう子

夜は更けた。

私は床を並べた、友の寢息を窺がふと、みなすやすやと心よい眠の中だ。

「なぜよく寢れるでせう」。

と思はず口に洩れるのです。

此頃私は怎しても眠れない、なんとなく生の不安と云ふ樣な感じがして、無暗に心が亂れるのです。

私はほんとうに不幸です。

皆さんの樣に最う處女ではない、ああ悲しい、私はだまされたのです。

憎い、憎い、憎いものは戀です。美しい少女の慰安は戀と唄つた詩人の僞りが、ほんとうに憎らしい。

詩人とは僞りを歌うものと、私は云ひたい。

胸に毒蛇をひそませて、少女の胸を傷けて歩く惡魔の男よ。

汝は、戀の美名に恐しい毒蛇を包んだ惡魔ではないか。

窓の隙から、更けゆく月影が、ちらりと洩れて、松枝子さんの美しい罪のない寢顔を照してゐる。虫が滋々と啼いて秋の夜は深々と更けてゆく。

思はず熱い泪が頬を傳ふて、冷たい枕に注ぐ間も、諦められぬ、憎い人を思出して、私は留度なく泣く

のです。
神經が頻りと高ぶつて、心も狂いさうなのを、じつと胸に手を措いて、慘ましい過去の追憶が辿るのです。樂しく華やいだ心にもなり、暗い淺猿しい心にもなり思返し思返し、泣くより外はないのです。
處女時代、此の華かな處女時代は、戀の美名に名を換へて永久に過ぎ去つたのです。
呪ふ中より忘られ難く初戀よ。
悲しい悔恨を胸にふせて、我が處女時代何處へ奪つて行つたのでせう。

（雨評）筆はよくひきしまつて、ささまつて居るが、何んとなくもの足りない。

◎不幸の友を慰めて

東京　中村千代子

幾子さん、貴女の樣にさう悲觀なさるものではありませぬ。人の浮沈ばかりは定めがたなく、まだ〳〵貴女より不幸な人は澤山ありますから、心を廣く氣を強く凡ての事に打勝つと云ふ雄大な精神を持つて下さい。私とて今日までどれほどの辛苦を忍んだかしれませぬ。充分あなたの御心も察して居ります。ですから、生意氣な樣ですが、こんな事を申し上げます。これも親友の情、眞心から申し上げるですから、惡しからず思召して下さい。
ほんとに世の中は、上見れば切りなく、下見れば限りなく、思ひ樣一つで、憂にも樂しみにもなりますから、どうぞ勉强して下さい。人は、苦しい內に學んでこそ、名も擧げ業も遂ぐると聞いて居ります。私もつとめの傍ら、勉强して居ります。苦しい功は今に見えませぬが、やがては成功する曉もあらうと、將來を樂しんで居ります。兎角人は美服のみ飾りたがりますが、それは第二の事。如何に外見を粧へばとて、充分心が出來て居らないではつまりませぬ。それよりは、綿布を纏うても、淸き心と正しき道とをふみ、何も時節とあきらめて、折れぬ心を以てはげんで下さい。いつもしをれて居らるゝ御姿を見て、しらず袂をうるほす事、幾度ですか。
どうか確かな心を持て、つとめて下さい。數ならぬ身がつまらぬ事を申し上ぐるも、眞の姉妹と思へば

こそ、飾らぬ言葉から、斯までながく〳〵申し上ぐるのです。さぞお氣にさはつた事もありましようが、何卒勘忍して下さい。

（雨評）まじめなやさしい情はこもつて居る。

◎故鄕の妹より　横須賀　渡邊ひさ子

昨日まで咲き揃ひし岡野邊の百草千草、桔梗まづ枯れ、女郎花逝いて、今はた何處に艶やかなる姿を尋ぬるならん、苔深き我庭も、枯葉の幾重を積んで、厩に添ひし彼の梧桐の聲も、はや秋を告げ初め候。汀にたてるよし葦の、秋闌けては果敢なくも、葉ずれの音の夜なく〳〵に、浮寢の鳥の驚きて、短き夢を恨むらん、唯苅萱のみざわく〳〵と、淋しげにも可笑しく立ち申候。

去年の秋を姉上樣と爭ひし裏の柿の木の、實りに枝の細きを氣遣ひしも、何時しか梢に高く澁柿一つ殘りて候。そが眞紅の色にゆく秋を共に笑ひ遊ぶの友もなくなりて、霜深う秋は老い行きて候。

夜更けて、灯一つを催合に、砧や、ひき臼に、やるせなき身を、弟と共に、去し年の事など繰り返し申候。かさこそと落葉を滑べる栗の音も、何となく身に泌み入りて、かゝる夜なぞかちく〳〵山の昔噺など思ひ出されて、淋しう語り申候。

籬の芙蓉やうく〳〵咲き初めて、夕の雨に朝の霜に、いと可愛げなる樣のいじらしう、昨日破れ傘さしかざしたる樽拾ひに、一枝二枝手折られ候。これも我村の秋の姿と、嬉しくほゝ笑まれ申候。

白萩の優しき狂ひ咲きの御姿は、哀れ一夜榮華の夢と亡せ候も、今朝の大霜に、御祖父樣が培ひの翁菊、やうく〳〵に咲き初め、白く、紅く、黄色く、色々に眺められ候。丁度この天長節頃には、秋寂しき我庭も、定めて美はしき花垣とあひなり申すべく今より樂しく相またれ候。

此秋を先づ黄金色よき銀杏葉は、詩集の中に狹まれ、楓の丹か美はしきは、障子の引手に貼られ候。中にも、とりわけて美はしきを殘し、我つたなき文に封じ、故鄕の秋偲びたまはん料にもと、御目にかけ候かしこ。

（雨評）優美なる趣きのあるところが、見どころである。

◎別れ

越後　松永松葉子

昔から多くの人を泣かしめた、淋しいといはせた秋の日は、今は入り行くのである。紫苑の笑つて居る庭に、最後の光りを投げて。

「御達者で御出で、」「はい有難う、」

いし子は都の空から脱れ來て、勞れた頭腦を、一ケ月間古里に起臥して癒したので、獨立するといふので、別れにやつて來た。暖い父母の膝下を去つて、冷い冷い東都の學窓の下へ螢雪の功を積むべくのである。さすがに名殘をしいであらう、後髮引かるる思ひがするであらう。何をいつても別れねばならぬ。

いし子……田舍そだちには珍らしい子。言葉少くおもしろく笑ふ子である。併し、品もある、小學校時代は常に首席を占めて居つた。卒業後新潟の助産婦學校へ入學。こゝも亦成績優等で、且つ、同窓にはいたく尊敬せられた。

一昨年春、神明宮の櫻が匂ふ頃、東都へ入つた。華やかな現象は反つてうるさく、學校の門から出なかつたと、文通はたえせずあつた。私のやる手紙が如何程嬉しかつたか。所が五月雨のそほふる頃、はたと音信がたえた。

測りがたなきは女の心、なびきやすきやすきは女の常としいへど、悋りにつれなしよと、罪とは思ひながら、實は怨んだ。

紫苑の咲いた秋九月拾八日、突然いし子は歸鄕した。華美な帝都に一ケ年半も入りびたりになつて來たから、幾分かハイカラになり得たと思ひの外、目たつて變化した樣子もない。嬉しい程昔のやさしい姿のみならず、心情が去らない。話振りはなか／＼上達して居る。目的を達する迄は決して再び歸りませぬと誓つたのに、何の用の出來たか、亦病氣でもなささう……強て聞くだけの必要もなくて經過した。五日目の黄昏、紙新聞紙を見ると、醫術開業試驗に合格して居る。前期に及第したいし子の名は揭げられてある。この時、彼の歸省した理由も氷解した。

試驗を受けましたけれ共、若し不合格になると御はづかしいから、御話しせぬで置きました。若し亦合

格になりましたら、充分あなたからほめて頂かうとおもひまして。……此の度合格いたしのは、全く幸運なので、神さまのみ力ですわ、……こはいし子の赤い唇からもれたやさしの言葉であつた。

受驗は容易なものではない。……五月上旬から準備にかゝりました。八月拾五日からは徹夜の勉强、眠らうと思いませぬでも、つひ〳〵疲勞して眠るのです。誰樣も半ヶ月位寢ずに勉强したからとて、何の苦しみがあらうと申されますもの、私だつて夜の時間がをしくて、とてもねられないのです。

二日にわたりての試驗、氣が氣でありませなかつたよ。妾、合格したといふ通知の參つた時は、ほんに嬉しうございました。實に嬉しかつたであらう。箸を投げるやうに置いて、手にするは書籍、秋の紅葉も、すめる月も鳴く虫の音も花も、美くしいとて、如何にして耳に入らう、目につく筈はない。五月以來笑つた事はありませんといつたが、眞理であらう。つかれた朝は全身だるく、一寸でも當られると、すぐ倒れさうだつた。併し、今になつてしまへば、實に愉快ですと、ほこりの色がない。どこまでも謙遜の態度である。

小學校時代は亂暴許りして、でも其の時は矢張それでわるいとは思はぬの！　卒業して見ますと、自分等のわるかつた事かしみ〳〵胸に答へます。何んで、あんなに亂暴で、先生の訓へをきかなかつたでせう。先生を困まらせるなどわるい事ね、……今でも熱心に講義して下さる先生の御恩をも思はず、自分の學力の淺いのを忘れて、先生の講義はわからない、だめたといひ合つて、遂にやめるやうに御願ひをしたんです。女つてかげでかれこれいひますか、男子の方はそれは甚しいです、御話しになりませぬ。それから考へると、小學校の先生は一番尊敬せられてゐます。小學校の敎育つて、尤も有効ですわ。

いし子は予の敎へた少女であつた。今年拾九歲、それで前期の試驗に合格した。後期は難しいから、前期を早くとつて、後期の準備をするのですとは、いし子の計畫。女のかよわき身を持ちながら、强めて自己の希望を遂すると、美くしい瞳はあやしく光つ

て居る。昨年日光旅行から歸つて勉强したといふ。今年この古里からかへつて勉强します。徐に、三年の後を期して合格すると……、今年本月今日限り別れねばならぬ。嗚呼やさしいいし子には、三年會ふことが出來ぬ。淋しい折りには手箱のうつしゑをと思つたけれ共。別れはなんとなくつらいものである。いし子は再び錦をかざつて、この古里へ歸るべき時はいつであらう「御達者で御出でなさい」「はい有りがたう御ざいます。」後期に合格しても、なほ自分を尊敬してくれるであらうか。服や靴や容貌や……はた學識は顧みはせまい。小學校の教員は一番尊敬せられますといつたやさしの心が消え失せで居やうか。いし子は明日は都の人、華やかな生活にうつる。自分は矢張草ぶかい田舍の小學校に兒童相手に鞭とる人の子、世の運命はこんなものかと、紫苑の花かげにかくれ行くやさいいし子の後姿をみおくつて……秋風落寞の夕べつくづく、はかなく思はれた。

（雨評）冒頭と結末の數節は、面白いが、中段の筆が面白くない、筆をもつとひきしめて言ふ必要がある。

◎親しき友へ（山かげのいほより）

東京　平塚つゆ子

山の秋は、今たけなはに御座候。九が谷をあやどる紅葉の、夕日にはえては、また一しほにて、さと薄ぎれのおそひ候折などは、げに〳〵渡らまほしう、いづこに行べき道にやなど、うつゝともなく立ちつくすことも候。

浮世遠くはなれしいほは、おち栗の音に眼をさまし、呼ぶ子鳥のころに戶をとざし、落葉は早やく料となりて、思ふ事もなく日をすぐし居り候。君よ、此のごろ御歌袋も重らせ候はん、人氣うさき宿にてひらかせたまひては、いかゞに候や。よも俗氣なき山かげなれば、否とはおほせられまじ。

今し日はきしりて、なゝめに枝もあらはの栫の梢に、先をなげて、百鳥の音のしづけさをやぶりて候。

（雨評）今一層苦心せば、はじめて雅致ある誘引文の目的を達せむ。

◎紅葉見にとてそゝのかされし返し

河内 竹内敬子

にび色の雲のひくさよ、今宵の程にもふりいでなむを、いかにながめさせ給ふらむと、ゆかしう思ひまゐらせ候折りから、御なつかしき御玉章給り、いとゞ嬉しう卷き返し拜し上候。紅葉見にとて、御室の御なりどころへ物させ給ふとて、こなたをもそゝのかし給ふ、みやび心の御すさみは、いとゞおもしろう見まゐらせ候。定めし立田姫の織りなし給ふごとき錦、いかにうつくしからむと、思ふにも、御供は願ひてもせまほしく、雨は物かは、なかなかに興多き事と存じ候へば、よろづをさしおきても、仰せの時刻に、御宿をおどろかしまゐらすべく、一言御かへりごときこえまゐらせ候。つねよりも一入なるみだれがきも、よろこびのあまりの筆の狂ひと、なかなかにみゆるしたまひてよ。

（雨評）此の種の文さして、難なしとのみ申すべし。

ゝゝゝ○夢の名殘　下野　井上倘子

何處ともなく、我名を呼ぶ優しき聲するに、ふり返れば、小暗き河べに、紅もゆる紅葉の中に、笑みたゝへたる母の姿、懷しさに、かけよりて抱きつかんとすれば、あなやあなや影もあらず。言ばもあらず、倘もみつむれば、見るみる蔭にみし惡鬼の、紅の息吐きて迫りくるに、逃れんとあせれば、足は土に付てうごかず、力の限りふみ出せば、亂るゝ衣の裾ふみて、水音高く、河の中に我は落ちぬ。助けを求めし我さわが聲に目さむれば、醒めてうれしき夢なりき……靜に上ぐる頭はおもく、枕紙はしめり、曉の風みにしみつゝ、外にはをぐらき軒頭を吹く風の、木の葉を誘うて板戸を打つ音かすかなり。再び寢に就きぬ……

朝日はうらゝに小菊咲く、背戸の小川に顏洗はんと立てば、よべの夢の鬼が吐きし息さながらに、もみぢの落葉、一しほ鮮にはえて、ゆめの名殘かと思はるゝ、ふと胸に浮びしうた口づさみつゝ、數々を拾ひ上げて、淸き流にうかべつ。流れゆくを、瞳こらしてみ送りぬ。水よ、紅葉を天の河原におくりてよ。

ゝゝゝ○畑がへり　遠江　鈴木いわ子

幾百とも數知れぬ鴉の群は、西の森に飛んで行つた後は、村役の稻叢の中に鳴くのが、微に聞ゆる。龍洞院の暮鐘は餘韻長く、森をくゞり川を越えて、靜に鼓膜を、振動させた。やがて、妾は、兄が曳いて行く馬の後に、ついて、家路を辿つた。桑園に、かゝると、風が、ざわざわと桑の葉を吹いて、倘姿が後毛や馬の尾を、弄して、遠く去つた後は音なく、一つ二つ見え初めた、星は、大空に、可笑しいげに、瞬いて居る。

家には、早一町餘の中に、ボーッと見えて、父が打つのか、藁砧の

音が具合よく、自分の足に合つて行くのも、面白い。
月は鋒杉を離れて、羞い程、顔を照らす。

＼＼＼○『水郷の初冬』

岩代　樹口ゆき子

寂寥。哀愁。私は、しみ〴〵こんな感じを胸に抱へて、初冬の水郷を眺めた。そして、薄命の女が幾人ともなく、限りない遠い旅路に手を引き合つて急ぐやうな、寂しい自然であると思うた。
「もう秋は逝つて終つたのだ」と思つて、的ともなく大空を見上げると、フワ〱とした白雲や、噴火の煙の樣な雲やが、漂うて居る。その中には、自分の死んだお婆さんに似た樣な、何となく親しい氣のするのもある。雲は無心であるが、下界には、生死ある人といふ、小さい影が動いて居る。しかし、水郷の初冬に限つては、清い美しい印象を與へてくれる。目白、四十雀が並木の霧の中から啼き出す。舟がゆる〱枯芒を分けて霧の中に入る。こんな靜寂な水郷に住む自分程幸福な者はあるまいと思ふ時がある。
農家の廂には黍の穂が束にして吊されて、椽の板には赤い木の葉が散ばつてる。猫が圓くなつて日向ボッコをやる。朝ならば松葉焚く圍爐裏を圍んで、祖父樣が熊狩りの自慢話をなさる。妹は布團にくゝつて唱歌を歌ふ。小春日和の晝などは、生れながらの柔順の心に還つて、妹が小守唄に心地よく眠むる時がある。私の魂は、廣い〱野や山を跳走つて、洋々として限りもない西山の陰の黄金の奥に入る。そこは平和と理想の宿る天國で、自分は そのあこがれの巡禮者となつて、たゞよつて居るのだと思はれる。
川岸に立つて、初冬の晩景を眺めるのも、面白い。夕霧の淡く罩めた田圃中に、形ばかりの水車小屋にギーギー米つく音がする。夕映が雲を破つて、パッと蕭條たる廣野を照す。蜻蛉釣の子等、落穂拾ひの娘、野川に添うて歸るのか、如何にも平和に見える。苅上げた田の面、紅を散らした落葉林、シンミリと眼に入る。枯れそうな野川の水は、殘紅を受けて光つた。それが、人の臨終でもあるやうに、寂しい強い感じを與へる。川岸の枯蘆がザワ〱とそよぐと、後の櫟林から、ケダヽマシク鵙が啼き出した。小さな雜魚が、仲よく列つて落ちてゆく、紅蜻蛉は、羽根を傷めて、その儘果敢ない生命を終つてる、夕ぐれの野川は寂しいが、家居近くなれば、少しは賑はしい所もある。大根洗の人々が、眞赤な手をして水に大根を洗つてゐる。母さんだらしい人が、道に立つて、カチ〱火を切つて、煙草を吸つた。吹き出した煙が、輪になつて、スーッと上る。兄と嫁が車につけて大根を運ぶ。單調な水の流れは、やはり全じ譜をくり返して、水郷を流れて居るのである。

＼＼＼○逝く秋

飛驒　南みね子

去年の今月今夜、如何に妾は泪に袖を絞つたのであらうか。否とよ妾が一家は、父も、母も只手巾を嚙み占めたまゝ、言の葉もなく、言ふにまさる悲しみをなめた、別れの夕である。
月清く、鳴く虫の音細う、逝く秋の此の世を呪ふかのやう、風なきに散る木の葉二ひら三ひら、奇しき響を傳へ、心に不安の反響を、刻一刻と深く、印象せしむるのである、實に奇しき哉、去年の今月

今夜も、丁度このやうな寂しき夕であつた。妾の杖ともたのむ一人の弟は、寂しき逝く秋を友として、永劫歸らぬ永き旅路に？

一周忌の供養も果てし夕、心の底から寂しさが迫つてきて、妾は思はずも泪くまれた。何となく薄絹を張つたやうな中に、おりくと見ゆる弟の姿？

「お姉さん、僕あーもう駄目だ、佛壇に燈明あげてお呉よ。」と云うて、妾に傷心の泪を絞らせた、その夕べより、病勢とみに加はり、醫師がこの注射で効なければいけませぬとの、注射も効なく、風なきに散る木の葉と共に、「目が……目が……み……」とお母さまの膝の上に、眠むるやうに靜かに逝つた。お父さまも、お母さまも、一人の男の子をうしなつて、とめどなく泪に沈みて、伏しておしまゐなさる。二人の醫師も顔に手巾を。あゝ、この悽慘な光景、如何して永劫忘るゝことが出來るでせう。

今宵また寂しく、悲しく、その夜のこと偲ばるゝぞ堪へがたく、さても、やるせなき胸の內哉。

友にはなれし雁の鳴く音、月の呑みし雲の色、星の光、かすかに響く遠寺の鐘聲、さながら冥府の戸を開きて、妾を導き行くらん心地。あゝ、弟の永劫住みます國ならば、よし地の下、天の上、水の中、火の中とて、いとはんや。あゝ、鐘の音再び響き來て、天國とやらに、弟と相逢ふ幸を得ば、弟やいかならん、妾や如何ならん、只々走りよりて、抱き合ひて、昔の葉もなく、泪の外なからむや。

亦も斷傷の雁の一聲、寂しき夜哉

ふと見れば、庭面に盛りと咲き匂ふ、白菊の香に醉ひて立てる、薩摩絣の姿、手にせる菊の一枝、あゝ懐かしや、

「文雄さま」

と走りよれば、怪しや、怪しや、答へはなくて、弟は居まさず、そはまぼろし、只月のみ清く、虫の音哀れをそへて、白菊いよくましろなり。

あゝ、妾は、吾身あるかなきかを分ちかれて、冷たきおばしまに、耳そばだつれば、そよかに吹く風に散る落葉のひゞき、哀れを傳へて、夜は更け渡りぬ。月いよく冴えて、磨鎌のやう、さながらに妾の胸を刺すが如し。おゝ、さても、冷めたき風の吹くこと。よゝとさめぐ泣きぬ。

○ゝゝお墓まゐり　福井　藤木杉雄子

今日は忘れ形見の十月九日、妾が母君は情なき嵐にさそはれて、遂に不歸の客となられた日である、妹が姉さん御墓參りに行きましようよと云ふ。

見れば、早や、昨日咲きそめたばかりの白菊を、此は御母さんにあげるのよ、と惜氣なく手折つて居る。時色のリボンは、そよ吹く秋風にヒラくひるがへつて居る。妾も線香の一と束を手にして、共に墓場へ足をはこんだ。竝ぶ小松のあちこちに、數多竝んで居る中で、あわれまだ新らしき碑。!!!

姉さん、御母さんはなぜ早く死んだのでしやう、英ちやん(友の名)なんかは、御母さんがあつて、嬉しいわれ、聲もとぎくに、目には早や恨みの露を宿すのであつた。

妾は思はず、胸がつまつて、石碑に倚つて、何とも答へる事が出來な

かつた。さらさら吹き來る風に、枯葉はちつて、二葉三葉石碑にふりかゝつた、妹は手にせる花と線香とを手むけて、楓の樣な手を合せて、小さき頭をかしげて、墓前にぬかづいた。冷たい石碑は寂として答へないのである。又もや、おち來る枯葉がちら〳〵と。

ゝゝ〇はらから

群馬　古田とも子

今しも鳴つたのは、午後五時である。もう來さうなものだと、交はるがはる門先をのみながめて居たが、それとおぼしい母の姿も、目には映じないのである。嗚呼ど―したらう、不安の念は時計のきざむ音とともに、益々增して來るのである。幼き弟の夕餉せがむも、いよ〳〵物思はるゝたれ、「かあちやん〳〵」とさけぶ弟だましつすかしつするとたん、物をもいはず門押しあけて、低からぬ荷物背負つて、入るや、直ちに苦しげに胸のあたりさすりつる母親。皆驚きて顏さしのぞき見るに、怪見のおもゝち。如何にやしけんと同胞打ち集ひて、看護に餘念なかりしに、漸くにして面あげて、胸元かきなでつゝ、「苦しい〳〵」とうめきぬ。かたへの頑是なき弟までも、等しく胸とゞろかせ、涕漲らして、「かあちやん〳〵」とわつとばかりに泣きさけぶ、其のいぢらしさ。「かあちやん困つたなー〳〵」といふも、いよ〳〵我れしらず淚の種子である。妹に命じて臥床のべしめ、漸く落付きし母なば誘ひて臥せしめ、かれやこれと手當し居たる程に、少しく我に返つた母親、「嗚呼何と乳腫物の恐ろしきよ」と。あゝ思へば、貧てふおろしき魔神のために、病める母をもかゝる浮き業なさしむるかと思へば、思へば、いさゝ悲しさいやましてきて、同胞打ちかたらつて、涕に袖をしぼつて、來し方行く末このさゝも打ち案じて、其夜のふくろも知らなかつた。

閨秀名歌十二ケ月

別項豫告の如く、來年一月號より揭載する、閨秀名歌十二ケ月は、その名歌に作者の眞筆と、その下畫と云ふべきものも、諸大家の揮毫に成れるものにて名歌名畫の合作と見るも差支なきものなり、さてその歌の作者と畫の筆者は誰なる乎、

佐々木信綱先生選和歌兼題

◎一月　茅屋の梅◎二月　殘雪◎三月　桃花◎四月　花下蝶◎五月　殘鶯◎七月　雨後蟬◎八月　午睡◎九月　女郎花◎十月　秋田家◎十一月　暮秋虫◎十二月　夜雪。

入江爲守先生選和歌兼題

◎一月　元旦◎二月　若草◎三月　春曙◎四月　行路花◎五月　雨中新樹◎六月　疎尾の夕顏◎七月　百合◎八月　松下泉◎九月　秋色浮水◎十月　月前菊◎十一月　水上落葉◎十二月　船中千鳥。

新體詩

日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

散り行く春

下野今市町四百九十二 井上倘子

云はでなやめる柔胸に、
燃ゆる焔をもみぢ葉の、
色に優るとまきこめて、
歌かきつけて送りたる、
去年は夢なり。この秋は、
髪のみだれもそのまゝに、
面のやつれも粧ひず、
我身ながらに狂ほしう、
悲しき袖に風さむく、
さびしの秋になき泣きて、
日記をうめしわが歌の、
人に誇らんすべもなし。
名もなき里の逝く秋を、
涙に送るおもかげを、
せめては夢に入れよかし。
やすき夢路をたどります、
閨のきばを我魂の、
迷ふを、君よ知りますか。

思ひでつらき夕ぐれは、
淋しさせまる山が家の、
板戸にひくゝ音たてゝ、
時雨に交る紅葉ばの、
秋にわかれて散りて行く、
散りゆく音の一つく、
わが身も君よ消えてゆく、

（雨評）句も先づ整ひ情も強く響きたり、

地

花賣人

美濃關町新道 松田昌子

森の宮にぞ聞ゆるは、
吾がともとちの手より歌、
母の寢入るを幸ひに、
門べ出て見るそのときに、
咳き込む母の聲ぞする。
アナヤと走り行き見れば、
早すや／＼と其の寐がほ。
見るに、ホロリと一雫。
折柄、兄は歸りけり。
母はいかにと問ひつゝも、
荷より取り出す藥瓶。
渡す手さきのうちふるへ、
白き顔色啻ならぬ。
かせ召してかと覗へば、
いなとさびしく笑み給ふ。

（雨評）句は幼稚なれど、可憐なる情思ひやらるゝものあり。

人

野菊

美作國津山町大字田町 鈴木鎮子

夏草しげき井のほとり、置く白露に秋たちて、
色も姿もなよやかに、野菊ひともと笑みにけり。
ほこらぬ色にいひ知らぬ、けだかき影はゆらめきて、
風にもたへぬものごしに、手折りもならぬ威あり。
靜けき中におのづから、清けき神のみこゝろを、
此の世の人に語るとて、汝れは生まれし花さへ。

（雨評）想は未だもの足らされど、句はすなほにまさまりてよし。

秀逸

◎旅にして　遠江　鈴木いわ子

峠茶屋

喘ぎ／＼登りつめにし峠茶屋、男茅結びて露を止め、
蓆繼なぎて風防ぐ。見るにあやしの樣なれど、
遠三、二州の堺にて、昔關屋の跡とかや。
駄菓子列べし古戸板、德利に挿しし花紅葉、
詩腸愛でたき媼なれど、客呼ぶ聲のさて哀れなり。

渡場

水撫づる岸の柳は散り果て、瘠せし姿の影淋し。
こゝは人里程遠き　渡場なれど、愛深き
自然の神は、四季を訪ひ、鳥も來啼けば花もさく。
主は若き野孃の、姉樣冠りいじらしや、
病の母を養ふと、心も直き水馴竿に、
唄ふ小歌を聞きやれば、
「火でも水でも厭ひはせぬよ、
親の爲めとしあるならば」。

（雨評）今一層熱情をこめ、想を練熟せしむれば、はじめて美なる歌さならむ。

◎秋興　大阪　木村春江子

白菊

あかつきおきのさまよひに、心ひかれの清き香や、
主は誰ぞともしらぎくの、つまごによりし眉細き、
少女に乞ひし一枝は、今文机をかざりけり。

栗燒

ちゝよさなくはみの蟲か。秋は夕のわかひざに、
母を慕ひて泣く妹、なだめすかすと爐のほとり、
くぶれば高き栗の香に、うれしやはゝの笑がほ。

澁柿

梢は高し、六尺の竹にかへたる石つぶて、

見事落し〻寳一ツを、　ひしめき合ひて、じゃん拳に、
勝ちし太郎の一口に、　味をしられて、澁柿は、
しづけき園を飾り行く。

（雨評）詞も既に得たるものあり、想も工夫せられたるものあれど、今一層の推敲を要すべし。

◎江のほとり　下總佐原磯屋方　月沖ゆり子

ゆふべ、江のほとり、　微草、風に悲しむよ。
秋の色に、水いにては、　ほろりほろり花も落つる。
日入りて、獨り行くに、　昨日の路のありやなしや。
烟はうすき暮の帳、　蒼に動いて、野には下る。
嘆ずる人に、離人の迹なく、　舊愁胸をやぶりつく。
わが涙、水に落ちずや、　吟ずるに、唇澁ぶる。
おもへば、昨日は遠し、　悲歌変りを結んで、
妾を憐むに君のありし。
一朝都門に塵ふむと、　君去りて、此に繼とせし。
われ郷びと容れられず、　小兒の辱のいく度か、
かくて空しく老いぬらむ。　いま江のほとり、君をおもふ處、
鳥一つ飛んで、心をひくや。　鐘の聲、遠くより、
人に人に寒くせまる。　あゝ堪へじな、江のほとり、
われと自ら立ちて泣きぬ。

（雨評）一種の言ひまはし、工夫せられたるものならむが未だ練熟を缺くものあり。

◎秋の思ひ　東京　紀藤榮子

世に戰ひの子となりて、　早五年もなりにけり。
浪花の葦や越の雪、　花の都の漂浪に、
波風荒き幾年を、　旅より旅の渡鳥、
彼處の春や此處の秋、　果敢なき夢となりに鳧。
希望の光今は早、　怪しき雲に閉されて、
道に迷ひし旅人の、　心痛むる秋の空、
仰げば落つる秋雨の、　木葉まじりにはらはらと、
やつれし頰を冷やかに、　涙ぐまるゝ吾が身哉。

（雨評）句はよく整ひたれど、少しく平凡の嫌ひあり。

◎『病みて』　岩代　樹口雪子

暮れゆく秋の離り野の　田中の庵は、流れくる
闇の流れにうづもれて、　灰色ながら默しけり。
灯ともす人もあらなくに、　沈默の底に我はたゞ、
ひとり沈みて惱むなる、　秋哀愁の胸だきて。
犬の象ある破壁に、　香りこぼるゝ黴の花、

仄にほのかにすきて見る　青き『悲』我見たり。
落葉たゝいて巡り來る　暗の音—胸に響く時、
我身さながら、この音の　黏くるあなたに落ち入らむ。
心苦しさえ病の、　惱みに細る吐息にも、
ひとつ〳〵の陰となる　生命の行方の束の間や。
むくろの臭染々と、　濕れる室に消え行きて、
果てある生に黏くるなき　生命の波の音ぞ高き。
刹那々々に痩せ細る　生命の匂ひ、一筋の
闇のあなたに落ち入らば、　あゝ束の間のひらめきに、
永き疲れは燭火の　消ゆるか如う消え失せん。
靜にしづかに青白き　月の光は、うつろなる
野中の庵の夕闇に、　病める我が身を葬りぬ。

（雨評）此の歌の疵は氣取りすぎて、却て情を失ふところにあり。

◎異國の父を偲びて　仙臺　針生とみ子

春されば、野邊の草若綠そひ、朧月夜に風薫る。
夏されば、廣瀨河畔の夕涼、小暗き水に螢飛ぶ。
秋されば、園の芝生に露置きて、明るき月の影宿す。
冬されば、松の綠の色はらで、眞白き雪の姿妙。
よし、父君のます國も、　かゝる景色のありとても、
いかで御國に及ぶべき。　花の朝に月の夕、
眺むる毎に思ふ哉、　異國にます父君を。

（雨評）一寸まとまりたるやうにて、まとまり足らず。

◎松浦潟　東京　三輪千代子

月にむら雲花に風、　消ゆる命は朝露と、
さとれば何の松浦の　城をしからず、重氏は。
つきにかざして髮を剃り、　もとへかへらぬ墨染の
法のころもを身に纏ひ、　諸國修業に出で給ふ。
御台千里は、むすぼるゝ　思ひをたれにいはた帶、
ときて玉なすみどり子を、　石童丸と名づけつゝ。
心筑紫の松浦潟、　夫の行方も白波や、
强風すさぶ只中に、　あはれ楫なき捨小舟。
領地は上に返しつゝ、　軒端いぶせき佗住居、
昨日のふちは今日の瀬と、　かはる浮世ぞ是非もなき。
障子の紙のそれよりも　薄きは、人の情かな。
嗚呼、輝る月よ、咲く花よ、　思ひ出多き春の夢。
夏の雨夜や、秋の露、　雪の旦のおとづれも、
なくしの礫のなか〳〵に、　かわくひまなき袖袂。

細き灯は風に消え、
心は虫の音に澄みて、
思ひあまりて、八寸のり、
汚れも付かぬみどり子を、
もゆる唇、匂ふ頬、
美くし玉の手をあげて、
春と秋とは、いたづらに
流れ／＼て、石童の
あたりの稚子は、ちゝのみの
喃、母上よ、我父は
うるほふ眼もてうちとへば、
森の下露もるばかり
石童十三月見月、
父は高野と聞き知りて、
馴れぬ草鞋や菅の笠、
たのみすくなの旅の空、
露の命に草のやど、
過ぎし今宵を月に泣く、
拔けば玉ちる秋の水、
紅葉に染めん、夜の風。
笑ふ眼は星の影、
すがるに及はあてかねぬ。
門の小川の行水や。
年は、双手を數へけり。
父と鎮守に遊ぶ時、
如何に何處におはすぞや。
母はなげきにかきくれて、
袖にしぐるゝ涙かな。
尾花が風のほのかにも、
雲間に月を見し心地。
互に杖とたのみあひ、
たどる母子の影さびし。

（雨評） 一節／＼はまとまりたれど、全体のまとまりわるし。

〇夕日

美濃 松田文子

落日沈む秋山に、
緋の色そめし雲の片、
納屋の所の高き巣に、
あひるの群のわめきつゝ、
薄霧かゝる森いでゝ、
渡る野川に、日はくれて、
夕げのしたく音漏るる、
けふのみのりを腕にして、
稲田のくろのむらすゝき、
小走りいそぐ旅人の、
白露布ける畔の道、
唄聲のみ高うして、
すゝけて黒き竹の椽、
嬉氣高き笑ひ聲、
三日月高き西の空、
鎮守の森の影淡く、
小山に滿る夜の色に、
七草小さき目をとぢて、
あゝ極めなき感想談、
空は靜かに星清く、
炭焼く煙長うして、
夕べの空に影うごく。
羽叩きさまよる鶏や、
人に逐はれて、門に入る。
柴負ひかへる里人が、
明星一つ浮び出ぬ。
藁屋がせどに、里少女、
ながむる空に、電光や
西吹く風に伏し仰ぎ、
面はもわかず淡くして。
疲れてかへる農人の、
姿もみえずなりにけり。
小さき燈に團欒して、
酌むは醸しし濁り酒。
動かぬ雲の一片に、
野寺の鐘も冴るなり。
牧笛たえし川堤。
そゞろ流れにうなだるる。
神秘に似たるこの景色、
里は幽かに夢淡し。

〇新体

東京 平塚白百合

冬の男神がしろ銀の、
征矢負ひまして下つ界に、

あもりしませば時のまに、
落魄たりな冬のさま。
秋のつかさの龍田ひめ、
夜な〳〵さゝぐる献姫の、
霜に色あせ音もたえて、
あゝ平和のあきひめの、
おそろし冤神のたなぞこに、
虫の音は絶え落葉して、
そめし錦のさばりさへ、
虫の讃歌も、今ははや、
木枯しのみぞ威をふるふ。
み車ゆきし世はなべて、
なぶられもせんさびしらの冬。

〇暮れゆく秋　埼玉　高橋ふき子

露の命の朝顔は、
小さき花の只一つ。
かはりにけれど、しかすかに、
いく秋かけて亡びざる、
ふさ豁くや己が身に、
暮れゆく秋に寳一つを、
枯れゆく蔓のその末に、
見るもあはれの身の果てさ、
其葉がくれに　寳玉の、
永久の命を籠めにける。
經りにし月日空しくて、
殘さゝりける怠慢を。

〇秋の暮　東京　星野千代子

秋霧深く立ちこむる
瀬にむせかへる水の音の、
み空は高く、氣のすめる
つられ行くなる雁がねを。
野山は錦、里のべは、
小田に畑に諸人の
千草もゝくさ色あせて、
山田の小路分け行けば、
小川のほさり佇めば、
そこひ靜けく流るめり。
小春日和ののどけさに、
おゆびに折れる千等もあり。
秋の田の寳ぞゆたかなる。
働く樣のいそがしさ。
野菊一本榮えある、
あはれや巣立つ雉子の聲。

〇行く秋　横須賀　渡邊比佐子

紅葉は霜に色そみて、
うれしき夢の秋冷えて、
眞紅に高く唯一つ、
散るや一葉のなきがらに、
青きが頃を數へたる、
癒えでふり行く秋の色、
笑ひ淋しきかんばせを、
菊の香高き露のあさ、
裏の籬の柿の木に、
梢に殘る澁柿の、
自然の秋は見ゆれども、
弟が病徒に、
眺めて恨む床の上、
冤神指す西の空。

〇月の露　越後　大石盈

音なく秋の夜はふけて、
惜しや硯の池は乾れぬ。
厨にえむもよかれども、
あたり安けきみ夢をば、
破れたる戸をほそ〴〵さ、
池を汲まんさしぬれども、
汲ましかままよ汲まんかさ、
ふれたる萩のゆう〳〵さ、
これなんよきさ三滴五滴、
あら金色の色榮ゆる、
惜しからぬにはあられども、
またもつゝくる月の詩や、
詩想はいよゝ高かるを、
狀の響にたらちねの、
破りなんには罪ありさ、
開けて靜に庭の面に。
日碎かんも口惜しう、
たゆたひたりし雨袖に、
月の露ちる足もさや、
硯にうけて見守れば、
玉うるはしの其が姿、
月影洩る窓に碎きつゝ、
その光こそ添はれども。

〇若き愁　飛騨　南みね子

遠山紅葉の錦して、
空ゆく雁の鳴く聲に、

そゞろ望郷の情たへず、仰ぎ見る哉南を。
幽想多き秋の香に、胸の想の亂れては、
文字脊く壘も紅に、炎え出でゝぞや故里に。
寂しき宿の白壁に、我れにもあらず映しみる、
君のやさしきみ姿を、嬉しさこそは思ひしが。
あゝ果敢なきよ我が戀は、一年を過ぎぬそのまより、
山の紅葉のそれのごと、わづかに繋ぐ蜘蛛の糸。
妬みて痩せし面影や、果敢なき戀を嘆きつゝ、
夜毎にもたえ消えやらぬ、こは執着の切なさよ。
胸に惱みを誘ひては、君を忍びてやつれたる、
果敢なきむくろなよ〳〵と、影も沈みぬ、秋のくれ。

〇元の露

東京　倉重千惠子

磯山松に夕あらし、岩にくだくる白浪の、
いやが上にも音たかく、あはれや、今日も終んぬか。
波を彩ろくれなゐの、夕日は暫したゆたへど、
沈まば盡きん今日一日、さらばわかれをなげく共、
如何に名殘を惜しむ共、永久に止むべき術もなし。
浮世の旅にまよひ來て、結ぶも假の草まくら、
朝に紅顏ほこれ共、逝かば終らむ身の一世。
見よ老人の只一人、磯邊に立ちて物思ふ、
やがて假寢の夢さめん、さらば、絆の強く共、
如何に名殘を惜しむ共、永久に保つべき命ならず。
夕日は沈み星いでゝ、我が塵の世の夜の風、
若き血汐も色あせて、戀もいつしかさらめやらむ。
斯くて浮世の夢さめて、母なる土に歸り行く、
我が世の楼の哀れやな、うきよかこちし老人の、
行衛いづこと眺むれば、無言の光星一つ。

〇横濱に米の艦船を見て

横須賀　大澤まさ子

ねぐら求むる夕烏、彼方此方に三四五羽、
薄きグレンの彩雲は、西の御空にたなびけり。
今や田畑の農夫等は、一日の業を了へ果てゝ、
すきくわ肩にかつぎつゝ、樂しき家の歸途ならん。
沖にすなどる漁夫等は、數ある得物なかめては、
船歌船音合せつゝ、樂しき家の歸途ならん。
此所は名に負ふ貿易港、自然のなせる美々しさは、
影も形もなけれども、巧みし美麗の横濱よ。
海には數十百艘の、商船は林なし、
岡には大厦高樓の、いらかを並べ立てるあり。
我れが交友北米の、十有六双艘閲船は、
去んぬる十有八日に、此の横濱に入りにけり。
我が帝國の軍艦は、此れが接伴なさんとて、
舳艫銜んで十數艘、又横濱に入りにけり。
今しも暮るゝ夕もやに、朧々とかすめども、
さすがに高き國家をば、代表すなる戰船。
商ひ船とくらべては、變形に何處となく、
犯しがたなき端嚴も、威容を供へ浮ぶなり。
日は早や全く入り果てゝ、あやめも分かぬ眞の暗、
沖には船の燈火、岡には軒の電氣燈。
イルミネションに船躰を、現はす艦の一隊は、
此れぞ日米兩艦の、互に敬意かわすなり。
噫盛なり美麗なり、深き水底の龍宮も、
此の水の面の盛觀に、比しては雲と泥ならん。



東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

佐渡の海渺々として三十里
　秋はや寒き波の音かな
美濃國町新道　松田文子

（評）ことさらに漢語を多く用ゐてこちごくしきは女の歌にふさはしからねど、此歌の如きは漢語の調なだらかにしてよし。

地

小木曾路や夢もつめたき旅籠屋の
　筧のおとに母をしぞおもふ
飛驒國高山大宇町方板殿方　中西よし子

（評）筧のおとの一句、さびしき旅籠屋をあらはし得てよろし。

人

あめのひを鼓しらべてくらしけり
　とふひともなき山かげのいほ
須磨　有村よし子

（評）よき人の靜かにすめるなりどころなるべし。

秀逸

◎
駒鳥の啼くこゑのごか酒つくる
　小村はづれの茶の畑の道
岩代　樹口ゆき子

◎
病める母荷馬にのせて山奥の
　いで湯浴みに行く秋の山道
相摸　服部八重子

◎
泣かば泣け死なば死ねさてたそがれの
　淋しき秋を撞くか鐘守
横須賀　柏原美奈子

◎
冬枯の庭にさびしく咲き出でゝ
　菊高く香ふ白菊の花
東京　牧　千春子

夢
さめてなほうれしきものはなつかしき
　なきちゝはゝにゆめにあひたる
須磨　有村さみ子

◎　美濃　呉美勢子

筆されば逢ひ見し心地書かまくさ
思ひし事の中ば忘れぬ

折にふれて　神奈川　飯田榮子

順禮の道とふ背なに日は落ちて
木がらしさむき山かげの道

歳暮　東京　中村千代子

たらちねの上安かれといのりつゝ
事なく過ぎし年の暮かな

湖　岐阜　傍島敏子

なつかしき君と語れる心地しぬ
朧月夜の遠しほの音

◎　南品川　杉田粲子

賤のめが大根をあらふ里川に
紅葉ながれて秋はくれゆく

◎　美濃　傍島眞紗子

猿曳の少女三人がかへり路の
月に小錢をかぞへゆくかな

◎　美濃　芳翠敏子

さすらふればなつかしげにも思はれて
遠潮きゝぬおぼろ夜の月

◎　美濃　松田重子

桶つくる翁の家や菊咲きて
低き庇ににはとりの鳴く

◎　相摸　山本久子

枯葦の根もとの氷裂くる音す
漕れる船の揺るゝにつれて

落葉　河内　竹内たれ子

ぬればとの翼やすむる山門に
雨あし細く紅葉散るなり

紅葉　東京　白井好子

名もしらぬ小草の葉さへ色づきて
秋おもしろき野邊の細みち

殘菊　山根しげ子

枯たてる尾花がくれの蕊原に
さびしく殘る白菊の花

◎　神戸　神谷ひろ子

何をするいとまもなしと年ごとに
日のみぢかきをわぶる頃かな

◎　福島　伊東善子

庭鳥のひな連れだちて鳥屋を出でぬ
紅葉みだれて霜寒き朝

◎　山根よし子

はたをおる妹が歌聲聞こえきて
みのほす垣ににほふ白菊

甲

○ 岐阜 中村はな子

鬢白き翁熨うつ山茶花の窓しめやかに冬の雨ふる

○ 上野 小野里鶴子

我が庭に咲きみだれたる菊のはな吹く風ごとに香ばしきかな

○ 清國 福田つる子

反古はりの障子は堅くさざゝれて霽しづかなり稲刈の時

橋 東京 白井敬子

おばしまのはしらの文字も見えぬまでくちわたりたる里の板ばし

茸狩 河内 竹内久子

さがしえて母に木のこをすゝむるはわがとるよりも嬉しかりけり

紅葉 愛媛 巽秀子

よひの間の露やそめにしけさ見れば岡のもみぢの色いでにけり

歳暮 須磨 有村紫芳子

なすことはみなゝしをへて除夜のかね火おけのもとにかぞへつる哉

初瀬に至る途中晩鐘を聞きて 美濃 各務不美子

入相のかねの音すなりこもりくの初瀬の宿やちかづきにけむ

雪 田代貞子

めなれたる松の姿もうづもれて今朝めづらしく雪ぞつもれる

秋さむ 下總 月沖ゆり子

秋さむの葡萄のたなの下ありき知らでふみにし誰の細櫛

冬灯 横濱 鈴木まつ子

すきまよりもれくるかぜに灯のゆらくもさむくおもえけるかな

古寺霜 東京 奈良八重子

古寺の破れし芭蕉に霜さえて月ものすごし狼の聲

歳暮 須磨 有村繁子

なにとなう心ばかりはせわしくてうたもよみいでぬとしのくれかな

秋朝 常陸 脇坂須磨子

そばの花わたの實白きゐなか道秋はや寒く朝しものふる

○ 東京 平塚つゆ子

所せくまゆくづほせし諸院や小春しづかに山茶花のちる

菊 大阪 木村春江子

別れてはうつゝともなくたつ野路のみきもひたりも黄菊しら菊

○ 美濃 傍島みゆき子

もらひ風呂となりはとほし月かげに男鹿なくなる山のほらみち

折りにふれて 美濃 遠山よしの子

菊の鉢窓にならべて琴ひきぬ小雨そぼふる君も來ぬ日を

枯野 美濃 日島まさ子

野は立ちてざんげをさけぶ聲かそも枯野の末をふきすさぶ風

○ 神戸 足立ゑい子

汲む人も老せぬかげやうつるらむ菊の香うかぶ山川の水

虫 牛込 芦原浦子

まれ人に風情もあらぬ山里のほこりは虫のこゑのみにして

○ 横須賀 藤原下枝子

寒月や御堂の前にぬかづきて祈る少女の横顔白き

○ 横須賀 高橋つれ子

杣の子が山の落葉をかき集め焚火して居る霜白き朝

○ 横須賀 渡邊比佐子

苔深き庭の飛石雨晴れて芭蕉に細う秋の灯もるゝ

○ 飛騨 南みれ子

與謝の海濱間に千鳥汝か泣けば去年舟路をしのびて泣きぬ

時雨 越後 岩本芳子

神さびし稲荷のとり居かたぶきてやしろにそゝぐ初時雨かな

○ 横須賀 小野ゆき子

小春日の庭に藁うつ村人に花咲く里の名をたづねけり

讀者文藝

松影映水　美濃　各務照子
あさ瀬たもみごりのふちとなしてけり河邊の松のかげをうつして

○　岩代　岸野せい子
君が家は千草の花につゝまれて宵月川に灯かげするかな

雪　神戸　脇村いわ子
よべのまにふりしや庭の枯芝に花と見るまで積る白雪

古寺霜　和歌山　曾根田素子
さえし夜の朝とく見れば山寺の朽ちし軒端に霜ぞおきける

秋の眺　茨城　金澤すゑ子
なみの音の折々ひゞく海の邊の小高き丘に秋の山みる

雲　美濃　平岡かん子
彼の雲に母やいまさん彼の雲に父やいまさんみそら戀しさ

○　岩代　岸野菊子
朧なくや秋雨ほそき奈良の街宵のともしの影淡うして

○　美濃　渡邊ひろし子
煎じ藥母にすゝむる眞夜中の板戸にさびし木枯の風

○　下野　井上尙子
落葉燒くかごに友まつたそがれを雨ふりてきぬ鐘なりそめぬ

○　南品川　岡本やす子
ふきかはる夜半の寒さにけさ見ればかけひのみづもこほりそめけり

逝く秋　神戸　今西操子
軒近う木の葉みだるゝ音はしてわびしさそふるいたつきの窓

○　美濃　傍島小枝子
去年の今日妹は逝きけり思出でに見る紅芙蓉花のしぼめる

○　麻布　倉重千惠子
古碑字なく草いたづらに冬枯れて寒月凄く昔をぞかたる

○　東京　神田けい子
いたはりし籠の虫逝きて秋行きてせめてかぞへぬ殘る紅葉を

乙

折りにふれて　神田　萬屋ゆき子
かりそめに世の交りと思ひしにいつしか戀ふる身となりにけり

鎭守祭　北海道　清水清子
愛孫の武運を祈る誠心に神馬ひきゆく御社のもり

○　群馬　小野里佐久眞子
何事も都に遅る我里にはや降そめし今朝の白雪

古寺霜　神戸　古在敏子
供へまつろうつはもわれて古寺の御佛あはれ霜のおくなる

○　上毛　吉田しづ子
あやしげにかたむきかちやし山門に星すごき夜半霜おきまさる

世治文事興　美濃　各務淑子
あだ浪ししづまりはてゝ人こゝろすゞりの海にそゝぐ御代かな

雨中落葉　東京　中村時子
風もなき雨にもろくもちりてけりしふ〳〵そめし柿のもみぢば

秋海　田代貞子
あれやすき秋のうなばら事もなくめでたく通ふあめりかの舟

○　兵庫　湖東澄子
春は來ぬ世はさながらの秋空に八千草うたふ妹が娛して

○　須磨　有村もとゐ子
いわし舟いまはいりけんうらかせもしづけきよはにあまのかしまし

橋上雪　埼玉　横田稻子
さむかりし石山おろししづまりて雪ふりつもる三輪の古鄕

米國艦隊を迎へて　神田　紀藤榮子
外國の艦を迎へて今日此處に君が恩を分つうれしさ

○　神戸　足立あさ子
賤の女が願ひもかたき石佛蘚そのまゝに野菊手向る

○　　　　兵庫　湖東靜子

浪の音落葉さそうる風の音たゞもの寂し行く秋の家

秋草　　　　埼玉　横田やな子

もみぢ散池のきしれのかゞみ草みるかげ淋く秋さびにけり

紅葉　　　　神戸　絹本靜子

うすくこく時雨に染まるもみぢばの日をへてまさる秋の山々

有明月　　　　佐賀　藤松りか子

のこりなく木の葉はかぜにはらはれてひさりかゝれりありあけの月

○　　　　美濃　長濱關子

木曾少女七つの駒の手綱とりてふゞきに立ちぬ馬市の朝

雲　　　　美濃　傍島曉子

艶紅色に黄紫きにありとある色に色へし築波嶺の雲

○　　　　岐阜　文野さかへ子

おば訪へば砧うちやめてほだたきて燒芋たびぬ吹雪する夜や

秋の山行　　　　埼玉　横田秋子

秋ふかき山ぢの末のくろみ原まはしもあへず山がらのなく

○　　　　岩代　岸野登代子

水災のおもかげすごきにはか江に月かげさむく芦の花ちる

○　　　　美作　鈴木錢子

あこがれて月しく庭に下りたてば笛の音聞ゆ美くしの夜や

菊の露　　　　名古屋　高橋かき子

はらくさ手おりし菊の露ちりて四つくのあさやかほりたつらむ

○　　　　美濃　原もさ子

男ゆゑに涙の面はかくしませどきしる車の止めたくもあるらん

月前梅　　　　磐城　水幡きよ子

めぐり逢ふ嬉しさ餘まる望月の窓にあふれて匂ふ梅かな

初雪　　　　新潟　水野やすゑ子

添乳すと胸かいひらく朝まだき襟元寒き初雪の風

懸賞募集新規定

從來の如く、兼題、及雜題和歌、短文、新體詩、俳句を懸賞募集す、その規定左の如し。

すべて天地人の三等に分ち、天は金壹圓、地は金五十錢、人は金三十錢を賞與し、猶選者に乞ひて、特別秀逸の作ある時は規定の天賞一圓以上五圓迄の賞金、又は名家の式紙短冊等を賞呈する事あるべし

投書用紙は半紙に限り、短文新體詩はもとより、兼題も二つとも別々の用紙にしたゝめて、姓名を其傍に記すこと、但し投書用紙に本誌廣告欄中にある投書箋を添ふべし、投書箋は一人一枚に限る、投書箋添付なき者も選に入るを得べけれど賞品を呈せず、但し投書箋は來一月號に挿入二月號より實行す。

字體は歌といはず、すべて漢字は楷書に限り、〆切は前月十日までに着するものを採る。

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せざるのみならず、其投稿を沒書にすることあるべし



内藤鳴雪宗匠選

天

秋行くと案山子に語る鴉かな　美濃関町新道　松田雪子

地

寺町の闇から出たり鉢叩　横須賀深田三直高橋方　小野ゆき子

人

御佛の餅つきに行く冬至かな　下總佐原磯屋方　月沖ゆり子

小春日の日なたぼつこや洗ひ髮　美濃　松田萩子
餅つきに來るや田舍の弟子角力　横須賀　高橋つれ子
年忘れ醉うて件の如く候　岐阜　傍島敏子
雫もてかきしさ菊の手紙かな
功成りてたふれし霜の案山子哉　美濃　松田星子

枯草に兎の糞や水涸るゝ
時雨るゝ日京から手紙着きたりき
背の子の花火指さす村はづれ
歌ひ女のくさめして行く霜夜哉
木枯や大空の星飛ばんさす
菊襲紅葉衣はやゝふりて
何さわぐ鳥百羽や霜の朝
刈り殘こす磯田三畝や行々子
糸切れて琴に恨みの夜長かな
朝寒や大佛樣の眼の光り
ぬのこ着て田の働きや秋の末
雪沓や朝月踏んで山に入る
せゝらぎの音くれ殘る枯野かな
鐘つかで奈良は古りけりくれの秋
歌習ふ男ありけり菊の宿
雲切れて寒月さしぬ裸山
袖に隱す貧乏德利や霰打つ
乳牛の一合腹や秋の風
鷹下りて物嚙んで居る枯野かな
菊もちて馬に後るゝ舍人かな
旭出でて尙ほ氣高しや菊の花
我が庭や松五六本秋のくれ
新藁に草鞋作りし別れかな
寒林の枝數ふべし廿日の月
寫眞場のガラスの屋根や月寒し
飛で居る蝶もありけり霜日和
ぬるま湯におしろいなさく小春哉
小波な追ひゆく松の落葉哉

岩代　樹口ゆき子
美濃　松田月子
神戸　今西操子
新潟　水野やすゑ子
福島　伊東善子
美濃　松田武子
靜岡　鈴木いわ子
遠江　夏目かく子
美濃　傍島小枝子
兵庫　木村まさの子
横須賀　藤原下枝子
神奈川　杉義登代子
相摸　部服八重子
美濃　平岡かん子
美濃　渡邊ひろし子
美濃　吳美勢子
美濃　松田幹子
岐阜　文野さかへ子
岩代　岸野常子
横須賀　其原美奈子
美濃　松田春子
美濃　目島まさ子
東京　紀藤榮子

明月や大平洋に船一つ
お隣の留守を預る夜寒哉
淺間山煙立てつゝ眠りけり
子の日待つ小松の色や枯野原
新田はたゞ廣々さ冬の月
年ゆたかいなほ波よる秋の風
秋風に聲も震ひぬ筏人
此袖をちゞめてかなし年のくれ
古川のごてのくづれに虫の聲
秋雨や小供の唄も傘の内
川越に渡しの船の日暮かな
春待ちて錦織る家の灯かな
すゝ掃をよそに狂女の小唄かな
時雨ては晴ては奈良の秋古りぬ
行く年を知らで酒呑む男かな
山茶花や鳥居をくゞる日向道
犬さわれ走り競べや月の下
貰うた子に折りて持たせぬ萩の花
霧の噉月になりゆくけはひ哉
會葬の人後先や村時雨
掛稲やたわゝになりし竹の竿
冬の夜を名妓の昔し語り哉
寒寒雀千朶の繩に來てさまろ
塚に吹く野分や老いしきりくす
黄菊白菊國の光さいはんかな
淡路島戀に千鳥はなかずさも
寺参り姉さ妹さの頭巾かな
汐痔の松風さむし浦の月

美濃　遠山よしの子
東京　萬屋ゆき子
神戸　足立あさ子
美濃　長濱關子
神戸　錦本靜子
安藏　秋山吹子
美濃　傍島みゆき子
大阪　木村ゑい子
横濱　廣瀨こう子
横須賀　渡邊比佐子
大阪　木村春江子
美濃　松田涙子
木曾　山下さう子
名古屋　古屋たま枝子
相模　山本久子
美濃　松田花子
岐阜　中村はな子
相模　柚木さよ子
飛驒　南みれ子
新潟　岩本芳子

秋風や紫さめし戀衣
道中をお練の笠や赤蜻蛉
萩咲くや文奇き習ふ姉妹
海士醉うて船に戻れり夕月夜
降り止んだ御庭の雪や朝月夜
ゆきつもろ古城の松よ三日の月
髮結ふや鏡臺低き夜寒の灯
法要に靠うつ庭や菊の花
里は皆くれて赤城の雪白し
顔見世の夜風に騷ぐ幟哉
松風に吹かれに出たり寒念佛
魚屋に集る犬や町の雪
行く秋を蝶の老いたり寺の庭
待宵を臼挽く音や野路の家

横須賀　齋藤松代子
名古屋　村瀨せい子
群馬　小野里佐久良子
東京　倉重千惠子
美濃　松田君子
岩代　樹口雪子
群馬　小野里鶴子
横須賀　小野ゆき子
下總　月沖ゆり子
美濃　松田直子
神戸　足立ゑい子

女子教育講演會

久しく中絶したりし女子教育講演會は來四十二年一月より毎月一回開催、諸名家の講演を乞ひて、その筆記は毎號本誌に掲載すべし、而して本誌讀者諸嬢はこの講演會に無料傍聽するを得

本誌の新年號

本誌は第九月號より、漸次發展を試み多少面目を改め來りたるが、來四十二年即ち本誌第十九年の、新年號より紙面に破天荒の改善を見るべし、

先づ卷頭を飾るべき寫眞版は、本誌に於て初めて得たる、殊に德川達孝伯、松平直之伯、正親町實正伯、松平乘長子、本莊宗義子、德川厚男、井伊直方君其他貴紳數氏が本誌の爲に特に撮影せられたる寫眞の如きは實に天下の珍品、猶一月號より閨秀名歌十二ケ月、昇雲畫伯の女風俗十二ケ月を連載すべし、

本文に至りては、諸名家の趣味津々としてつくるなき、而も實益の件へる卓說高話數十篇を載せ、これに盛んなる裝飾を施すべし、その細目は天機洩す可らす

定價

	前金	定價
一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾二册	前金	貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料

五號活字一行廿三字詰

	四半頁（十六行）	半頁（三十二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收さ御承知あり、たし◎領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし◎爲替は四谷區霞ケ岳町卅九番地中川愛氷宛に願ひたし◎御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年十一月廿八日印刷
明治四十一年十二月一日發行

東京市四谷區四谷霞ケ岳町三十九番地
編輯兼發行人　中川頁平
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人　佐藤保太郎
東京市四谷區四谷霞ケ岳町三十九番地
發行所　女子新聞社
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　中屋商店活版部

共立女子職業學校編物組絲主任敎授
豐原繁尾子先生著

組絲敎科書

全一册

葛布和綴美本
定價金八拾錢
郵税金六錢

女子の手藝敎育は年に月に其歩を進め、本年文部省に於て組絲編物、造花刺繡等を、女學校手藝敎科中に編入せられ、其敎員撿定委員を任命し、試驗を開始せられてより、此等實藝に關する世人の注意は更に一層の厚さを加へ、從て之が敎科用及敎授、受驗參考用書籍の需要も亦愈其急に迫れり然るに世間未だ此等諸科の敎科用に適すべき完全の著書なく、就中組絲法の如きは從來職人の間に秘せられ居り、未だ書籍として公にせられたるもの一もあるなし、此を以て敎習共に些の據所なく不便殊に甚し、此書は斯道熟達の豐原先生が、多年の研究熟練により其難易程度を考へ、敎科用に適すべく、又初學者の楷梯となるべく、最初絲の取扱方より、順を追うて羽織紐、帶止等其他種々の組紐、打方を一々圖によりて詳述せられたるものなれば、眞に世間無比の珍書といふべく、敎科用にも、家庭自習用にも、又敎授及受驗參考用にも、必缺く可らざる良書なり

左記書籍も亦各專門諸先生の筆に成り、組絲敎科書と同樣に編纂せられたるものにて、手藝に志す人は必ず一本を備へざる可らず

共立女子職業學校編物組絲主任敎授
豐原繁尾子先生著

編物敎科書

全一册
定價金五十五錢
郵税金六錢

前同校刺繡主任敎授
木村仲子先生著

刺繡敎科書

全一册
定價金五十五錢
郵税金六錢

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話新橋八八番、二六九三番　振替貯金口座壹壹七八番）　株式會社　國光社

大賣捌　◎東京　上田屋、東京堂、東海堂、良明堂、至誠堂、須原屋、北隆館、文魁堂、春祥堂、榮進館◎大阪　東區北久太郎町積文社◎名古屋　星野書店



日曜日は赤紙刷 ★ 土曜日は青紙刷

日刊新聞

女子新聞

世界唯一

◎發行延期

女鑑擴張の爲、明治四十二年四月五日に延期、同日必ず第壹號發行

女子新聞は、通俗にして穩雅なる文字を以て、大方女子諸君の耳にすべき社會の出來事を報道し、其問題ともなるべきものは、擧げて諸大家の高見となり、事に後れずして每號の紙上に現はるべく、尚連號家庭教育の一助ともなるべき小說講談を掲載し、且雅麗なる木版寫眞版を挿入すべし、

女子新聞は、文字繪畫の排列に多くの意匠を費やし、紙質の良好と印刷の美麗なるは他に比較なかるべく、廣告の末に至るまで、一畫だも不快文字なし、

女子新聞は女子諸君の和歌小品文の寄稿を歡迎す、尚每號一技一藝に秀でたる諸孃の小照、及び團欒の家庭を紙上に映出すべし

更に其內容を頁にて分くれば

第一面 社說及諸大家の論說、詞苑、小說、講談等を掲ぐ

第二面 政治及社會の出來事を何人にも讀み易く解し易きやう平易に記述す

第三面 婦人界の出來事、家庭訪問記、諸般の女藝、すべて家庭に有益なる諸記事を載す

第四面 紹介して不都合なき廣告

女子新聞發行に就て

日刊新聞は、社會萬般の事情を知る上に於て、男女共通の讀物たらざるべからず、然るに廣きを求むるの結果雜駁に過ぎ、時流に投ぜんとして自然主義に陷るの弊あり、もし善良なる家庭に於て、聲を大にして全紙を通讀し得らるゝ新聞は之を問はゞ如何に、たゞ首を傾けて指を折るに苦しむのみならん、故に新聞を讀む人の多くは、時勢に後れざらんことを期して、却つて望ましからぬ傾向を進むるの恐れなきにあらず、予素より不敏の一寒生、到底潤澤の資本と、多數の名士とによつて成れる、新聞社の多き中に介立して、花々しき藝當は演じ能はざるも、風俗改善の旗幟の下に、婦人の常識を養ひ、延いて家庭を和樂に導かんことを期す、幸に社會の或一部分の空氣をだに淸うするを得ば、本紙發行の目的を遂行し得たるものと信ず、

中川愛氷

東京四谷霞ヶ岡 女子新聞社 本社にて女鑑發行

女鑑

明治四十一年十二月一日發行　每月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾八年第拾貳號　第三種郵便物認可